

結  
婚  
愛

マリィ・ストープス著  
平井 潔訳



## 著者の言葉

マリー・ストープス

今日ほど幸福な家庭が必要とされる時代はない。この本によりその幸福な家庭の数を増すことによつて、同胞の役に立つことが私の希望である。この本の目的は、結婚の喜びを増加する事であり、またどうしたら多くの悲しみを防ぐことが出来るかを示す事である。

今日国家の最も確固たる基礎は、一つ一つの結婚を堅く結び合せる事である。だが、もし多くの結婚が不幸であつたら、国家の基礎には腐敗と墮落が生じる。

今日、殊にこの国の中流階級では、結婚はその表面に現れたものより、遙かに不幸なのである。喜びを期待して結婚した人々の多くが、痛ましく絶望している。そうして「自由」への要求が高まつている。一方、声を大にして「自由」を叫んでいる人々は、彼等の不幸の原因が「結婚の絆」にあるより、むしろ多く彼等自身の無知にあるんだということに気付かない。

結婚を楽ししいものとする事は、決して容易な事ではない。それは自己主義者や精神的な臆病者には成し遂げえない事である。知識が必要であるのだが、今日の状態では、その知識は、それを最も必要としている人々の手にはなかなか入りにくい。

性生活の問題は、恐ろしく複雑であり、その解決には同情と科学的な研究が切に要望される。

私は性について、少しばかり語りたと思うのだが、それは、私の知る限りでは、これまで語られた事のないものであり、結婚を美しくしたいと望む男性や女性に取つて根本的に重大だと思える事柄である。

この小さな本は、研究の記録というよりはむしろ長い間の複雑な研究の明確な結果を、本当に分りやすく、発表しようとする一つの試みにすぎない。この本の平明な記述の基礎となっているものは、数多くの直接観察と、あらゆる階級ならびにあらゆるタイプの男女の打ち明け話、そして広い読書によつて集めた事実なのである。

結婚という永年の研究課題に対する私の独創的な貢献は、主として、第四章、五章、および八章に見い出されるであろう。その他の章で私が描きたいと望んだのは、結婚の中に潜んでいる美と、その真実との、歪められない一つの絵である。

全文は、簡單平明に、読書に馴れない一般の人をも目標として書いたつもりである。もっとも、この中には、性問題や人体生理について科学的な研究に従事している人達にさえも、注目すべき幾つかの観察が含まれているかも知れない。これらの観察は、補足してもっと長いものとし、もっと科学的な用語で、別に公刊するつもりである。

私はここでは、大抵の科学の書が主として扱っている、人間の多様性や変態性については触れない。また救い難いほどの不幸な結婚によつて引き起こされる多くの問題についても述べない。

もちろん、結婚生活には、この本で扱われていない他の局面がある。例えば、第九章（子供）は、結婚後二年目か三年目の大きな問題を引き出すことになる。しかしこの問題については、私は他の二つの書物、「輝ける母性」と「賢明な親」の中で取り上げる。

本書『結婚愛』では、私はお互に相手の異性の体の根本的な性質を殆ど知らない若い人々の性関係の一般的な問題について語った、以下のページは、病的な文学や戯曲の人物ではなく、ノーマルに近

い人々のために書かれたものである。これらの人々は結婚し、あるいは、結婚しようとしており、その結婚を美しく幸福なものとして望みながら、その方法を知らないでいる。

沈黙を守りたがる人、あるいは因襲的な人から見れば、複雑な人体機能について余り突っ込んで語ることが、無遠慮でもあり、余計な事のようにも思われるだろう。彼等は尋ねる。「本能だけで十分ではないか？」と。答は否である。本能だけでは十分ではないのだ。人間の他の活動では総て、伝統を受け継ぐために訓練が不可欠であることは明らかである。サリー・ビー博士はその点を巧みに指摘した。——猫は新しく生れた子猫をどう取扱ったらよいのか知っている。どう育て、どう教育するかを知っている。ところが人間の母親は、直接に訓練されるか、あるいは他の母親を抜け目なく観察して自分を鍛えなければ、どうして赤ん坊を取扱ったらよいのかも分らない。猫はその単純な義務を、本能によって果たす。人間の母親はその複雑な義務を果たすためには、訓練を受けなければならぬ。性の微妙な領域においても、同様なことが云える。この国では、そして現代では旧からの伝統、両性の欲求に対する深い基礎的な知識は、失われてしまった。そして赤面するような、あるいは粗暴な、個人的ゴシップのヒソヒソ話だけが、語られるにすぎない。ときたま、立派な伝統を持った家庭では、若い男女が結婚の神秘について少しは学ぶことも出来よう。しかし、わが国の大多数の人々には、人間として最高の生活技術、すなわち恋愛の技法を少しも身に付けてはいない。一方、進歩的な生理学とか医学とか称する本の中に、赤裸々な事実についての欠陥や、遺漏や、間違った記述があるのは驚くべき事である。

私は、最初の結婚で、性的に無知であったため怖ろしいほど高価な犠牲を払った。そして私が、こ

のような犠牲を払って手に入れた知識は、人類に尽くすために皆に分かつべきだと感じている。この小さな本の中で、普通の健康な結婚した男女は、二人の共有物である幸福の鍵を見出すだろう。この本によってすでに幾人かの人は幸福へと導かれている。そして、私は多年、心痛と、暗闇の中での盲目的な手さぐり時代を過している、さらに多くの人々をこの本が救ってくれたら、と希望するのである。

(一九一八年)

# 目次

## 5 目次

著者の言葉	1
第一章 心情の渴き	9
相寄る二つの魂	9
情熱の法則	12
第二章 悦びの破れた時	15
蜜月に忍び寄る暗い影	15
すすり泣く花嫁	17
愛の行為と失望	19
第三章 女の「わがまま」	23
新妻の気まぐれ	23
本来不合理なものか	26
愛の潮の憧れ	29
売春婦の嘘	34
第四章 根本的な衝動	37
創造する衝動	37
女性の性リズム	41

	二週間ごとの周期	44
	モーゼの掟	48
第五章	相互の調和	53
	男の特質	53
	男性の機能	55
	自制と求愛と	58
	女と男の違い	60
	美しい営み	62
	相互の調和へ	65
	性行為の目的	69
第六章	眠り	74
	妻の不眠症	74
	女の神経衰弱	77
	性生活の効用	80
第七章	はにかみとロマンス	85
	生けるヴァイナス	85
	寝室を別にすること	87
第八章	節制	91



7 目次

第九章	子 供	97
	キリスト教と禁欲主義	91
	自然にそむくもの	95
	聖なる浪費	97
	結婚は早く出産は遅く	100
	妊娠中の調節	103
	つわりについての迷信	107
	簡単な障害	109
	信じられないほどの無知	112
	産児調節の哲理	115
第一〇章	社 会	119
	男の移り気と自惚れ	119
	自由とそして信頼と	122
	「嫉妬」と孤独への憧れ	124
	女の理想	128
	売春婦へ走る心理	130
	愛情の力	133
第十一章	光栄ある発展	136

性愛の神秘	136
若者たちに知識を	138
Marie Stopes の著書 (山本宣治)	143
著者紹介	148
訳者あとがき	149

## 第一章 心情の渴き

彼女は、恋の意味を彼に理解させた。恋という言葉を口にする人は多いが、その意味を説明出来る人は少ない。彼女と共に、彼女を想う心の中に包まれてみて、彼は、恋こそ我々の生活の新しい出発を意義付けるもの、豊かな土にしっかりと根を下ろした樹の美しい若枝である事を感じた。恋の感覚は、二人の生身の活力となつて働き、心と心とが結ばれ、魂と魂とが全身をあげての結合によつて一体となつてゐる事を、悟つた。つまり、地上の息子や娘の幸せな前途は、単に幸福という以上のものを予告しており、それはまた禁欲の暗礁と肉欲の渦巻との間を彷徨さまよつてゐる現実の我々が、今はまだおぼろげだとはいへ、やがて、人類のより高潔な種族を創りだすようにさせるだろう。

——ジョージ・メレデイス作『十字路のダイアナ』第三十七章より——

## 相寄る二つの魂

誰でも、思春期に達すると、結婚する相手（メイト）を欲しがるものである。不思議なことに、自然は私達人間をただ一人では不完全であるように作つた。男でも女でも一人では人間の機能が本当に働く喜びを味うことは出来ない。また女でも男でもどちらか一人だけでは新しく人間を創りだすことも出来ない。この事實は、人間の体の外観上の相違となつて現われ、それぞれの生涯を特色付け

る。自分以外のもう一つの魂との結びつき、また、その結びつきによって自己を完成すること、それこそあらゆる人間が魂の奥底から渴望している第一のものである。

若い人々の内部には、特に腐敗した病的な機能を遺伝していない限り、総て人類の古くからの欲望が、原始的な美しさを持って新たに芽ばえる。

青春期の夢と肉体的変化が生れるにつれて、種族本能の靈妙な力強い衝動が男女青年に訪れる。次第に日立ってきた両性の肉体的な相違は、お互いを神秘的に、誘惑的に、魅力的にする。両性の相違は男と女とを結びつけ、男女の肉体的な結合の土台となり地上を被い尽くす大きな美しい織物となる。その織物は、ある物は薄い蜘蛛の網よりも軽く、音楽の調べよりも柔かく、五色の虹に彩られている。目に見える虹ばかりではなく、魂の波長の目に見えない輝きに彩られている。

例え冷笑的な風を装つたり、俗っぽく見たり、私利に汲々した態度をして見せても、若い青年の心は皆配偶者との生涯の結びつきについての美しい夢を実現したいと熱望しているのだ。青年達の心は本能的に知っている。ただ一人メイト（結婚の相手たるべき人）だけが、自分の魂の中に潜む偉大なものを完全に理解もするし、白髪になつてからもなお残っている子供らしい好奇心を優しく笑つてくれたりするのだという事を。

結婚の相手——恋人——を探すことは、異性の美しい肉体の中に包まれている、理解ある心情を探し求める事である。

今日の社会では、結婚生活に入る場合特に苦勞して結婚というものを研究したり、意識的に避けたりする人は少い。私が今話しかけようとしているのはこう云う人達、つまり特別に熱心な人とか特

別に不熱心な人ではなく、ごく普通の人達である。我々市民の大部分は、男も女も結婚のチャンス待ちかまえ、相手を探し求め、あるいはあれこれと心を惹<sup>ひか</sup>れるものへ気を移したりしたあげくに、「話が決まり」、結婚するのが普通だ。

幸福を願わずに結婚するような、本当のニヒリストはそんなに数あるものではない。例え多くの若者が言葉で否定し、この嬉しい希望を冷笑的な態度で覆い隠していても、彼等は、新たな光栄ある身分へ一步を踏み入れる事をチャンと自覚しているのだ。その事は、彼等の朗<sup>ほが</sup>らかな顔つきや、快活な動作によく表われている。婚約者のキスや手の触れあいには興奮剤に似て、ぶどう酒のように若い血潮を湧き立たせる。二人は詩を読み、音楽に聞き惚<sup>ほ</sup>れる。音楽は二人の鼓動の歌にこだまする。そしてお互いの眼の中に世界の美しさの反映を見る。この天上の陶醉のただ中で、彼等は自分達はその生涯の門口<sup>かどぐち</sup>にいたのであり、同時に精神的な結合の経験にこれから踏み入ってゆく事を知る。

敏感な、ロマンティックな、理想主義的な青年ほど、男も女も、自分の全身全霊を結びつける相手として、より熱心に自分に似かよった魂を求めぬ。しかし誰でも、最も散文的な人間でさえ、自分の欲求の尺度を持つているものだ。実生活の数多い例の中で、私はこんな話を知っている。非常に物堅<sup>ものがた</sup>い男性で、世間的な事柄には何でも成功したのに、本当の配偶者が見当らないばかりに、まるで魂の手足がもぎ取られたような味気ない日々を送っている。エドワード・カーペンター（無政府主義的傾向を持つイギリスの文明批評家、一八四四—一九二九）はこのような憧<sup>あこが</sup>れを美しく書き表した。

この世にはきつとこんな相手がいるに違いない。その人となら何もかも率直<sup>そつちよく</sup>に交換しあい、その人の前には何も隠すべきものがない。その人の体は自分の体のように、どこもここもいとし

く、その人となら所有物でも財産でも、私の物だとかあなたの物だとかいう必要がない。その人の心の中に自分の思考は自然に流れこみ、同化されて新しい輝きを持つ。その人と自分の間には、人生のあらゆる喜びにつけ悲しみにつけ、無意識の反応がある。これこそ、恐らくは魂の欲求する一番優しい願いの一つだろう。（恋愛成年期に達す）

### 情熱の法則

この本を手にされた人の中で次のような抗議をする方があるかもしれない。自分は、人間性の唯一の完全な表現であり、三位一体の根本的な一部をなすと云われる情熱を一度も感じたことがないと。もしそれが本当なら、恐らくその人は自分で知らぬまに重い病気に罹かかっているに違いない。その病気は、性感麻痺症まひである。この病気は先天的な冷感を云うので、普通の人間的な心優しい衝動やぶこに欠け、しかもその事を全く自覚まったしていない。こうした読者が人並の人間の隊列から落伍するということは、分かりきつたことだ。こんな場合は、誰彼の意見に従うより、かの「性の問題」という本を読んだ方がよい。「性の問題」（英訳本、一九〇八年）は、有名なオーグスト・フォレル博士が、読者が自分自身の本性を知ることが出来るように書いたものである。これを読めば、人間の広い範囲はんいに様々さまざまに分れる人間性のタイプの中の、どれに自分が当て嵌はまるかを発見するだろう。このような読者は私の本を読む必要はない。私の本は普通の男女について、普通の男女のために書かれるものである。普通の男女とは自分を不完全なものと感じ、一つの結合あこがに憧あこがれている。その結合により彼等は自分達の生活を、充実した豊かなものにするばかりでなく、強い力を蓄えることが出来るのである。そして

彼等は、新たな生命の創造者としての神聖な義務を果すべき地位に自分達を置くことができる。

人類の歴史には、個々人がこの恋愛と結婚の相手を求める人間自然の渴望を圧殺したばかりでなく、独身生活を最高の理想とした時代がしばしば見受けられる。この上もなく美しい表現と崇高な言い回しで、独身主義は世界的に広い愛であると宣言した。狭い、家とか子供とかの地上の人間愛に代わる物としてである。多くの聖者、賢人、改革者、狂信者がこの理想に見習って独身生活を送った。しかし、このような人物の一人一人は人類の標準とはならない、なぜなら、彼等は人類の主流から外れているから。彼等は花を咲かせる枝ではあるかもしれない。だが決して肉体を備えた実を<sup>みの</sup>実らせはしない。

この世において、魂は、滲透するだけのものではなく、媒体を通じて表現さるべきものである。我々は人間である以上肉体を備えている。そして肉体は魂の<sup>おきて</sup>掟に従うのと同様に、化学上や生理学上の約束にも従わねばならない。

もし我々人類全体が、肉体を全く無視した理想の追求に没頭したならば、我々の環境はたちまちに一変し、人類を語ることが出来なくなるのは明らかである。

ともかくも、我々は人間である。我々は皆お互に、法則に従って生きている。その法則の中の幾らかは理解されているが、残りの大部分は完全に我々から隠されている。最も<sup>もと</sup>完全な人間というのは、男にせよ女にせよ、自覚していると否とを問わず、我々の生存の肉体的な法則に、何らかの方法に従っている。それは魂が肉体から出来るだけ多くの援助を受けるが、同時に出来るだけ少ししか障害を蒙<sup>こうむ</sup>らないという方法である。人間は、肉体を無茶に使ったり、粗野に酷使したりすると、その肉

体に宿されている魂が、十分に表現されないままで終わってしまう。

根本的な法則を無視したり、放縦ほうじゆうに破り去ることによって、永遠の調和は乱される。近代の小さな禁欲主義者は精神的に成長しようとする場合、肉体の本能を満たさずに、それを破壊してしまう。だが、我々は魂を表現し得るためにこそ物質を形作るのだと宣言したい。だからこの肉体的生存の不滅の法則に闘いを宣することは実に厚かましい事である。そのような事をすれば、新しくすばらしい創造物が生れ出る立派な泉を無意識に、濶からすことになる。

平凡な例えたとを用いれば、二人の人間は異った電位を備えた一つの個体だと云えよう。別々に離れていれば、その中にある電力は目に見えない。だが正しい併置をすれば、電力は変化し火花を散らし、両者の間に輝かしく光が燃え上がる。恋愛とはこう云う物である。

太古からの人間本能の欲求する処であった愛する人の単純で美しい色をした肉体からは、新しい体を備えた生命が生れる。これは、自然界の驚異である。そればかりでなく恋人の肉体は人間の情感の限界を押し拡げ、孤独な、異性を知らない人には到底獲得することの出来ない精神的理解力が成長する。

これを読んでいる方で、自分達はそのような精神的な成果を伴なう肉体的経験は持ち合せがないと感じられる方が多いかもしれない。恐らく普通の幸福感からも縁遠いと。もしそうならば、その原因は、気付いている場合もそうでない場合もあるが、男と女との愛を支配する根本的な法則の中のどれかが破られているからだ。弓の正しい使い方を学んで初めてヴァイオリンから良い音を出す事が出来る。下の段階の法則を守ることによって、上の段階に一段登ることが出来るのである。



## 第二章 悦びの破れた時

この世の心の嘆きを静めるには一体どうしたらよいのだろう。笑う眼差まなざしの下に隠された、助けを求める無言の哀訴に、どう答えたらよいのだろう。

——『男の中の英雄』の一節——

### 蜜月に忍び寄る暗い影

幸福を夢みて、やつと永遠の理解とやさしさを共に分ちあう相手を見出みいしたという思いを抱きつつ、若い男と女は結婚する。

最初、一般に蜜月ハニームーンと呼ばれている時期には、今までにない自由さと二人の関係の甘さが、本当の幸福に思える。だが、果たしてそれがどの位続くものだろうか。多くの場合、普通に認められているよりもずっと短い。

結婚したての嬉しい頃には、若い二人は、お互いの肉体的根本的な法則について殆ど何の知識も持ち合わせていないことに気付かない。性的魅力の大部分は（人間だけでなく、あらゆる動物の世界を通じて）その一対いっついとなる男女の間の相違ちがひに基づもづいている。それらの相違をすべてウツカリ取扱うたために、このお互を引きつけた魅力が逆に二人を破滅へと追いやるのである。

だが、お互に理解し合っているという最初の幻想が、日ごとに新しい発見をするという喜びのストリルで支えられている限り、生き生きとした感動は、すばやく、楽しく駆け巡めぐる。だから恋人達は、

しつかりした本当の相互の理解を足下に踏み締めてはいないことに気付かない。幸福な恋人同士でさえ、宗教、政治、社会的風習、一般的な物の見方について意見の相違が見られることがある。だが、こうした事柄は、両方の善意、忍耐、知性などで、最後には調整することが出来る。なぜなら、このような事柄の中には、二人が一致しあえる共通点があるからだ。人間同士は、これらの人間関係の種々様々な問題について、非常にかげ離れた考えを持っているものである。しかし少くとも思考力を備えているから、それらの問題を検討し、幾世代もの間、公然と議論しあうことが出来たのである。

だが、最も根本的な致命的な性問題となるかどうか。性の知識の欠如は底知れないくらい深く、また至る所に広がっている。この問題を取り巻く霧と暗闇とは、我々を指導する人々に、あるいはその問題の研究に従事している人々にまで影響を及ぼしている。そして若い人達は両性の心身の上に根本的な相違のあることさえ知らずにその相違のために苦しみ始める。おまけに彼等はこの問題の本質的な解明を手に入れる事の出来る前途の希望すらないのだ。

自分達の幸福が曇らされ、破られたと思う人々は、多く、自分達の場合は例外なのだと考えている。そして幾人かの友人達の事を思って、自らを慰めている。その友人達は自分達が逃したような幸福を未だに手にしているに違いないと信じている。

これは一般に考えられる事だが、幸福な人々は、過去の色々な事件を経験していないものだ。こう云う人々は自分の事情に関してはあまり語ろうとしない。結婚について語るのは、大抵期待した幸福を得られなかった人達である。これは一般的に云えば真理かもしれないが、永久不変の、真理とは云えない。幸福だと云われ、自分でも幸福だと思っている人々が、心穏やかならぬ秘められた絶望を、

知らず識らずに、表に現している事がある。

不能者や、神経病者、神経過敏症、軽い変態者などの他にも、驚くほど悲劇的な事実が沢山あつて、かなり多くの結婚が当初の華やかさに引き換え少し月日が経つと不幸に陥るのである。過ぐる幾年の間にも、多くの男性と女性が、私に生活の秘密を打ちあけてくれた。だが、私が深く立入って知る事の出来た数多くの結婚の中で、人間らしい喜びに近付き得たのは、悲しむべきことだが、殆ど見あたらなかった。

世間から、親族から、また、愛し、愛されている、当人自身からも、幸福だと信じられている結婚生活でも、実際には、最も大切な部分に暗い影が射しているということが多いのである。

### すすり泣く花嫁

花嫁が、——イギリスの教育を受けた娘達の多くがそうなのだが——無知に閉じ込められた優しい処女である場合には、最初に「不和の兆し」を作り出すのは、多くの場合男性の方である。だが女性の苦痛が始まると殆ど同時に男の方も苦しみ始めるのだ。われわれ北歐人種は女性解放の先覚者であるが、それも表面に限られているので、北歐の乙女の昔ながらの「純潔さ」は根本から変化してはいない。彼女は理論的な知識も持っていないし、肉体も自然な発達を遂げていない。だから結婚の肉体的側面に対する基礎的な事柄を想像することすら出来ない。従って花婿は、自分ではそうするつもりはないのだが、彼女にショックを与えてしまう。そこでこの点についての自然の理を知らず恐らく自分が間違っていることにも気付かず、彼は花嫁の訳の分からない苦しみに当惑し、自らも

苦痛を感じる。

とはいえ、結婚したては、若い男の人達は相手の女性よりも敏感であり、ロマンティックであり、総ての日常の事物について苦痛を受けやすいのではないかと私は思う。そして男の方がより高度の精神的、肉体的合一を目指して結婚生活に入るのではないだろうか。だが男は相手よりも早くすぐに無作法になり、皮肉家となり、幸福などというものは夢想家の夢だと思ふようになる。

一方、女性には失望を悟るのが遅い。二人の中で、女の方がより多く性生活によって深い痛手を負う。緩慢な侵蝕性の傷が彼女の肉体を蝕み、全生涯を歪める。

完全な幸福というものは、無数の要素から成り立つ総合体だ。そしてこの至高の統一体はまた数限りない破壊的要素の攻撃を受けやすいものなのである。

私が結婚生活の中で不幸をもたらす危険のある事柄について残り無く語るとするならば、この本は恐らく十数巻の大全集となってしまうだろう。私の本を読んでいる方々は、この主題に関連した色々な問題を取扱った書物をすでに読んでいられるか、またいずれはこれから読むことが出来ると仮定して、私は今まで多くの著者の扱ったテーマについては言及しない。また、性に関する書物の中で大きな部分を占める変態性についても触れないことにする。

ここ数年間に私達は売春によってあらゆる側面から人間が蝕まれるという怖ろしい事実を認識してきた。だから、夫が金で女の肉体を求め、そのかわりに自分の健康と名誉を売り渡し、悪い病気を移されるといふような家庭には、結婚の幸福はありえない。これは社会の通念になっている。たしかに今日では、若い思慮のある人々は、このような病気が男を破滅させるばかりでなく、その妻にも想

像出来ないほど恐ろしい影響を与える事をよく知っている。そればかりではない、これから生まれ出る赤ん坊の健康を台無しにしたり、また生れることさえも不可能とするということも分っている。人の良い、楽天家の夫婦には、飲酒の害、放縦ほうじゆうとか自己本位からくる粗暴なやり方とかの危険について、詳しく説く必要はないだろう。

我々が問題にしななければならないのは、むしろ、根本的な法則に対する違反についてである。この違反こそ実に微妙な影響を持つものである。そして一番重大な悲劇は、一般的にいつて、若い二人が両方ともこのような法則の存在すら知らないということなのだ。しかもこの場合、事の道理としては他の場合と同様に、法則を破るものは罰せられる。法則の存在を知りつつ破ろうとも、また知らずに破ったのであろうとも同じだ。

今日こんにち非常に広汎な無知の状態のもとに、天国に入ろうと思っていた二人の間にまず起る失敗の印しるしは、一種の淋しさの感じである。総てを共にしたいと願っていた二人のうちの一方が、ある種の経験や微妙な喜びから仲間外れにされているような感じがしてくる。そして愛する人が何を要求しているかが理解されなくなってくる。日常の極些細ごくさいさいなことが最初のきっかけとなって、深い深い所に根を下ろしたある物の存在を知ることが多い。それが何であるか言葉に云い表わせないような、ほんのちよつとした事で、少女が何時間もすすり泣きを続けることがある。一方青年の方は、せつかく愛する魂と一緒に遥かな天国への冒険に旅立とうとしたのに、明らかに愛する人の中にある一つの壁に突き当たったのに気付く。相手の中にある、些細さいさいなそして全く不可解な障壁まっただに。

### 愛の行為と失望

我々の肉体、心、魂は非常に不思議な相互関係を持っている。だから結婚した二人が相互の機能に無知であったり、両者を調和させる法則を知らなかったりしたために過ちが犯される。するとたちまちに様々な形で罰が下される。そして二人がお互いに接触しあう土壌から新たな、誤解が次々に芽生えてくる。徐々に、あるいは速かにそれぞれが限りもない孤独感を心に抱き始めるようになる。こう云う云い方は余りに大雑把だと抗議する人があるかもしれない。しかし、私は数知れない沢山の実生活を基礎として語っているのだ。人間の幸福の表現としては最高の申し分のない結婚をしたと見られている女性達から、彼女の夫達さえ夢にも知らない苦痛を、事細かに聞かされたことがある。多くの男性は愛する妻のぼんやりした失望がどういふ風に隠されているかを、その夜の抱擁の冷たさに悟らねばならない。または妻の中に、抱擁を遁れようとする、何か回避的な物があるという気分から察してやらねばならない。

愛しあった男女の性生活の中にこの種の誤解があるという深い感じは、やや粗野な形を取ってまた日常的な手近な事柄の中に現れてくる。結婚した者の経験する失望感は数多い書物や戯曲の中にだけ描かれているのではない。漫画新聞にも、日常のゴシップにさえも常に表れている。

現在では、色々の「新しい運動」が盛んに行われているために、あらゆる方面の人々が自分達の結婚が取り返しのつかない失敗である事を、大胆に発表するようになった。これらの人々の大多数が、今の結婚の絆を断ち切つて、他の誰かと新しいスタートを踏み出すことよつてのみ、調和した幸福な生活が与えられるに違いないと考えている。こうした革新家たちは、自分が別の人と一緒にいても、決して成功するわけのないことを忘れていない。なぜなら彼も彼女も結婚を一人の相手と共に

美しく偉大にする術を全然知らないのだから。「恋愛の技術」を学ぶことよつてのみ、その美しい表現が、結ばれた二人の生命の中に表わされるのだ。

むろん、例えこの理屈を学んだ後でも、愛の技巧をうまく実行するに永い時間を必要とする。エレン・ケイはこう云つてゐる。「恋愛には平和が必要である。恋愛は夢みる。恋愛は、我々の生活時間の切れ端しだとか、人間の個性のお余りの上には成育しない」。

近代生活の忙がしいやかましい混雑の中では、「恋愛」は確かに、その魅力や優雅さばかりでなく、何か致命的な要素を失つてゐる。忙がしさは我々の生活を引っかき廻し、毒しているが、特に男性よりも女性に悪い影響を余計に及ぼしている。都会は刺戟が強過ぎるため、男の反応を「スピード・アップ」するが、反対に女の反応が妨げられて遅くなる。さらに困つたことには、たとえ愛を語り合う暇の充分ある人達でも、平和なロマンスティックな戯れの機会は非常に少い。都会の地下鉄や映画館では、森や庭園の中と同じにはいれない。ここではローズマリーやラヴエンダーの花を摘みながら、お互いの熱情が緩やかにではあるが次第に深く深く高まつて行くのだが。さて男性の場合、刺戟によつてすぐに肉欲が高まり、何もかも見境なく圧倒してしまひ、無教育の人間ならただ一つの事だけしか求めなくなる。それは欲望を遂げる事である。女性は、その本性の優しさから、粗暴な行動は許すが、遅かれ早かれ彼女の愛が反逆を企てる。恐らくひそかに、しかし永久に。表面は優しさをつくるつていても、心の中ではその粗暴な行動に対して軽蔑と嫌悪しか感じなくなる。本当なら絶えざる歡喜を繰返し味わせてくれるはずの行動に対して。

現在では余りに多くの人々が、人工的な不自然な誤つた環境の中に生まれ、育つてゐる。そのため

に男女の愛の行為は喜びでなければならぬという基礎的な事実ですら彼等は知らないのだ。あるアメリカの著名な医師が次のような驚くべき意見を発表している。「性的行為においての相互の快樂というようなものは、人生の幸福に何らの意味を持つものではない、と私は信じている」(「アメリカ医学協会報告書」一九〇〇年)。これは極端な一例かもしれない。しかし沢山たくさんの有名な医師、婦人科医、生理学者が、人間の性生活の根本的事実に対して、無知であり、また誤った見解を抱いている。従って一般の若い夫婦が、希望を抱きながらも、生涯の輝きとなるべきその行為の喜びを破りこわすのも無理からぬことだ。



## 第三章 女の「わがまま」

おお！ この世にあると想像し得る存在よ。例え私の生涯にその人のある事の証あかしを立てることは出来ないとしても、私はどんな気分の時でも、どんな感情を持つ時でも、その人に頼り切ることが出来るだろう。心が病む時も、辱めに悩む時の、または楽しい天国の夢を見る時にも。私は今までに一、二の婦人を、こうした友情の場所に置きたいと、調練に務めてみた。だがこれまで一度も成功したことはなかった。

——ヘリック——

## 新妻の気まぐれ

幸福と希望に充ちて、ふさわしい乙女と結婚した世の男性に、果たしてどんな運命が待ち受けているだろうか。彼は心から自分と妻とのお互いの生涯の幸福を願っている。彼は父親や医師や友達の勧告通りにするつもりで結婚する。彼は些細ささいなことにも思いやり深く、荒っぽい言葉も使わず、花嫁と一緒に読書をし、進歩的な人達なら、恐らく一緒に仕事もする。しかし、数カ月あるいは数年経つと、二人は離れ離れになり、彼は相手が時々ひどく冷たく理解し難がたくなるのに気付く。ごく親しい友人にさえ、この問題を打ち明ける人は少い。しかし二人の心はそれぞれの悩みを知っている。

彼は時には笑いながら、暖かい心で彼女の片意地をからかうかも知れない。誰もがそれは深い愛情をふざけて隠かくしたただけだと思うかも知れない。事実そうであろう。だが彼の愛情の根を忌いまわし

い小さい虫が蝕むしばみつつかあるのだ。それは彼女が我わが俚ままだと思ふ感じである。彼には時に妻が不可解に冷たく思える。そうかと思うと、彼が「何にもしないのに」彼女は涙を浮べたりする。自分でも説明出来ない、いわれもない涙を。

ある週には、彼の優しい求愛とロマンティックな言い寄りで、妻は微笑ほほえみを彼に与え喜ばしげに身を任まかせるだろう。だが恐らく、その後二三日経つと、彼の方で同じ程度にあるいはもつと情熱を込め、優しくしても、妻は冷淡なそぶりをするか、または取つて付けたような表面だけの暖かさしか見せない。この変化は、夫にはまるで説明のつけようがないので、ひどく感情を傷つけられる。この深い、理由のない心の傷が、時として彼の愛の終末の糸口となる。男は自分の一番愛するものをすつかり理解しているものと感じたい。そしてまた、妻が合理的な人間であると感じたいのである。

しばらく、この説明の付かない誤解が続くと、少しでも焼餅焼きの夫なら、妻の会っている知人や、ちよつとでも彼女の注意を引きやすい誰かよその人に、目を光らし始める。普通の男には、誰かが自分の位置に取つて代わるかもしれないなどと信じることは、まずないのだが、それでも自分がうまく行かないのは恋敵こいがたきのせいじゃないかと考えたりする者もある。ある場合には、妻の冷たさに当惑して、自分の愛情を反省する夫もある。だがどう考えても自分の愛も情熱も二三日前と変らない。そこで、自分の心は自分でよく分るものだから、彼は自分の愛が不動のものであると思ひこんで、妻の美しさによってさらに掻き立てられたロマンティックな情熱を激しく感じる。二三日前にはこの同じ熱烈な愛が妻の中に反応を呼びましたのだという事を思ひだす。それやこれやと考えたあげく、彼は次のように心の底から思い込んでしまう。それは恋敵こいがたきが本当にいるか、それとも花嫁の性質が

訳のわからぬ、わがままな、気まぐれであるかどつちかに違いないとの確信である。この夫の推定は、どちらもとんでもない誤りだ。

気まぐれに出会うと、大抵たいていの男はがまん出来なくなる。相手の気まぐれに對しては彼の最上の努力が、無効に無益になつてしまふ。女の気まぐれは、理性が欠けているように思える。男に取つて理性とは一番大切な、骨折つて手に入れた能力であり、他の動物の列から人類を引き上げる一つの力である。だから、それが目の前で愚弄されるのを見ることは、男性にとって耐えられないことだ。

自分の花嫁が論理を無視しやさ優しい道理に従う態度に欠けていることは、一つの欠点であつて男の心をひどく傷付けるものである。だから、彼はそんな風な考えを打ち消そうとする。で、こう云うことが起るかもしれない。自分の愛情の激しさによつて花嫁を苦しめた事を思い悩んだあげく、若い男は、自分の情熱を抑制することによつて花嫁を喜ばそうと務める。彼は自分自身に問いかける。「宗教や道徳の先生たちは、男に抑制を説いているのではなからうか」と。彼は青年の手引きとして書かれた本を読んでみる。そこには「抑制」とか「自制」とかいう言葉が、漠然とした意味を持つてやさ（しばしば不合理に）盛んに主張されている。次に彼のすることは、彼の優やさしい感情の表現を切り詰める事である。一生懸命に働き、夜遅くまで帰らない。今までのように花嫁の指にキスしたり、日が暮れると大急ぎで妻の待つ甘い家庭に急ぎ駆け付けるようなことは止めてしまふ。

ところが、彼が少しでも注意深い男なら、またも妻が思い沈んだ、痛ましい様子をしているのに驚き悲しむだろう。善良な青年なら誰しもが性格的に持つてゐる、理解したいという優やさしい欲望やぼから、妻に訴え、嘆願し、あるいは愛撫して、その新しい悲しみの理由の幾つかを話してくれと願う。

すると意外にも今度は彼女は彼が以前のよう<sup>に</sup>熱烈に求愛してくれないからだという。その求愛こそこの間まで彼女がはねつけ、彼がやむを得ず理性の努力でやっと押さえ付けてきたものではないか。彼は絶望して自分に問う、「男は一体どうすればよいのだ？」もし彼が「教養がある男」ならば、きつと手に入る限りの性に関する書物をむさぼり読むだろう。だがそれらの書物の中には何一つ本当の手引きとなるものは発見出来ないだろう。彼が学ぶことは、あらゆる点から「抑制」が望ましいという事であり、著者の性格しだいで、「抑制」とは一週間に三度以上妻と関係してはならない事であったり、一月に一回だったり、あるいは子供を産むためでない限りは関係してはならないという事であったりする。結局自然の法則に基づいた合理的な手引きは発見出来ないのである。

そこで彼の性格から、「抑制」の実行に取り掛かる。

すると恐らく、いや総ての結婚生活に一度ならず何回となく起ることなのだが、夜になって男が英雄的に自制の実験をしていると、その妻が独り寝の枕を涙で濡らしているのを、たまに見付けて驚くというようなことになる。

### 本来不合理なものか

彼は友人達や医師から間接に忠告を聞こうとする。だがその辺のお医者さんや友人がヨーロッパの著名な権威者以上に、この問題について彼に答えられるはずがあるうか。有名なフォレル教授（「性問題」英訳一九〇八年）は次のような助言を与えている。

改革者ルーテルは實際的な男であったが、結婚生活における肉體関係を一週間に二回ないし

三回が性能力の最高時の場合の標準であると規定した。私は医者として数多くの実例を観察した結果、この規則を一般的に正当だと思う。この規則は数千年の長い間、男性が次第に適應してきたノーマルな状態に非常によく一致するようである。しかしこの規則を絶対不変のものと考えている夫は、誤った考えに陥っているのである。なぜならばノーマルな男ならば、もつと長く自分を抑えることが可能であり、それは妻が病気の時だけでなく、妊娠の場合も、月経の期間にも、夫としてなさねばならない義務でもあるからである。

多くの男性はこの助言に従うほど、思慮深くはないだろう。この助言は精神的に高い生活を表わしているから。だが一方では、この助言に喜んで従うばかりか、さらに一層喜んで自己抑圧をする人も沢山たざんいる。それは妻の幸福、ひいては自分達の生活の楽しみという、精神的な憧れあこがを手に入れんがためである。

こうして喜んでその途を進んで行つても、男に取つて大きな疑問が起こる。それは「どこへ行きつゝのか」という疑問である。

数多い指導者が、多くの異つた方向へ導こうと心を砕いている。若い夫は、あれこれと試みたあげく、やつぱり妻が満足せず、理解出来ず、気まぐれであるのに気付く。そこで夫は失望し、疲れ切つてしまふかもしれない。妻の方は「妻の義務」にじつと従ひ沈みこんでしまふ。そして、夫の心の中に訳のわからぬ腹立たしさだけが残される。彼女があんなに気まぐれでさえなかつたら、まだまだ楽しくやつて行けるものを、と夫は空想するのだ。

多くの著者、小説家、詩人そして戯曲家たちは、人間生活のこの上もない悲劇の数々を女性の性質

の中にある、理解し難いわがままから引き起こされたものとして書いた。親切な作家は微笑をもつて、幾分恩着せがましくこう云う。女は男より本能的であり、子供っぽく、理性に乏しいと。辛辣な連中は女性のこの理解出来ない性情を軽蔑し、非難し嘲笑する。彼らの知性を悩ますこうした性情は、彼等に取つては実に不合理な馬鹿げたものに思えるのだ。

我々の宇宙のあらゆる部門で、自然の法則を探し求めている人々が、この一番大切な主題を等閑にしているということは、非常に奇妙な事ではなからうか。この主題こそ、惑星に名前を付けることや昆虫を集めることなどより、遙かに我々に関係の深いものではないだろうか。女性は元から気まぐれなのではない。あえて法則というものが存在するとするならば、女性の心身の法則のいくつかはずっと以前から発見されていたと云えよう。だが一般の社会機構においては、男性は、こんな法則などは肩をすぼめて無視し、女性に対して不合理な気まぐれな動物だと笑いかけている方が都合がよかったのである。男から見ると、女というものは気が向いた時だけ言い寄るべきもので、何も研究の対象となるようなものではないと思えたものだ。恐らく、漠然とではあるが、男性たちは生命の魅力の大部分は男女の相違にあることは知っている。そして彼等は女が男と違うのはそのわがままに由来するのだと、安易な理論を作りあげた。その上、どんな熱情的な女性にでも時たま現れる冷淡さを、単なる気まぐれだとこじ付けける事によって、男は無意識に自分を正当付け妻にはどんな場合でも自分の方に調子を合せる事を強いるようになった。

非常に根本的な社会条件のために結局そういうことになったのだが、今日まで探険家、科学的発見者、歴史家、統計学者、詩人、芸術家などは殆ど男性に限られていた。従つて、男女の結合した生活

の中でも女性の側は、殆ど自分自身を発表することがなかった。経済的に男に頼っている限り、あるいは子供を産んで保護を必要とする限り、女性は男の思うがままの姿に自身を形作る事で満足してなければならぬ。そして内部から湧きでる自然の感情や、深い思考を抑えつけねばならなかった。

多くの女性が、はつきりとした理屈は知らなくとも、ぼんやりと自覚していることがある。それは女性の肉体の天性が海の潮と同じような周期性(リズム)を持っているという事実である。潮の干満を調節出来ないと同じに、男性は女性の内部の周期性を勝手に調節することは出来ない。この大洋にも似た女体は男性を征服し、支配し、これを制御しようと試みる者をあざ笑う。それなのに一方女性とは云えば、肉体に対する男の欲望に屈服しなければならぬ生活条件にある。女性の周期性の波動を無視して、男は自分の意のままに近づいたり離れたりする。女性の周期性の中のあるものは、男性に反抗する。それは毎月の月経期間や、子供を妊娠し出産するまでの陰暦十カ月間の周期であり、これは非常に大切な周期であるから、男の勝手にならないことは男性にもはつきりしている。しかしもっと微妙な女の性的周期の波動は男の観察や注意からそれてしまう。

もし一人の男性が引き潮で波が遠く引いてしまった浜辺へ、水泳をするつもりで出かけてきたとしよう。彼が青い深い水があると期待していた場合には、砂原があるばかりなのを発見する。そこで彼は水浴の機会を逃したの<sup>のが</sup>に腹を立てて、海に向ってこう怒鳴るだろうか。「きまぐれめ!」と。

ところが、世の一番思いやりのある花婿でさえ、花嫁の冷淡さの中にはただの気まぐれしか見出さない。実は、彼女が性の潮の引き潮にある肉体を犠牲に捧げているのであるのに。

## 愛の潮の憧れ

この問題には、あまり世間に知られていないもう一つの面がある。世間では、悲劇的な女性の姿として、愛の潮が最高潮に達しながら、夫が少しもその情熱のデリケートな印しに気づいてくれないという場合がある。

今日の味気ない不自然な時代では、男の欲望は、すぐに満足さえすればよいという、何の深みも美しさもない上滑りな欲求となりやすい。そして恋愛の神秘の奥義を極めた人が楽しむ事の出来る、様々な複雑な求愛の技巧を知りえない。このような男性の目には、妻はいかにも短気で、気まぐれで、わけもないのにすぐ腹を立てるように見える。

女性の体内に湧き上る驚くべき潮は、古い時代からの何千年という人類の経験によって、芳しく、豊かなものとされているのだ。その古い時代には、求愛は長い時間を掛けられたし、美しい花の環に飾られていた。

男だけがリードしようと思うのではなく、むしろ女がリードすることもある事を期待しさえすれば、本来、女は夢中になり、自己表現するものである。ところが多くの女性は、ましてや多くの妻は自分が魅力的な情熱の所作を示しても、もしも男に何の反応もなかったらどんなにショックを受けるかと恐れて、自分の方から性愛の表現をぶちまける事をためらうのである。求愛の奥義に達した男に対しては、女性が愛の潮が満ちている事を、男性に喜びを与える数多くの微妙な合図で表現しているのが分かるだろう。だが、もし夫が、それらの合図に盲目であったなら、妻は黙って自分を抑圧するほかない。そこから必然的に起る自己軽蔑は、やがて夫に対する憤りを伴うようになる。けれど、夫こそ「愛」を口にしながら、彼女をこのような屈辱の場に置いたのであるから。



近代の男性の大部分は、女性の生理的反應の諸要素については非常に無智である。だから次に述べらるG夫人の事件も決して例外的なものではない。夫人の夫は大變に彼女を愛し頻繁に關係した。それでいながら一度も彼女の中に、相互の結合に必要な準備的な感情を自覚めさせる助力をしたことがなかった。むしろ彼女は何も知らない無邪氣な少女として結婚したのだ。しかし、時どぎ、漠然と、夫の愛の中に何か欠けたもののあるのを感じた。彼女の夫は唇と頬の他には全くキスしたことがない。しかし彼女が性的周期の波の最高潮にある時は、(総ての人はその事に気付かない)夫の頭や唇を自分の胸に押し付けてくれればいいのにと、強い憧れを感じた。女性の乳房と性生活の敏感な相互關係は単に肉体的なスリルを与えるだけのものではない。そこにはまだ生れでない子供に対する深い愛情がある。この女性の憧れの中には、詩的な美の世界があるのだ。この憧れが優しい霧となつて恋人の方へと流れて行く。そこで恋人の唇の柔かい感触は、彼女の中に色々な感情のまざり合つた喜びを自覚めさせる。G夫人が、恥らいながら夫に求めたので、夫は彼女の胸に一度だけ軽いキスをしてくれた。何も知らないこの夫はその唇を妻の乳房に当てれば、妻は優しく受けとめるだろうということも、また、そうすることが完全な二人の結合に彼女を導びくための、最初の、そして確実な方法であることも知らなかつたのである。こうして彼は、妻の自然の欲求を抑えつけた。そして、それを呼び覚ますための何らの工作もしようとしなかつたので、夫人は夫婦生活の中で少しも肉体の喜びを味わなかつた。このような上品ぶつた、というより不注意な夫は、自分の欲望を満たすことだけで満足し、その妻の鬱積した苦痛や、恨みに殆ど気付かない。ところがこれらの満たされない不快な感情は、妻の心に食いこみ、遂にはその全身の健康をさえ損なつてしまふ。

時には男性は、性知識をタブーとしている近視眼的な社会の犠牲ともなる。

我々の社会生活の因習の中では、女性が自分の肉体のこと、そしてまた未来の夫の肉体について、何にも知識のないことが、花のように美しい無邪気さだとされている。これがあまり極端になると、結婚生活とは夫と肉体的関係に入ることだということすら知らないで結婚する少女が珍しくなくなる。夫との肉体的関係が兄弟たちとの関係とは根本的に違う事をも知らないのである。そして男の肉体の本当の性質を発見し、自分が妻として演じなければならぬ役柄を知ると、彼女は夫の欲求に応ずる事をきっぱりと撥<sup>は</sup>ね付けたりする。私の知っている一組の夫婦にこんな例がある。夫の方は紳士的で妻を熱愛していたが、彼女の花嫁が結婚の意味を實際に知った時のショックから回復して、自然の関係を結ぶようになるまでには、数年間待たなければならなかった。思慮のない男性と過した結婚の初夜の恐怖に自殺したり発狂したりする花嫁の数は想像以上に多いのである。

結婚生活の内容に対する知識なしに、少女たちが結婚適齢期に達するということは、実に信じ難い<sup>がた</sup>ほどである。私のごく親しい、高等教育を受けた婦人がこんな話をしたことがある。彼女が十八歳の時、ダンスで男の人に唇にキスされたのが原因で、もしや赤ん坊が出来るのではないかと、数カ月の間思い悩んで苦しんだと云うのである。もう一人別の少女の話では、やはり同じようにキスされたために、精神的に苦しんだだけでなく、このたった一回のキスの結果を恐怖する気持ちがあまり強かったので、月経が数カ月止まってしまった。

このように育てられた乙女と結婚する時には、夫が「第一夜の権利」をいきなり主張すれば、それはまさに強姦と云うべきだ。こうして結婚した花嫁は何時<sup>いつ</sup>になっても性的結合の喜びを経験出来ない

いだらう。なぜならば、このような初夜は彼女の心に、男というものは動物的な本能に支配されているのだという観念を焼付けてしまうだろうから。

ある雑誌の中に、私は次のような詩を見つけた。その中には、この特殊な女性の悲しみが生き生きと表現されている。

地上の俗事の他には少しの高貴な

魂も持たぬ勇たちと連れ添って

その男たちは婚礼の夜に、ああ、

命の本能の炎から、たちのぼる

火花を消してしまった、

私達を凍りついたもののように、

ただ時流にならっておきざりにした

魂は塵にまみれ、妻という名の仮面をかぶる

青春の長い年月、愛の年月、情熱の年月は

私達の前に大きな口であくびする。

生のおわりまでも、まやかしの中に

結婚した男の傍で、皆しわだらけになつて行く。

ただ残る年月が平和であれと望みながら、

私達は女奴隷にすぎない、

一家と食べ物とに不自由のない奴隷に

——カザリン・ネルソン——

## 売春婦の嘘

男は、まじめに愛情を持って結婚生活に入るものでも、大部分は、その前に「愛」を金で買ったいくつかの経験を持つているものである。そこで彼等は妻との経験を理解するのに売春婦の場合の反応と比較するという誤りを犯さないと限らない。彼等はこう主張する。自分の関係した売春婦が肉体的な興奮と喜びとをあんなに表したのだから、花嫁なり妻なりがそうでないのは「冷感」か「性的未熟」であるからだ。こう云う男たちは、売春婦の肉体の動きが総て、わざと巧たくまれた見せ掛けのものである事を知らないのである。彼女らがなぜそのような体の動かし方をして見せるかと云えば、お客が最高の喜びを感じるの、客の腕に抱かれて、彼女らが一緒にあって身をふるわせる時だという事を長い経験からよく知っているからである。

フォレル博士も次のように述べている（「性の問題」）。「売春婦と関係することによって女性の本当の心理を理解出来なくなる男がよくある。なぜなら、売春婦は、男性の好色に対して、余りに自動的に訓練されているからである。売春婦の中に女性の性的心理を見出そうとしても、そこには男のそれが鏡のように映しだされているだけである」。

しかし売春婦の見せ掛けの激情は、それがリアルな何ものかの引き写しであるだけに、それはそれなりに俗美マブの価値がある。それは、あらゆる妻が、夫と結合するたびに、襲われる感覚である。妻の中にこの電源を開く鍵をこそ、総ての夫が真剣に探し求めねばならない。その電源のあり場所

は、女性によって様々に異っている。

運命はまた、男性に取つても、苛酷なことがある。想像も出来ないほど意志の強い青年達だけが、その花嫁のために、純潔を守りうる。もしこのような男が、汚れた、愛への尊敬を失つた女性と結婚した時、また反対に、余りに「純潔」で慎み深いために、肉体的結合を拒むような女性と結婚した時、いままでのこの男の高貴な振舞いは無残にも一切無駄になってしまう。また一方、長い間熱い血潮と闘つたあげく、こういう男性がとうとう諦めて、時々売春婦の処へ慰めを求めに行くようになることもある。ところがその後になつて偶然、彼にふさわしい女性にめぐりあふ。そしてこの男は、自分の汚れた過去を激しく後悔し、相手の女性の赦しをやつとちかえてから結婚する。それなのにこの男性は、知らず知らずに自分の妻を過去の女性と較べたり、あるいは全く別物扱いをしたり（これはあまり起る事ではないが）して悲しませる。私が知っているある男は放縦な生活をした後で、尊敬する憧れの女性に出会つた。そしてその女性と結婚したが、彼女の「純潔」を守るために、とうとうその女性との完全な結合は得られなかつた。相手の女性は大変不幸だつた。なぜならこの女性には彼を情熱的に愛し、子供を産みたいと願っていたからである。彼女はやせて神経病的になつたが、夫はこれを「氣まぐれに」やせ衰えたのだと信じていた。

もしこの男が、生物の中には、単につがいの相手がないという原因だけで死んでしまうものがあるという事を知っていたならば、自分の行いをもっと正しい光りに照らしてみることが出来たに違いない。

女性が、性交によつてその清浄さを汚されるといふ考えは、今日の我々の社会に非常に深く根をお

ろしている。この間違つた観念が出来上るまでには様々な原因があるが、中でも、初期の教会の禁欲主義や、男が、女の意味を無視して道具のように女を使用したという事実などが、大いに預かつていゝる。そのあげく女性の教育や、社会感情が、女性を性生活から遠ざけるといふ方向へと進んで行つた。こうして、性生活を卑しい、肉体的な墮落した必要事で、純潔な女性の樂しむべきものではないといふ誤つた観念が幅を利かして来た。

結婚生活では、男がそれを望む時に何時でも性交の「夫の権利」を行使する。夫は、望む時なら何時でも妻に要求する権利があり、また、妻の方はこの事については、何の希望も根本的な欲求も持っていないといふ見方を、法律や習慣が、強めてきたのである。

女性が律動的な性の周期性を持つていることに關しては、全く何の探究もなされてはいないようだ。その周期性こそ、その生命に従う時には、快樂を強めるばかりでなく、女性の健康、生命力を高め、「女が氣まぐれだ」といふ假説を取り除いてくれるものであるのに。なるほど人間は、水や、音や、光の波長を学んだ。だが一体何時になつたら人間の息子や娘が、肝心な女性の性の潮を学び、女性の性欲の「循環周期律」を知ることが出来るようになるのだろうか。

## 第四章 根本的な衝動

男というものは、女について冷静な科学的判断を下すことは極めて稀まれである。男の判断は、男自身の性感情と、また自らの性衝動に対する男自身の道德的態度によって彩いろどられている……女の性衝動についての男の意見の多くは、女についてというよりもむしろ、意見を述べている方の人（男）について語っているところが多い。

—— H・エリス ——

## 創造する衝動

「洗練された」人々の多くは、女の場合には自発的な性衝動は起おこらないものだと言っている。性衝動という言葉を使う時に、私は、センチメンタルな「恋に落ちる」事を云うのではなく、一つの肉体的な生理的な興奮状態、つまり自然発生的に、特定の男とはまったく無関係に起こる総ての女性に共通なある興奮状態を指して云うのである。この女の性衝動は、実に創造的な衝動であり、高度な生命力の一表現と云うべきものである。私達の周りに広く行き渡っている考えによれば、以上のような気持を（ことに結婚前に）覚おぼえる人は、ただあばずれ女に限られていると云うのである。口に出し得ないような、それでいて空腹時に似た深い肉体の思慕を、時たま感じるなどと告白するくらいなら、むしろ死んだ方がましだと考えている人が多いに違いない。しかし非常に多くの女の人に、普通の女であれば誰でもそれを感じるものだと、単純にまた自然に仮定した上で、「どういう時に感じます

か？」とそつと訊いた。すると、彼女らは自分について本当の事を私に明してくれた。私は、これらの答から女についての多くの出来合いの説を、覆すに足る豊富な事実を集めることが出来た。

科学の名において、笑うべき背理が行なわれることは珍しくないが、ヴィントシャイト氏（ドイツ人）の主張もその一例である。「ノーマル（常態）の女では、特に上流社会の女では、性本能は、後に獲得されるものであって生れつきのものではない。女の性本能が生得の物であったり、あるいは女一人で目覚める場合には、性欲異常と断すべきだ。結婚しないうちは女はこの本能を知らないのだから、生涯にそれを知るチャンスを持たないことがあったとしても、性本能が無くて淋しく思うなどということはありません」。

この意見に対する否定は、エレン・ケイにより引用された、ヘラ物語に表れている。ヘラは、アイリスを地上に送り、恋の夢によって少しも汚されていない三人の貞淑な完全に操の硬い少女を捜させた。アイリスは三人を見つけはしたが、オリンパスの元へ彼女らを連れ帰ることは出来なかつた。なぜなら、三人の少女はすでに、老齢のため役に立たなくなつたフェアリー（天罰を司る蛇髪の女神たち）の後を継ぐために地獄へ連れて行かれたからであつた。

それにもかかわらず、私は次のような真相を訴えなければならぬ。娘達の教育全体が、彼女達から人生の本質的な事実を隠す事に主力が注がれていること。人間の本能は、低級で、恥ずかしい物であるなどという教育が実際に広く行われている事。それからまた、社会状態のために、多くの女性が、贅沢からばかりでなく生活の必要から夫の意志に従属させられているために、女の中の自然の性衝動が禁圧されたり、そのままのものが、隠されたり歪められたりされる傾向がある事など。



またこう云うことも真実である。私達北方の風土では、女は概して南方人のように、激しく興奮することは少ない。さらにまたこれも事実だろう。私達はたえず青年期が引き伸ばされていくため成熟期も遅れ、女が、その本性に根ざす深い要求のあることに気づかないうちに三十前後に達することすら珍しくない。しかしながら、それまでの長い年月の間、それと気付かれない影響が、女の肉体組織を通じて広がり、深く女を動かしているのである。また、部分的には私達の慣習、伝統、社会立法などにより抑制されているためでもあるが、女は性本能の目覚めないうちに結婚する。だから、自分の体の中で抑えられた形ではあるが、性本能が波のように大きくうねっていることに全然気付かないままで、結婚後長い間ぼんやり過すという事もある。またこれは無数の女が経験していることだが、女の方が自然に結合を楽しむことが出来そうな場合も、それがある程度まで女にとって不快である場合も、共に、紋切型の性交習慣で夫が迫るならば、妻の自然の性欲線の波の山を平らにしてしまう傾向がある。明らかに疑いえない事実だが、夫の要求に対する受け身の道具として、妻を使うという態度に止まるならば、結果において妻を本当に道具にしてしまい、また道具以上の何ものでもない物にしてしまう。「いい女房なんですが、どうも情熱のない女で……」とこぼす夫——これは随分多い——は、自分自身でその原因を作り出しているのだ。妻がその行為の中に自然の快楽を覚えられない時にはしばしば要求されたり、またはロマンティックな楽しみに誘い込まれないような仕方でも要求される場合は、その夫婦の行為は、女の生命力をすり減らし、せっかく恋の季節が到来する時にそれを樂しむ力を殺してしまいがちになる。

女については、次の事が、確かな真理と云える。大抵の女が、性の世界の存在に十分目覚めるのは、

ようやく結婚後になつてからである。そしてこの事實は、近代社会の不利な諸条件によつて自然な健康な性感情が禁圧されているためである。私達は人間であるために、愛の選択の社会的、知的、精神的方面が、女の性生活の土台をなす生理的な側面を、覆い隠す傾向がある。性生活の流れ全体が各要素に分離出来ないほどよく統一の取れた女性を捜し出すことは容易ではない。しかし職業上あるいは仕事の都合上幾月かの間、夫から別れている——例えば夫が海外出張中——の妻、特に他の恋愛の刺戟などによつてその性感情が複雑になされてないような幸福な妻は、情感の根本的リズム（律動）について最も明確な例証が得られる女性であることが判つた。かような女性は、その夫と優しい語らいをする事や、その側にいる事を、毎日憧れ続け、時には、進んで激しい性行動というようなびつたりとした肉体の結合を望む強い発作を感じる。特に、別居する妻がそれを感じることが多い。それで私は彼女達に発作を感じる日の日付をノートして置くように頼んだところ、その回答によれば、これらの時期が特に丁度月経の直前とそれからその終つたあと一週間目位に来る。つまりおよそ二週間ごとに来るといふ事であつた。それは驚くほど一致していた。私が、女性における「性欲の周期律」と呼ぶべきものについて初めて糸口を得たのは、以上のような女性からであつた。この大変複雑な問題について、私は幾年かの間、出来るだけ科学的なまた詳細な研究をして来た。多くの女性の率直な科学的態度と、さらに多くの女性の気安い親しげな打ち明け話のおかげで私は一連の大変興味のある事實を手に入れることが出来た。この事實を手掛かりにして、私は問題に光を当てる一つの結論を引き出すことが出来るようになった。それはまた偉大な医学的、社会的な価値を持つものであると考える。読者の想像されるように、本書発刊以来、さらに進んだ実証のための沢山

の資料が私の手許に送られて来た。この材料も最初の表に極めて接近しているものであって、健康な標準的女性についての一般的説明を訂正する理由はまだない。だが、私のデータに関するさらに詳しい科学的な考察は、他日を期して発刊したいと思っている。

女性における性的要求の周期律は、波状の曲線、つまり波頭とくぼみの連続した線として、グラフで表わすことが出来る。しかしながら、その周期律のしごく単純な基本的な表示でさえ、一般には、はなはだしく複雑な形になる。それは、他の刺戟により、波の異なる連続やあるいは不規則な波頭が現れるからである。ある場合には、海の規則的な小波が浜辺にあつて砕けるのを見る。そうかと思うと、他の水流が第一の波へ直角に、第二の波の流れを送り、それを横切り、そうして二つの波の列がお互の間を通過するのを見る。

女は、いかにも感じやすい応じやすい道具である。そして近代文明世界の中では、私達は、数限りない組合せの刺戟に影響されやすいので、次のような事態が生ずる。すなわち、女の本来の性潮流の底を流れている深い波が不明瞭になり、込み入つて来るため、その規則的な連続が彼女の海の小さな渦に隠された、その存在が一般に認められず明らかにまったく研究されないままで見過ごされることも、あえて驚くにあたらないことだ。

### 女性の性リズム

女性の欲求の周期性は、この章の主題に極めて密接に関連するので、ここで私は、女の性生活のリズムについての私の結論を簡単に述べなければならない。しかしながら、まず女の生活に含まれた

他のいくつかの特徴について考察する必要がある。

女の体の中には誰にも明らかな太陰暦の一月のリズムが見られる。このリズムは見落そうにも見落せないほどハッキリしたもので、女の体の機能のいくつかと関連して部分的な研究が行われてきた。呼吸率、筋肉力、体温、視力などに対するその影響を知るために、実験が行われた。この結果がまとめられ、女の二十八日周期中の異なる時点を取って見ると、単一な曲線図が描かれる。これは女の能力についての変化を表わすように思われる。

しかし、この方面においてさえ、独創的な仕事は何と少いことだろう。その証拠には千編一律な図表が、書物から書物へと繰返し引き写されている。マーシャルの「生理学」ではそれは「ゼルハイムから引用され」、H・エリスでは「フォン・オットから」そして他の多くの書物ではなお他の原本から引き写され、またはそれに基づいて、常に同一の古い図表を使っている。

この図表は、学界の権威の甲氏や乙氏の手によって複製されている。そしてこの曲線を作成する基礎となつてゐるところの事実については、その殆ど総てについて論議が加えられてきた。

この曲線によると、女性の活力は月経の前数日間は高まり、月経の間最低の退潮に沈み、そしてまた月経の終わったのち間もなく高まる。それから次の月経に入る前に再び活力が高まるまで、殆ど水平に進んでいく。この簡単なカーブは、女の体温や筋肉力、またはこれまで研究されてきた他の関連性ある単純な事柄に対しては、当て嵌まる処もあり、また当て嵌まらない処もある。ところが、多数の女性について私が研究観察した結論に照らして見ると、このカーブは女性の性的生命力の波動を表していない、ということが明らかとなった。

この問題全体は、大変入り組んでおり、またあまり研究が進んでいない。だからこの問題に手を付けるとなると、一般読者に取っては縁の遠い事柄や退屈のように思われる多くの細目に入って行かなければならない。例えば私達が皆で研究してこなければならなかった問題、しかも私達がそれについて頭をひねってきたが恐らくは徒労に終わっているらしい問題のたった一つ——例えば、月経とは何か？——の問いに対しても未だに満足な回答は与えられていない。素人の目から見れば、こんな問題は医者なら誰でもすぐ説明がつくはずだと思われる。しかし医業に携わる人でも、その問いにはほぼ正確に答える事の出来る人は少い。

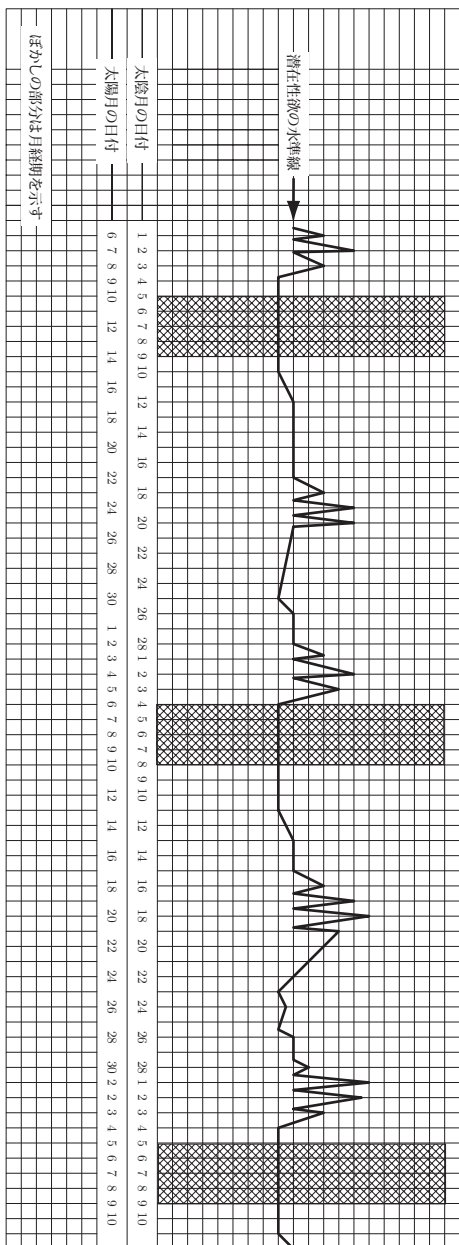
三週ないし五週の「ひと月」（太陰暦）を幅として、私達多くの女性の間にはそれぞれ僅かな変化があるが、女の大多数は、月経の期間が二十八日、すなわち太陰暦一月の期間となっている。仮にここで各二十八日の継続期間をつかい、各期間を一単位と考えて表をひくならば、この期間において、ノーマル（常態）な健康な女が欲求（性の欲求）を覚えるとか、ないしは彼女の性の潮の高まりを感じるのはいく時であろうか？

女性の側における性感情の問題については、一般の医学や生理学方面でも二三の記述が見られるが、これらは概して大いに警戒を要するものであり、また漠然としたものである。例えば、マーシャルの「生殖学」を見ると、「最も強い性感情が見られる期間は、おおむね月経期間の終了直後である」。またH・エリスは、女の欲求は、月経の前とそれから時としては月経の後にも高まりを見せるものであるという。この意見は、女の欲求が月経期間と一致するのが自然であるとの見方に基づくように思われる。

大いに慎重な調査と研究を続けたのち、私は次のような結論に到達した。この女性の性欲の周期性を見出すという問題について、一般に混乱が起っている原因は、一つには一人一人の女性の間に実に多くの変化があるためである。そしてまた、すべて生命の内部の問題について科学的興味を持つ女の人が極めて稀であるためである。さらにまた、私が結論として主張している事であるが、総てのノーマルな女性の中に見られる、あるいは潜在的に潜んでいる、深い根本的なリズムに人が気付かないようになってきている事である。それは、近代生活に伴なう非常に雑多な刺戟や禁圧のために表面的にも一時的にも大きな影響を受けて、すっかり厚いベールがかけられ、隠されてしまっているという事実による。私は目下のところ、奥深い自然の性のリズムを、不規則で表面的な波から解き分けようと努力し続けている。

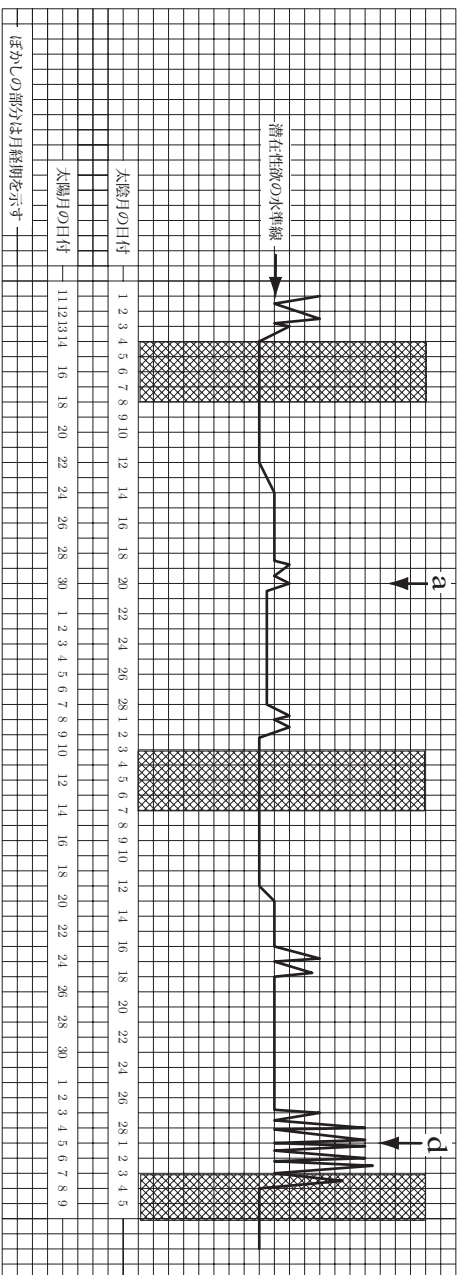
## 二週間バリエーションの周期

次のページに掲げる図表は、この数ページで述べて来た事を図解的に明らかにするに役立つであろう。それは一人一人の女性について調べた数多くの記録に基づいて作成したものである。それは、女性の性的活力の過剰と衰退が交互に訪れる、リズム的な継続を正当な平均表で示している。波頭の高いつころは、目立って規則正しく現れてくる。そして二十八日目ごとに二つの波の高まりが見える。一方は丁度月経のすぐ前の二三日に訪れ、他方はその後となる。しかし月経が終った後には、殆ど水々な間隔において、月経終結後およそ八九日ごろに訪れるところの、二三日間続く次の波頭が現れる。云い換えれば、最後の波頭以来丁度十四日、月暦一月の半分を周期としている。これを簡単に云うなら



第 1 図

健康体の女性において自然に性欲が生起する周期性を示す曲線。いろいろの原因により，“波頭”の位置，大きさ，期間にわずかばかり不規則なところがみられるが，一般にリズムのような連続があることは明らかである。



第2図

疲労と過労が原因となり性欲減退をきたしたことが“波頭”の形に影響するのを示す曲線。波頭“a”はただ微かな短い性欲上昇により現われたもの。波頭“d”の直前および波頭期間にアルプスの山の空気がその人の活力を恢復させた。活力の増大はこの波頭の頂点の高さと数とによって明らかに示されている。



ば、女性の欲求は、常に一つの周期が月経直前に来るように按配された二週間ごとに訪れる、という風に云えばよい。その当時の女の活力と、女の一般的健康とに従って、それぞれの欲求期の長さ、云い換えれば各波頭のサイズと複雑さが定まる。しばしば三日間の間毎日またはそれ以上の間女は情熱的に、そしてごく自然に性的興奮を覚える。かと思つと同じ女が、疲れていたり過労の状態にあると、ホンの二三時間だけ、あるいはそれ以下しか欲求を感じないこともある。

疲労や都会生活や栄養不良のために、そして実に沢山の外部的事情のために、著しい影響を受け、時としては数年間、ひどい時には一生涯、女が自然的な性衝動をまるで感じたことがないほど、彼女の活力（生命力）がすり減らされることもある。

疲労の影響は、普通の精力の強い女性の場合でも、生命力のエネルギーの減退を来たすものであるが、この現象は第二表で見ることが出来る。この表ではaの処で中間の波頭が非常に減退している。これは一般に通用する表ということは出来ないが、実際の個々の場合を詳しく記録したものである。

第一表に示されているそれに似た曲線は、一般の条件のもとに、一つの見解を単純化して示したもので、それは女性の中のノーマルな自然発生的な性衝動の満ち引きがあるという私の考えである。ある若い既婚女性が私に打ち明けた話であるが、夫との肉体的結合に対する彼女の切なる願いは、夫と毎日愛情深い語り合いをしたいという思いとは別に、何か「時計仕掛け」に似た規則性を伴って自然に湧き上がって来るように思えた。そしてこれは夫が長いこと不在である間に起る事である。

しかし人間は細かい点では、大変相違のあるものであって、丁度人が二人並べばその顔付が同じでないように、詳しい記録を念入りに取って見ると、二人の女性が同一のカーブを描くということは絶

対的でない。月曆一月毎にたった一回の性衝動を、特に自覚する女性も多い。こう云う女性を観察して見ると、ある人は月経前にその時の来るのを感じるといふし、また他の人は月経の後に感じるといふ。この二十八日間にほぼ一回だけ性衝動を感じるという女性の場合は、第二回目は特に体の調子の良い時だけ感じられたり、あるいは彼女らが性感を刺戟するような小説を読むとかまたはごく自然の間に抑えられている二回目の欲求と時期と時を同じくして、彼女らが愛する人と会った場合にだけ感じられる。月経期間中に性欲が最高度に高まるのを覚えるという女性も僅かに数えられはするが、これはややアブノーマル（異常）と思われる。

これを読んだ人が、大勢の女の人に質問して私の説をそのまま試そうと思うならば、その結果は、恐らく大変矛盾した形で現われてくるだろう。その訳は一つには、こう云う事柄について有りの俚を話すような女性は、そうざらに見当らないということによる。また一つには、大多数の女性について云えることだが、二つの上昇期の内のどちらか一方が強く現れたり、あるいはその一つの方だけが自分で観察し発見した高まりに丁度一致するためである。しかしながらこのような実例を丹念にまたさらに正確に調査し続けてみると、女性の性的生命力の波頭が存在することが明らかとなる。一度この基本観念が理解されると、それまで曖昧に見えたりそれほど意味がないと思えた事柄が、次々と明白な意味深いものであることが分かる。私の説についてある女医と話したことがあるが、彼女は、自分の患者についてこれまで色々観察してきはしたものの、なかなか考えが纏まらずうまく説明がつかなかったが、私の説を当て嵌めてみると総てがハッキリした事を漏らしていた。

## モーゼの掟

性に関する科学的著作も数多いが、以上のような観察を実証するような説明は殆どない。だが一つの面白い例が、フォレル氏の「性の問題」の中で他の問題に関連して述べられている。彼は云う、「ある既婚の女性がその夫以外の男と関係した事をなじると、彼女は次のように告白した、彼女は二週間に少くとも一度は性行為がしたくなる、そこで夫が側にいない時には最初に来た男に身を任せると云うのであった」。フォレル氏はこの事実の背後にある一つの法則を見ようとしなかった。私達は誰でも、彼女の自制心の低さを、悲しむべき道徳上の異常とだけ見てしまう。しかしこの女性の場合その性欲の二週間ごとの周期が、生理法則に完全に適応しているのである。私の目から見れば、この法則こそ人間である女性のノーマルな感情の満ち引きを支配しているものである。

この点に関して夫婦の性生活についての「モーゼの掟」の述べるところは興味を引く。月経中の妻との性交は嚴重に罰せられたばかりでなく（レヴィティカス二十章十八節を見よ。「もしも男が病める女と添寝するならば、男女共に市民から除け者にされる」）、また「モーゼの掟」は、かような月経期間の後には、数日間女は性交から保護されるべきであると規定した。私の独自の研究によって得られた結果が、このように古代東方の知者に支持されているのを知って嬉しかった。近代の著述家たちは、「モーゼの掟」をあざ笑う傾向があるが、その理由は、性感情が最大であるとその著述家が考えている時に丁度モーゼが性交を禁じているからである。しかしこんな場合、どのような立場に立つてその著書の説明をしているかが明らかでないばかりか、その説を主張するための科学的資料をも提供していないのが普通である。こう云うわけで、ガラピンは彼の「産婆術提要」の中で次のように述べている。

「古代のユダヤの法律では、女は月経メンスの期間中と終了後七日間は、性交を慎むよう命令されていた。この法律を厳格に守る者は、レヴィティカスの中で命ぜられている以上に行動したと云われている。そして流経（月経血の流出）が当然続くべきはずの五日間の戒律を守ろうとして、僅かに月経メンスが、一、二時間しかなかった場合でさえ、期間だけはもちろん、これに七日の清浄な日を加えて総てで十二日としてこれを守ったと云われている。しかし性欲感情の最も高まった期間に全国民が常に禁欲を実行したかどうかは大いに疑わしい」。

これによつても、次の性交の前に、月経メンスの開始後十二日の清浄な日を持つという古代ユダヤのやり方は、私の表に示された女の性的欲求についての「周期律」とは殆ど正確に一致していることが、容易に認められるだろう。

これらの比較的単純なカーブは、女の自然の欲求がノーマルな自発的な高潮として表れたものである。この曲線は、恋愛の肉体的表現という建物を打ち立てる場合の基礎をなすものである。しかしながら、ここで忘れてはならないことは、特に贅沢な近代生活では、性感情を挑発するような無数の刺戟物が存在することと、同時にそれと反対に人間の性感情を禁圧したり妨碍ぼうがいしたりする傾向のある沢山たくざんの社会条件が現代人の生活に付き纏まとっているという事実である。女性も、男性の場合と同様に、一つの偉大な恋愛の中で揺り動ゆかされている時には、その愛する人との接触、その声、その微笑の憶い出が一つ一つの刺戟となつて、二人で経験した夜の陶酔を再び味わいたいと激しく要求するものである。従つて、女が愛している男と同棲どうせいしている時には、特に彼女自身でこのリズムに氣付くことは難事である。その訳は、彼女はその愛情により、またその愛する人が側そばにいてることによつて、

間断なく刺戟されるからである。

しかし、女性がハッキリとした徴候によつてそれと気付こうが気付くまいが、一般には二週目ごとリズムによつて大抵の女性が影響を受け、それゆえ、いずれにしても彼女の結婚生活がこのリズムによつて根本的に影響を受けることは確かである。生涯の長きに亘つて、溢れるような恋愛感情が燃え続けるというすばらしい情景は、そうさらに経験される事ではない。しかし結婚の終始を通じてお互の幸福を渴望する夫は、注意深く妻を研究し、妻がどのくらいノーマルなリズムを持つかを観察し、その上で妻の中に潜むどんな小さな個性でも見落さないように観察すべきであろう。そうして後、彼は自分の欲望が妻の性の本性と調和するように努め、その要求を妻に当て嵌めようと努めるべきだろう。

妻は夫に対する性の要求の周期が来た事を格別隠しはしないだろうが、妻がもし賢明であれば、その事を高尚な神秘と魅惑とで包むであろう。また、夫は自分が妻に喜びを与えている事を知ると激しい満足を覚えるものであるが、賢い妻はこの自然の歓喜の中に夫を浸すであろう。このように、自分で成功していると感じている夫は、自分の妻への欲望を彼女の本性にピッタリさせるように改めたり、適合させたりするのに深く心を配っている。それに比べて、妻の側の反応が変化に乏しいため満足も覚えず、無気力にされている夫も多い。例えば何時でも「夫の要求を退けない」ために、快感を覚えもしないのに喜びの感情を偽り現わしたりする妻があるが、こう云う妻を持つ夫は、妻に対して細かい気を配ろうとしなくなる。本当の感情は偽ることは出来ないものだ。だから夫婦お互いが相手を思いやる時初めて、その双方のうちに真実の感情が成長し花咲くものである。男女相互の

適合ということとは、そんなに単純な事ではない。この問題については次の章で考えよう。

## 第五章 相互の調和

愛は、その隣人に悪を与えるものではない。

— 聖パウロ —

## 男の特質

男は平均して性欲の季節的变化を自覚しない、それでも冬はやや低下し、春は盛りとなる傾向は見受けられるが、男でも、ある人はかすかに目立つ月々を、他の人は全く確実まことに二週目ごとのリズムを観察した例があった。しかし大多数の男の場合、きびしく抑制している時でさえ、性欲は居眠りをしていようなものだ。性欲は常にあり、ほんのかすかに呼び覚まして目覚めようと身構えている。それはたえず意識的な抑制が必要なくらい、何時いつでも、ごく自然発生的に現れてくる。

仮に、女が野生の動物のように年間極稀ごくまれな季節的な性リズムを持つとして、交尾期の他には女の肉体が侵されぬような権利を保留することが出来たとするならば、人間の男に取つてこれに勝るまさ幸はない。幸い、女は動物より頻繁なリズムを備えている。それにしても、女のリズムが男のリズムほど頻繁でないために、男は総ての時、総ての季節において女に無理に迫り、女のリズムを無視し、踏みこむ傾向が多かった。その場合、男は腕力によるか、あるいは「神聖な」権威や社会の伝統などの、強い強制力を使うのが普通である。

もしも男の性欲が絶え間なく起り、女の性欲が間を置くものであるならば、つまり、男の性欲が毎日あるいは数日間ごとに燃え上るのが自然であり、女の性欲が二週間目や一月目に起るものだとす

れば、二人からなる一組の結合だけで、男女双方の本性の欲求を同時に歪められない形で、満足させることは、一見して不可能であるように思われる。

現に、性生活において男女相互の満足すべき調和は、到底達せられないものだという諦めが、実に幾世紀に亘って私達人類を悩ましてきた。その結果、夫婦の一方の、つまり男性の相当な欲望が気鬱な振舞をする傾向が生じてきた。こうして私達は、夫の「権利」と妻の「義務」という社会生活の伝統を何時の間にか拵えあげてしまった。一人の男が全く率直に私に向かってこう云う。「このままの状態では、両性が欲している満足を得ることは不可能だ、一方が犠牲にならなければならぬ。そして女が犠牲者になる事の方が、社会にとって都合がいい」。

そうは云つても、意識的に女に犠牲を強いている男は、極稀である。大抵の男は知らないでそうしている。しかし、私達の道徳意識だけで毎日を送っていると、盲目の悲しさで、女が犠牲になっているばかりか、女と一緒に、大多数の男の幸福も踏みにじられるのだ。つまり男というものは、女は規則的にしかも頻繁に、毎晩位性行為の行事に耐え忍ぶべきである、と信じながら育てられているので、その性の営みの意義や結果については、とんと無関心になつてゐる。肉体的快樂のほんの数瞬間に浸りたいためだけに、男はもつと限りなく広がる喜びと優しさの境地を逃してしまふのである。そして男女は人跡未踏の楽園がまだ遙か先の方にあることに気付かず、あるいは半ば気付きつつも、その楽園から閉め出されている事で心を痛めている。

私ほこれから、既婚の男女に向かつて、相互忍耐の「平凡な道」ばかりでなく、どうしたら相互歡喜の「完全な道」を見出すかについて書くつもりだ。しかし、それに入るまえに男の欲求（性的欲



求)の本当の性質について、二三の要点を述べるのが大切だと思ふ。

私が目を通した処では、青年のために書かれた夥しい書物の中で、男の性的現象の意味についてハッキリ要点を書いたものは一つもない。この事は教養ある青年に合理的に指導を与える際、ぜひ飲み込んでおいてほしい事である。わが国では、生理学の一般的な概要が、青年の内に教えられている。それは、性知識を正確に明快な科学的方法で身に付けることが正しいからであつて、青年達が氣違ひじみた想像によつて不断に煩悶するというような事態を避けたいたためであることは明らかだ。ところが、私達の心と肉体に最も深く影響を与える性的機能の生理学となると、無視されている。私に云わせれば、このような無責任な態度は犯罪行為に値する。その現象と機能の骨子を述べるには簡単に直接で科学的な用語が必要である。真理についてひどい誤解を惹き起すような、不明瞭で曖昧な言い回しに慣れている人達が、例えその用語を耳にして驚くとしても。

### 男性の機能

結婚する男女は、次の事を知る必要がある。男の性の器官は、生きて活動し非常に小さな細胞である精液を作り出す組織の他に、ペニス(陰茎)から成り立っている。このペニスの中を精液が通り抜け、またペニスの助けをかりて精液はその落着くべき場所すなわち女性のヴァギナ(膣)に導かれるのである。女のヴァギナは、二重の唇に覆われた外口があり、通例、直立したペニスを受け入れる程度の大きさである。ヴァギナの奥の方には、さらに小さな口が開いている。これは子宮の首の入口で、大切な処である。特殊の環境で行われる場合は別として、性的結合はヴァギナの中で完成される

ものであるから、うまく妊娠するためには、精虫は子宮の小さな入口を通り抜ける必要がある。このような根本的な構造と結び付いて男女の生殖器官の中には、さらに別な組織や腺が備わっており、それらが無数の副次的な、だがしかし、極めて大切な役割を果たすのである。それらの内のある物は身体の中の殆ど全ての器官に影響を及ぼす。成人した男のペニス<sup>ほんとん</sup>は、立っていない時は、柔らかく、小さく、そして垂れ下っている。しかし、このペニスが一度興奮すると（私はこの用語を科学的な意味で用いる）急に大きく膨れ、堅くなり、直立する。この興奮はどのようにして起るかと言え、ある時は肉体が触れあうことによる神経と筋肉の直接の作用として表れ、また或るときは間接に大脳からの伝達によつて表れる。このようにペニスが勃起して、張り切った状態になるのは、精液が一部分に溜り過ぎることに原因するのであつて、これを射精によつて取除くのが一番自然に叶つた方法である<sup>たま</sup>と、まじめに考えている男性が多い。だが、これは完全な誤りである。

ペニスが大きくなるのは、何も精液が蓄積されることによるのではなく、血管に対する神経の反作用の結果現れる。この神経の作用は主として静脈により、そして僅かばかり動脈の助けをかりて血管を充満させるのである。血液がペニスの中に入り、それから逃げないように、そしてペニス全体が堅くなるまで、ペニスの中の静脈の穴が静脈血によつて、充満させられるのである。ペニスが堅くなると、女の体の入口に挿し込むことが出来る。するとその場所で接触のため一層刺激を受け、その倉庫である精囊から精液を射出する。精液は尿道を通り抜け外に出る。以上のことが明らかであるならば、ペニスの硬化や勃起は、必ずしも精液を射出するのに必要だからと云うのではないことが分かるだろう。血液を局部に集積させる神経興奮が消え去つた時に、もしも静脈血が自然に散るように、

ひとりでに空になることが出来るとすれば、精液を少しも損することなく勃起は静まる。その場合、局部的に過剰になった血液が、ただ普通の循環組織に帰るだけである。これは、肉体的にそうなるか、あるいは心が平静となり向上した感じの結果としてそうなるか、何れにしても神経が鎮められた時に、<sup>まったく</sup>全く自然に健全にそうなるのである。

一方、男の体の局部的興奮が次第に高まり精液の呼び出しと射出を起すに至って、一度スタートし始めると、射精はもう<sup>まったく</sup>全くどうにもならない力で行なわれる。そして精液とそれに組み合わせられた分泌物は組織外に排出され、<sup>まったく</sup>全く失われる。

この損失物には何が含まれているのだろうか。たった一回の射精で、平均して<sup>ほとんど</sup>殆ど二億から五億の精虫が射出されると云われている。これらの精虫の一個は（健康の男子で）一つ一つ、女の卵細胞を受胎させ、新しい人間の生命を創りだすことが出来る。（だから僅か<sup>わずか</sup>一度の射精で一人の男が世界中の<sup>ほとんど</sup>殆ど全部の既婚の女を孕ますことが出来る！）ごく小さい精虫の一つ一つは数えきれない遺伝的特質を内蔵し、また大部分、核原形質——我々における、最も高度に進化をとげた、また最も<sup>もっとも</sup>豊かな物質——から成り立っている。射出された液体の成分を化学分析して見ると、とりわけ人間の体組織に取って貴重なカルシウムと<sup>りんさん、いちじく</sup>燐酸が著しく高率に含まれているのが分かる。

以上のような訳で、精虫はしばしば排出すべきものである、と考えることは大変な誤りである。射出された精液のうち含まれる総ての生命あるエネルギーと神経の勢力そして精液を組織している貴重な化学的物質は、もつと活用しさえすれば、いずれも毎日の創造的な活動に役立たせることが出来る。私達の肉体の中で行われるこの化学的变化は、極めて神秘かつ靈妙なものはあるが、しかし

所詮は脳髓がこの鍊金術を自在に営んでいるのであり、ことに脳髓が知識によって助けられる場合は、そうなるのである。強い意志の力で血液供給を司らせる神経を鎮めることができるし、射精の浪費を避けてペニスの膨れた静脈を収縮させ減少させることができる。

### 自制と求愛と

しかし男がこうして時々自分を抑えることは良いことだが、何時までもこれをなそうと務めることは良くない。ある点までは男の力を蓄えるのに役立つその抑制も、度を越えようと、男の力を消耗させる。これは私の信念であるが、ノーマルな男女の場合、妻の性リズムの退潮時に夫の側が適度の抑制を行うことは、男の最良の力と元氣と喜びを与えるものである。健康で発育のよい若い女の大部分に当て嵌まると思うが、妻が二週目事に——意識的にせよ無意識的にせよ——、潜在的な欲求を持つているならば二週目事の性的結合によって二人は完全に相互の調和が得られる。なぜなら、こんな時にはただ一回の結合に限らなくてもよいからである。十二日から十四日の間よく自分を抑えることが出来た場合、多くの男性は、一回の結合だけでは自分達が完全に満足しないことに気付く。そしてもし、彼等が健康な妻を持つ好運に恵まれるならば、彼等は妻もまた一日もしくは二日の間に数回の結合を持ちたいと望んでいることに気付くだろう。もし第一表の波頭を研究するならば、波頭が二日ないし三日に亘って拡がって幾つかの小さな波頭を示していることが分かる。これは女が全く健康で活力のある時に起るのである。

一般的な云い方をすれば、(もちろん総ての人に当て嵌まるとは云えないが)私の見解を次のよう

に公式化することが出来る。夫婦の性生活を、お互いに最もうまく調整するには、妻の欲求の高まっているとき三日ないし四日間繰り返して交り、それに続く約十日間は全く性の営みをしない事である。最もお互いの欲求を掻き立てるような何か強い外部の刺戟がある場合は別であるが。

私の知っている人達が偶然にも彼等の結婚生活をこの調整方法に基づいて営んでいたために、幸福であった事を聞き、私は面白いと思った。そしてこの事が多くの女のノーマルな自発的感情を表わす私の表と符合していることは注目すべき点である。

しかしながら、月暦一月の間、性リズムの第二の波頭を感じないか、あるいは最初気がつかないかで、自然な性の喜びをたった一度しか味わない女が沢山いる。強い意思を持ち、バランスの取れた生活を送っている男の多くは、この比較的抑制された性生活に自分を適合さすよう、みずからコントロールすることが出来るだろう。現に私の親しくしている人達がそれを実行している。むしろ一方に、この期間が余りにも長すぎるため、その性衝動を抑えるのに度を越えた大きなエネルギーを使わざるをえないと思う人もあるだろう。自然の衝動を自制するため、価値のある仕事や知力や心の平静が失われるほど、多くのエネルギーと意思の力を費すことは決して正しい事ではない。精力の強い夫がいて、彼の方は二十六日間もの禁欲をすると、仕事をする力が事実上低下するほどであるに反して、妻の方は太陰月のうち、ただ一回だけ性の営みの中に快樂（ある人では月経の前に、またある人では月経の少し後に）を見出すにすぎないほど精力の弱いことがある。こう云う場合には、彼は妻が性的結合の中に自然に幸福感を覚える時を、まず注意深く心に留めておかねばならない。そうしてどのような代価を払っても、それに続く幾日間は自制し、一度目に彼女の欲求のあった時から二

週間を経た時に、情熱を込めて彼女に求愛し始めなければならぬ。妻がその時不健康でないならば、何時いつもよりは一層妻の心からの歓迎を勝ち得るばかりでなく、またさらに妻に快い感情を与え、お互が忘我エクスタシーの境地に達するに成功するであろう。

そうすることがなかなか容易なものでないにしても、このように自制する夫は、千倍も報いられるはずだ。なぜなら、妻はその健康と幸福感を増し、夫婦の性の営みから遙はるかに深い喜びを味うばかりでなく、夫自身は生命力と克己心が培養されるからである。健康な男性がこんな利益を得るとすれば、二週間の自制は、そんなに長いものではない。

### 女と男の違い

トマス・クラウストン卿はその著書「私が結婚する前」の中でこう云っている、「自然は実にうまく事物を調整しているので、たえず自制しているとそれだけ自制が容易で有効となる。それが一つの習慣となる。コントロールすることが少ければ少いほど、性の欲求は抑えがたいほど貧欲になる傾向がある。そしてこの貪むるような性欲が、それ自体病的となり、遅かれ早かれ性不能となる」この結論は私達人類の知的で道徳的な経験の結果であるばかりでなく、生理学的実験によっても支持されている。

人間内部の根本的法則についての知識のおかげで、私達は大体において生活を調節しているのである。しかし機械的な規則性だけでは統制しえないほど、私達人間は複雑であり、色々な印象に対して感じ易いのである。

女の性欲が強く、二週ごとに結合すれば大体満足するような明瞭な循環を持つ場合でも、これらの二つの期間の間お互に交りたいという切望がさらに起こることは珍しくない。こういうことが起るのは、まず愛しあっている者同士の生活の中で、彼等の情緒を掻き立てるような事件が起こるからだ。例えば、結婚記念日のように過去の情熱を思い出させるだろう。小説や詩や絵が、恐らく彼等の感情を深く動かすかもしれない。もしも愛している男が優しい求愛をすると、情熱が本来ならば自発的に起らない時ですら、女は概ね熱情的に應ずるほど体の底から興奮させられてしまう。しかしながら、彼女の性リズムが退潮の時には、満潮の際よりも愛の刺戟は一層強くなければならない。それゆえ、その際の求愛は、概して、女の情緒や精神的な面への働きかけが大切であって、肉体的性質の求愛はなるべく少なくしなければならないことが分かる。

夫に取つての最高原則は次の通りである。一つ一つの夫婦の行為は、優しい求愛に基づいて獲得しなければならぬ。そしていかなる夫婦の結合でも、女もそれを欲し、肉体的に準備がなされていなければ、決しておこなつてはならないという事を銘記せよ。

大抵の結婚では、夫は妻の遠い循環リズムに調子を合わせるために自制しなければならぬが、時には夫が常に性欲が弱く、その健康を損なうまいとすれば、ごく稀にしか結合をすることが出来ないようなこともある。もし、かような男が並外れの強い性欲を持つ女と結婚すれば、彼はその妻との性生活において苦しめられる。そうでないとしても交わりを拒んで妻の苦痛の原因を作るに違いない。かような人達に取つては、保留性交（射精直前に性交を止める方法）の方法が彼等の必要とする平静と健康とをもたらす、男の精力を節約し、そして女の求めている結合の快感と性神経の鎮静とを与えることが出来るで

あろう。しかし健康の度合の異なる人達の間では性的要求の大きさも違ふし、性觀念も隔たりがあるものであるが、その程度は本書の中で触れているより遙かに大きい。

性科学者H・エリスの述べている処では「アラゴンの女王」は、正式の結婚生活では一日六回が妥当な法則であると定めた！こんなに性欲の異常に強い女は、今日では恐らく何人かの夫を殺してしまふだろう。なぜならば、このような女はそれほど異例ではないが、かような欲望に匹敵し得る男は稀であるからだ。

夫婦の行為の時間的長さや度数については、人々から最も多く尋ねられ、また最も誤解の多い点である。がしかし、性交に関しては、医師すら驚くほど無知であるように思われる事実がある。これらについては、生理学的事実を簡単に述べる必要がある。私達が自分達の体の構造について、専門家ばかりに頼らないで各自が科学的知識を持つことは、かえって好色な好奇心や淫らな貧欲に対する最も確かな防壁となる。愛する人同士がこの知識を身に付けておれば、無知な夫によって妻が傷けられる怖れもないし、妻が思いもよらぬ残酷な行為をされるのを少しでも減らすことが出来るだろう。

### 美しい営み

性的結合が行われる場合、実際どういふ風に事が進行するかを知っておく必要がある。色々な準備動作で男女相互が性的に興奮した後に、勃起して大きく堅くなったペニスや女のヴァギナ（膣）に押し付けられる。普通、女の方が興奮してない時は、ヴァギナの入口とそれからその周りの柔い組織からなる外陰唇は、やや乾いていてむしろ皺が寄っている。そしてヴァギナの口は男の膨れたペ



ニスよりも小さい。しかし女が生理的に「興奮」の状態（つまり、彼女が性交を激しく欲しているとき）になつていれば、局部は体内の血液供給によつて充血し、ある程度は男のペニスのように、硬くなる。それと同時に粘液の分泌によつてヴァギナの口が滑らかにされる。ヴァギナの壁は、極めて弾力に富む筋肉からなつており、何時でも拡がり、男の大きくなつた性器を受けいれ、ピツタリ嵌まるように出来ている。情熱的な女においては、ヴァギナの口は自発的に引き締まつたり、緩んだりさえする。（頭の中で考えたり感じたりすることが、我々の肉体構造に及ばず影響は実に偉大なもので、ある人々においては、愛する人の事を思うだけで、優しい言葉を掛けられたり、キスをされるだけで、また美しい敏感さで求愛されるだけで、上に述べたような生理的変化が起るくらいである。）それゆえ、女の肉体が男を自然に要求するような状態にならない内にペニスを入れようとすると、それを受け入れるには小さすぎる乾いた壁のヴァギナの口を通つて、無理に目的を達しようと務める場面が容易に想像される。こんなやり方をする、彼は実際、妻に肉体的苦痛を与えることになる。むしろそんな風に無考えの女を使おうとする男に対しては、妻が精神的な反抗や嫌悪を感じ勝ちになることもあたりまえだろう。また一方においては、性器が膨脹状態になつた女は、すでにヴァギナの口は自然に準備されて、粘液で滑らかにされ、そして総ての神経と筋力は何時でも反応して、男の器官が入るのを容易く受け入れる用意ができてゐる。むしろこの説明は、結婚生活の経験のある女性の場合に当て嵌まるものである。処女の時の初めての性交は、もちろん総ての事情が異り、この場合には処女膜が破られる。結婚生活に入ろうとする娘は皆、この薄膜を破ることが必要であること、そのとき一時的に苦痛を覚えるものであることなどについて教えられているものと、人は思うだろう。

ところが呆れることには、娘達のなのお大部分は、完全に惨たらしいほどの無知のままに結婚生活に入る。さらに驚くべきことには、処女の体の構造のこの特質について、多くの男性が無知であるばかりか、しばしば結婚した男ですら無知な者のあることだ。大抵は結婚の当初、僅か一度でせっかちに男の方で完全にペニスを差し入れようとすると、薄膜の誠にあなどり難い抵抗にぶつかり、女は痛みを覚えるという事を忘れてはならない。優しい愛情深い夫たちは、この事を次第に考慮するようになり、その苦痛を無くするために少くとも数日以上自制しながらじわじわ花嫁に近づき、こうして少しずつ薄膜を破ってやるのである。花嫁はこのやや痛い入門に対して覚悟せねばならない。そしてこの苦痛はほんのしばらくのことなのだから、花嫁は、ただ嫌がってばかりいて、感じやすい花婿の気を挫くような事をしないで、何とか自分を抑え、服従して、相手を助けるようにすることを教えなければならぬ。一度、隔壁が破れされると、性的結合は容易となり飲びが得られる。

しかし、女性によつてこの薄膜の強さはまちまちである。人によつては一夜で簡単に破れるほど薄いこともあれば、人によつては、それが余りに丈夫なために、男が幾度試みても突き破ることが絶対に不可能な事もある。こういった事が起ると、男はわけもなく、自分には男としての資格がないのだと思ひこんで、時には大いに失望落胆するに至ることがある。と云えば、私の知っている例だが、幾人かの女がこの薄膜の中に僅かな切れ目が入っていて(もちろん医者の手術によつて処置はした)結婚後数週間経た時であったが、その組織が異常に頑強なためになお破れるに至つてなかつたのを見た。男は妻を娶つた当座、いっぺんだけ女を口説いて手に入れると云うのであつてはならない事を知るべきだ。男は、性行為に移る前に、その都度女性に言い寄らなければならぬ。なぜならば、一つ

一つの性交は、他の動物も知っているように、その度に改めて結婚するようになるものだ。野獣は男程馬鹿ではない。野獣は、必ずそれぞれに特色ある求愛をしてから雌と交わる。彼等は、他の雄と戦って自分の力を示すか、あるいは己の美しい羽や歌を見せびらかして、異性を感動させたりして、独特の口説き方をする。むろん、野獣は本能によつて、自然にそうするのだ。彼等は概ね、雌が自然の欲求を感じ始める季節にだけ言い寄る。しかし、季節の内外を問わず、のべつ幕なしに相手を欲しがる人間の男性は、二重の義務を果さねばならない。つまり、彼女の欲求が湧き、性器局部の準備がある程度、自然に整うまで、優しい魅惑と甘い刺戟によつて愛を求めなければならぬ。しかしここで、いくら強調しても強調しすぎる事のないほど大切な事を繰り返しておく必要がある。それは、女の愛は、まず、第一に、その感情と思想とを通じて動かされなければならないという事である。だから完成された恋人は、女の肉体の自発的高まりをぐずぐずと待つまでもなく愛の情緒を天にも昇る心の状態にまで高めることが出来る。

性の営みに入る前に、女の体が十分受け入れられるよう準備をすることは、単に女の苦痛を取り除くことが出来るだけでなく、男の立場から見ても価値があることになる。なぜなら（もし男が強姦によつてのみ快楽を感ずるといふような比較的稀で、異常な病気の持ち主でもない限り）男は、こうして達成した男女相互の調和から、すばらしく大きな情感を味う。その上男女共に、健康という極めて有益な結果が得られるのである。

## 相互の調和へ

ここで、二人が感覚的な調和はもとより、心理的にも精神的にも最も密接に調和しているとして、性の営みは、どういう姿勢で行うのがいいだろうか。男と女とが、お互いの目を見ながら、優しく口づけし、二人の腕をお互いからませ、顔と顔とが向かい合う。この姿勢は、やがて悦びの絶頂で二人が堅く結びあう時の姿をそのまま表している。

教育を受けた男で——明らかに信仰の立場からだが——この一つの姿勢以外を取る事を肯じない人が、今日も居ようとは信じられないだろう。ところが、ある奥さんが私に洩らした事によれば、夫のため押しつぶされそうになり、殆ど息が止まらんばかりになるので、行為の後疲労を取り戻すのに時間がかかる。しかしご主人は自分が普通だと考えている姿勢以外は、どんな格好をすることも「主義として」拒んでいるそうである。ところが、男というものは自分の体重を肘で支える義務があるという誰の目にも明らかに必要だと思われる事について、その夫は無知だったわけだ。お互が誠<sup>まこと</sup>に具合がいいということが、男女双方の性行為の指導原理とならなければならぬ。

優れた人達で精神も肉体もきちんとしているが、実際の結婚生活の中では、彼等が知識の上で知っている高い肉体感覚に完全に達しえないでいる人達がいる。こう云う人達は、性的結合が様々な姿勢で達成されうるものである事を全く知らなかったり、または極めて普通に行われている姿勢以外を取ることは誤りなのだと考えている。

しかも、これはまあ稀な例だが、夫婦とも普通の姿勢をすら知らないということが時たまある。私のぶつかった実例でも、子供を欲が<sup>ほし</sup>ついでいながら子供を設けることに失敗した夫婦や、結合の際完全な喜びに達しない夫婦を二三調べて見ると、妻が夫を抱きさえすれば良いのだと信じていたことが

明らかとなった。結局、こんな事では夫がペニスを差し入れる事が難しくもあり、往々にして不可能でさえもあつたわけだ。

さらに夫婦の性的興奮がかなり高まってくると、自然発生的な体の運動がごく自然に起ってくるものであるが、今日この体の運動について、もつともつと啓蒙する必要がある。夫婦は、二人の間の場合の大きな波にさらされていても、海草が潮になびくように、お互いを御すことが大切だ。そして、均衡の取れる姿勢が数えきれなくらいあるのだから、その内のどれがお互を最大の満足に導くかを自分達で発見すべきである。この点、性生活の密接な関係は多方面に亘っている、それに対して、特に定則を堅く決めるべきではなく、激しい感情のまにまに、肉体を一つの敏感でしなやかな道具としなければならない。

個々の男女について調べて見ると、性器の大きさも、形も、そして位置も、大変違いがあるものだが、この個人差の大きさについては一般にあまり良く知られていない。しかもそれらは、人間の顔の造作や手の形が違以上にひどい差を持っている。だから、大抵の人に適する姿勢も、ある人には不満足ということが起る。例えば、ある人は二人が横向きになる姿勢による時にのみ満足を覚えるといっていた。最も、この体位は医学の上からは一般に、妊娠に取って好ましくないと云われ、禁ぜられていたのではある。しかし私は、この姿勢で何人もの子供を作り、その夫が依然としてその体位を使っている女性を何人か知っている。この夫婦の行為の間、妻の快感を十分に燃え上がらすことに失敗し、行為の後、彼女が打ちひしがれ、疲れ果てているのを見いだす夫も数多い。しかし、もしも彼が、あたかも妻を両腕に抱きかかえるように、横の姿勢で彼女を抱擁すれば、彼みずからも無限

の喜びに浸り、また彼女にも健康と幸福の二つの宝を与えることが出来るというようなこともある。この点、すべての夫婦は様々の姿勢（体位）のうちで、どれが自分達二人に、適するかを、自分達で見すべきである。

こうして以上二つの要件が相合し結ばれ合った時、普通には、次の様な結果になる。多少の長短の差はあるが、やがて、男の心と体の興奮は痺れるような酔い心地でクライマックス（頂点）に達し、同時に精液が射出される。先の二つの要件が完全に調和の取れている時は、女の方も同時に男とよく似た、何とも云えない神経と筋肉の反応を示す。この相互のオルガズム〔性交における性的興奮の高潮する状態〕は、極めて重要である。しかし、多くの場合、男が余り早すぎるため、女の反応が用意されず、クライマックスに達せずに終る。たまには、男がそれに至るまでに、女が一度ないし数度の頂点に達することもあるが、多くの場合、次のように云つても決して誇張でない。つまり既婚女性の七〇―八〇%は、夫の反応が早すぎるためか、あるいは夫婦の性器の形や位置が、両者の間でピッタリしないために、十分なオルガズムを経験出来ないでいる。女性の持つ複雑な性本能は、その性器官と同様に、実に驚くほど、深遠なものである。したがって、それらを刺戟し興奮させるには、男は女の体全体、心全体を揺り動かす必要がある。そして、これには時間が掛かる。実際知識のない夫が普通に、その事に掛けている時間より、はるか長い時間を要する。

しかし、女は性器の表面に、クリトリス（陰核）と呼ばれる小さな退化器官のような小突起を持っている。そしてこれは、発生学的に云つて男のペニスに当るものであるが、ペニスと同様に、触る刺戟に対してもものすごく敏感である。このクリトリスの小さい頭は、ヴァギナの周りの小陰唇の間に

突き出ていて、女が本当に興奮した時には大きくなり、体運動により激しく刺戟され、この興奮を彼女の体内の神経全部に伝える働きをする。それにしても、女の眠っている性感情が呼び覚まされ、その体の入り組んだ反応が総て発動し始めた後でさえ、肉体の結合により女の情感を完全に掴むには時間にして一〇分から二〇分ぐらひは必要とされる。それなのに、性交を二、三分で片づけてしまう男をまま見受ける。こう云う男性は男女の双方が、お互いに性愛のクライマックスに達することによつて、もつと多くの恵みを受けるためには、自分の反応をコントロールする必要がある事を知らないのである。やや異常であるために、特別に医師の手当を要するような形の性器を持つ人もたまに入るが、大抵の健康な男のせっかちな性行為は、大部分無知によるものだ。そしてこれは根気強い自覚した意思の力でのみ打勝つことが出来る。

### 性行為の目的

男性に対し、ただ生殖の目的以外には絶対に「節制」せよと真面目に要求する人が相当いる。この人達は、性行為の中に生理的要求が沢山含まれていることや、性行為が人間の精神を立派に鍛え上げる事を見逃している。そして彼等は、「生殖目的以外の性行為の節制に反対することは、肉欲利己主義であるという唯一つの論拠を持つにすぎない」（「結婚における神の道」）との意見を述べている。

しかしながら、これに対して私の云いたいことは、男女結合の完全な行為は、三重の完成であるという点である。それは先ず男と女との精神的な結合を表わすだけでなく、実際にその結合を高める働きをする。そこではこの錬金術によつて限りなく微妙に魂の構造が深められる。次いで、その営み

により、人間が経験しうる限りの最も激しい肉体的快樂と恩恵が得られる。そしてこれは、この聖なる営みに参加する二人の間に言葉では現わしえないような優しさやさと理解を呼び起こす。それは他の何物にもまして行き届いた相互的たがひな、自己的でない快樂と利益であろう。同時に第三には、男性の無数の精子の一つが女性の卵細胞と合体せしめることにより、新生命を産み出すところの行為となる。

今日こんにちでは出産の費用と妻の肉体的苦痛とを恐れて、夫が「中絶性交」(いわゆる睦外射精)と呼ばれるところの事を、頻繁に実行している。——つまり、射精の直前に男の方がペニスを抜くのである。ところが、男がすでにひどく興奮しているので、射精はもはや意のままにならない。このやり方では、精虫は消耗される、がしかし、妻の体の中には入らないのだから受胎は行われぬし、結局妊娠は起る筈がない。このやり方は、欲しくない子供が生れるという苦惱を女性から除きはするが、女性に取って非常に有害であつて、賛成するわけにはいかない。それは女をいわば「中ぶらりん」の状態に残す傾向がある。つまり、彼女を刺戟しておきながら不満足な状態しておく訳であるから、しばしば行われる処に女の神経と全般の健康に非常な悪影響をきたすことになる。女はまた、男の分泌物を一部分吸収するという利益(この生理的な利益はいくら大きく評価しても、仕過しすぎることはない)と私ほ確信する)を失う。その吸収作用は、主として彼等の接触する生殖器の内面の皮膚細胞を通じて行われる。これは、生理学がすでに証明している事であるが、性器官からの分泌物の内部吸収が、そこから離れている部分の健康と資質とを決定するのにも非常に大きな役目を演ずるのである。男の精虫と同時に沁み出してくる高度に刺戟性のある分泌物が、女的全組織に浸透し、影響を与え得るといふことは、極めて在りそうな事である。実験の示す処によれば、ヴァギナの中に溶かしておいたヨードが、



一時間で組織に沁み通り、さらに排泄させられるほど速やかに、上皮壁の細胞によって吸収されていた。しかし精液から異った物質を吸収する効果に対する研究は、まだ依然として、科学的実験の工夫に残されている。最も、アーバスノット・レーン卿は、その前立腺分泌物の影響に関する観察により、私の見解に相当強い支持を与えてくれた、それは、この本の初版が出版された後、私に告げた際の事で、女が男性射出物のいくらかの成分を実際に吸収し、その益を受けるといふ私の見解を支持してくれるのであった。一方中絶性交は男に取っては必ずしも有害ではない。それは男が完全な性行為を果しているからである。しかし、かなり多くの人達が、その影響を望ましからざるものと考えている。つまり、男が中絶性交を妻に実行していると、彼女に対する欲求の減退あるいはインポテンツ（ベニスが勃起しなくなる病氣）にすら陥るかもしれない、また他方において、性神経の緊張を完全に発散させることが出来ないため、余りにも早く新たな欲望が起ってくるかもしれないと云うのである。たしかに、結果からみて安全であるからといって、あまり度重なつてこれ続けることは悪い。なぜなら、こうして創造力となるべき物を不経済に撒き散らすことは、男の活力と仕事の力とを減殺することとなるから。もし人が、性交における創造的衝動の価値を高く評価し、精液を無駄使いたくないで性的結合の相互の快楽と向上とを勝ち得ようとするならば、この方法をあまり実行すべきでない。性、生活の感情の中で、永続的な歡喜に達するには、自制が不可欠の要件である、ことを決してわすれてはならない。最高の満足は、純粹に肉体的な意味においても、男女の自然の衝動をうまく抑制してこそ、初めて、經驗することが、できる。

サリービー博士の言葉は、この点において最も適當なものである。（フォレル「性の倫理」一九〇

八年への解説)「フォレル博士は性本能を鎮静させるべきであると主張している。私はむしろそれを變形させねばならないと云いたい。性本能を抑圧する直接的な方法は効果のないことがしばしばである。しかし、私達は、性のエネルギーを個人生活におけるより高い形態に變形させることは可能である。かくしてこそ、それが、地球の表面を変化させた人間の、さらに高い活動、道徳的向上心、それから《休みなきエネルギー》の源泉であると云う、進化的論的ならび生理学的な論議を正当付けることが出来る」。

フォレルは云う(「性の問題」一九〇八年)、「生涯の結合に入る前に、男女は、後になって欺瞞ぎまんや性の合わぬ事などを防ぐために、彼等の感情を互に説明しなければならぬ」。もしも処女が、性交行為の心身に及ぼす反応や影響について良く知ることが出来たならば、このフォレルの言葉は嘆賞すべき忠言であるに相違ないが、彼女はそれを知らない。しかしながら、彼女は男の手の接触や唇の触れ合いが自分に取って甘く快いものでなかったならば、その男は決して真の夫ではありえないという事を、絶対法則と考へるに違いない。結婚前も結婚後も共に、二人の感情や欲求についてデリケートで高尚な打ち明け話をする事は、生涯に亘わたって共に一つに溶け合うべき二人が心掛けねばならないことだ。事実、熱心な教養ある夫婦でも数年の日子にっし(日ひか)を費さないと、彼等自身を十分に研究し、結婚生活が大変奥深いもので、生理的にも発展する意義深いものだという事を発見することは出来ない。しかも往々にして起る事であるが、夫婦のどちらか一人が子供を作りたくないと竊ひそかに決意している場合には、早目に打ち明け話をしておけば、どんなにか多くの不幸を減らすことが出来るだろう。

我々は皆個人としては色々相違点があり、性関係の総ての反応作用と交互作用もひどく入り組んでいるので、厳しい法則を決めてしまう訳にはいかない。夫婦という夫婦は皆結婚したのち、改めて自分達自身を研究しなければならぬ。そして、愛する者も愛される者も、彼等双方に最も<sup>もつと</sup>役立ち、お互の喜びと力とを最高度に与えあえるような一切の事をしなければならぬ。しかしながら、そこには犯す事の出来ないある法則がある。それらの詳細については、これまで述べたところからも察知して貰うことが出来るし、またそれは次の言葉のうちに要約されている——「愛は愛する人に何らの禍を及ぼさない」。

## 第六章 眠り

彼はその愛する人に眠りを与える。

## 妻の不眠症

睡眠が体を癒す不思議な力を持つ事は総ての人に知られている、不眠は、自然法則を何らかの形で侵したことに對する一つの罰であつて、恐らく人間の数限りない苦惱のうちで、最も広くゆき亘つてゐるものである。睡眠の内容や不眠の様々な現われ方は、人間生理学の専門家の深い関心の対象になつてゐるが、睡眠と性交との間の關係は、殆ど意識されないように見受けられる。しかも實際には英氣を取り戻すような自然な眠りと、完成された性行為との間には、密接な、そして全く直接な關係がある。

私達はこの事実を、極めてハッキリと当たり前の健康な男性の中に認めるのである。もしも、彼がその妻との性的結合を欲し、激しく興奮した後、何かの加減で久しく目的を達しないままに生活しなければならぬとすると、彼は、その期間中不眠症となり落着きを失うようになり、彼の神経は苛立つて来る。

それにひきかえ、好調な時がやってきて、性愛の戯れののち、高まりゆく情熱が拡大し、ついにその強い感情の行き着く処、性の行為の爆発的な完了となつて終えた後には、たちまちにして彼の体組織全体の緊張が緩み、その筋肉はものうい満足に優しい安らかなくつろぎとなり、数瞬にして男は子

供のように眠ってしまふ。

このすばらしい、さわやかな眠りは、忘却の柔らかいカーテンのごとく落ちて、あのクライマックスに達しない時の不一致と失望とは違っていて、人の心の救いとなる。しかもこの眠りは、酔い心地の快い疲れの後の回復薬であるばかりでなく、特別に元氣を取り戻す力を持っている。そして多くの男は、このような眠りの後には全組織が若返ったように感じる。

しかし、この場合女の方はどうなるだろうか？ 女も完全な満足を得れば、むろん男と同じようにぐったりと緩んだ感じで眠りにおちいる。

しかし今日のような事態では、優しい母のような物思いや、あるいは激しい妬ましさを持って、眠りもやらずに、その神経を痛めつけられたままで、男の眠り姿を見守る妻は、なんと多いことだろう。男の無知と不注意とから、女の方もまた神経の緊張を放散する必要があるということに男は気付かないのである。

多くの既婚女性が私に告げた処によれば、彼女達は夫と関係を持ったあとで何時間も、時には一晩中眠れなかった。一般に多くの男性が、性の営みに際し妻の方のオルガズムを起させるのに失敗するその度に、多くの既婚女性が不眠症と神経病に罹ると云っても過言でないと、私は思う。

女の側の完全な性行為と睡眠との関係は、世の妻の典型とも云えるA夫人の場合によく示されている。彼女は熱情的に愛した一人の男と結婚した。彼女も彼と共に、それまで他の異性とは一度も性の経験を持ったことがなかった。そして二人とも生理学については余り詳しい事は知らなかった。数年間二教養を積んだ人達であったが、人間の性的結合については余り詳しい事は知らなかった。数年間二

人は性の営みを続けたが、その間ご主人はある程度の満足を得、彼は直ちに眠りに陥るのが常であった。そして夫も妻も、女がオルガズムに達しなければならぬという事を知らなかった。そのため性行為の後必ず、彼女は「いらいらした」状態で取り残され、眠り着けなかった。それで、大抵の場合眠りに落ちこむまでに数時間を費し、一晩中眠らずに過ごすこともしばしばであった。

夫の死後、夫人の健康は回復し、そして一兩年の後に他の男性と新しい関係を結ぶようになった。彼女のこの新しい愛する人は、女の欲求を弁えており、十分な時間を掛け、男にとつてと同様女にとつても、性行為における完全な成功を確保するように注意を払ってくれた。その結果、彼女は良く眠れるようになり、それと共に神経と健康が回復するという恵みを受けることが出来た。

睡眠の取り方には色々あり、不眠症も色々な不調和が原因となつて現われるものだ。だから、女が完全な性交の慰めと喜びが得られない時でも、なお十分に眠れるということもあるだろう。しかし、不眠とその結果として、神経衰弱が完全な性関係の得られないことに原因している場合が、あまり多くの既婚女性に見られるので、大抵の医師が、疲れて眠れないと訴える女の患者に向かつて、第一に発しなければならぬ質問は、——「あなた方の肉体の関係で、ご主人は男の義務を完全に果していますか？」という事である。

既婚女性の公表した言明や、私に対する告白から考えて見ると、多くの臨床医師は、女にもオルガズムがあるという事実に対して無知でないまでも、少なくともそれを余計な、偶然的な現象として見逃している。だが、適度の回数オルガズムを経験することは、女の健康とその総ての力を十分に発揮させるために必要なことなのだ。

## 女の神経衰弱

この本は主として既婚者のために書かれたものであるから、まだ結婚してない人達の生活についてはここでは殆ど言及していない。しかし、特に未婚の人々が三十歳以上に達した後には、未婚者の性生活は極めて難しいものになり、さらに多くの研究と考慮を必要とするはずだ。特に、一度もノーマルな性生活を送った経験もなく、あるいは彼女達の性欲に対して何らの慰めも得られなかった女性達の間で、いかに不眠症が広がっているかということは、深く注意されねばならない。ノーマルな性関係が全く欠けていることが、多くの中年未婚女性を神経質にまた不眠にさせている理由であることは、殆ど疑いない。

しかし、未婚女性の場合、この問題は既婚者に比べるとまだしもそれほど鋭くもなく極端な形で表れていない。ところが、既婚の女性の場合だと、直接に性の刺戟を受けた後、性の営みの自然の完成を妨げられるのであるからたまらない。

未婚の女性は、ある特定の男性と恋愛にでも陥っているのではない限り、創造的な力が自然に湧き出てくる時のほか、性欲に対する格別の刺戟を感じない。それに引き換え、結婚した女性は、愛する男性と同居することにより何とはなく刺戟され、その上実際の夫婦の行為によって激しく集中的にまた肉体的に興奮させられるのだ。だからその際その性的緊張に自然の慰めが与えられないで中ぶらりんのまま置かれるとなると、この点では未婚の女性よりもずっと困った状態に置かれることになる。

傍らに健やかに眠っている夫の怠慢によって、眠れずに一人残されている夜半、妻が夫の身に引き換えて我身を思い、まんじりともせず幾時を過すのも、当然の事だろう。こんな有様では、妻の

身に多くの快樂も満足も与えられるわけではない。なぜなら、男女相互のオルガズムという肉体の喜びと健康を増進する利益（例え、オルガズムによつて与えられるはずのあらゆる事についてすっかり気付かないとしても）を受ける事を妨げられているうちに、彼女は性行為を一つの取り決めと感じるようになるだろう。その取り決めによれば、性の営みによる喜び、慰め、そしてその結果としての眠り、これら総ては男だけが持つことができ、女はただ男の享樂の受身な道具にすぎないことになる。いや事態はそれ以上だ。もし女が結合の終つたあととは何時でも、長いこと眠れないとすると、単に女は受身だなどといって済まされないことになる。つまり積極的に乱用される慣習のために、女性は自分の健康が侵害されているのをハッキリと知るようになる。

夫婦の性関係の不完全から生れるもう一つの悪い結果として次のような事態がある。予備的な性興奮（この十分な意義については彼女は気づいていない）によりせっかく眠気が消し飛んで陽気になると、ロマンティックな傾向の強い女というものは、その時最も親密にまた優しく語り出すものである。自分の心情に取つて最も近いまた神聖な事柄について語り出すものである。ところが彼女は、あれほど熱烈な愛情を表した夫が不覚にも、掌を返したように無情な仕打ちをすることによつて、恐ろしく感情を傷つけられるのである。それは結婚生活の最高の側面——精神的でロマンティックな性の交り——に対して夫が冷淡であるかのように彼女に思わせてしまう。こんなわけで、彼女は、自分の愛の睦言の途中で眠り込んでしまう夫に対し、粗野で不注意で野蛮だと思つたろう。——だがそれは、妻が夫の性的クライマックスと調子を合わせたことがないため、女がオルガズムに達しさえすれば自然にぐっすり眠れるものだという事を、全く知らないからである。



こんな風に悩んだり考えたりすることは、優しく愛らしい女性の心を暗くさせるものであり、色々な苦勞の種を持つている女性に取ってはなんとも痛ましい事である。そしてこんな悩みが度重なるに従って体の全組織に作用し、そして単なる不眠からさらに深い心身の傷へと広がるものである。

やや旧弊な生理学者たちは粗雑な学問の方法を採用しているので、性科学上の私の見解による生理的結果を理解することが出来ない。しかし、腹立ちとか苦痛とかの精神現象が、実験の結果明らかになり生理的影響をもたらし、全組織に対して有害であることは、今日誰でも知っている。

このような苦痛の多い不眠が数カ月あるいは数力年も続くと、女は神経衰弱になるばかりでなく、夫に対して怒りっぽくなる傾向がある。彼女は恐らく自分自身の生理について余りにも無知で観察力がないため、どうしてこんなことになるのかを十分に掴むことが出来ない。にもかかわらず、彼女は漠然とではあるが、夫の方に責任があると感じ夫の生理についてはさらに無知なため、遂に自分は単に夫の快樂の放縱のために犠牲になつていると感じるようになる。

夫はと云えば、自然の性排出に続いて体を回復させる眠りを取ることで健康が保たれ、妻の彷徨っている、暗い影の多い心中を覗き見ようとする気持になれないらしい。この心の中こそ、言い様も無い妻の肉体的な悲哀なのであって、それをどんなにうまく表現しようとしても、結局、何とほない非難や説明し難い微妙な失望が残るばかりなのである、こうして夫は、妻が示す腹立の総ての原因を「小理屈屋」の「神経過敏」のせいにし、妻の上辺だけでは見当違いな不平に対し、初めは気がかりにするが、やがて、我慢が出来なくなるらしい。

もしも夫が、もの優しく思慮深ければ、二人が一緒になる度数を、男に取って絶対に必要な最少限

度にとどめ、それで事態を良くしようと努めるかもしれない。ところがこんなことをすれば知らず識らずのうちに、彼は事態を一層悪化させるだけである。何となれば、通例、夫は妻の二週間おきのリズムについては全く知らないで、たまの心優しい抱擁が、必ずしもそのリズムと一致するようにならないからである。そこで今更のように寝室を別にしたり、結婚生活の大変甘い特権とも云うべき寝物語や優しい愛撫を交しに、妻の処を訪れるという事をしなくなる。するとここでも他の場合と同じだが、夫の善意ではあるが誤った考えによる自制への助力が、いよいよ夫婦の溝を深めさせるばかりとなる。

睡眠に関する私の見解の正しさを明らかにするためには、単に性交だけに限らず他のセックスの生理現象一般がどんなに体内で作用しているものであるかを、知らねばならない。そこでこのセックスの極めて奥深い影響のいくつかを述べる必要があるであろう。

### 性生活の効用

性的器官を除去された者においては、特に若い時にそうされた場合、体の他の造作や器官が異常に発達するか、あるいは全然成長しない。睾丸を抜かれた子供（去勢者）は、成人した時、頬髯やあるいは口髯が少しも生えないし、普通の男とは違う調子の高い声やその他の特質を備える傾向がある。性器官からはかなり隔っている、例えば咽喉のような器官の構造の発育も、性器官とそれに付随する腺からの分泌物の化学的刺戟によって影響されることが分かる。これらの分泌物は、外部の管を通じて出ないで、直接、血液系統に入る、無管の腺から血管組織へ直行する、かような分泌物は、

我々の体の殆ど全機能にとって大変重要性を持つている。これらは最近（本書の初版は一九一八年）頓に（急に、に）研究がすすみ、スターリング氏によるホルモンという通称が与えられた。これらの特殊な分泌物やあるいは「液」が、体内器官の一つ一つと関係があるという説は、大変古くから称えられている。しかし私達の時代になってもなおまだ、これら繊細な化学的物質によって作用されている神秘については、極めてぼんやりした、また極めて初歩の知見しか得られていない。私達は、胃の中に食物が入ると刺戟が起り、一つの無管の腺から化学的物質が出て来るのを知っている。そしてこの物質がさらに異った消化液を準備している他の腺へ血液を通つて送り込まれる。丁度そのように、首のところの甲状腺は、性器官と大変敏感な関係を持ち、膨れたり縮まったりする。発育中の胎児から、またそれを育てている子宮から、ある種の化学的分泌物が分泌され、母体の乳腺にその化学的刺戟物を与えることが分る。だからもし女子の卵巢や男の子の睪丸が完全に取除かれるならば、男女のホルモン欠乏のため体内でホルモンの作用に関係ある、あらゆる組織の中に、無数の変化や異常が現れることは明白である。

しかし生理学者の研究がまだ不十分なので、性生活や性経験が性器官の腺に与える深い刺戟の程度や性質について私達にはよく分らないし、またそれらが人間の生命と力全体にどのような影響を与えるかも分らない。

「メンデル派の学者」と「突然変異論者」たちは、共に形態学上の遺伝要素を重視する（私には異論がある）傾向があるが、これらは目下のところ生理学者達よりも一般大衆の人気を得ているようだ。しかし次のことは青年男女が知っておかればならないことだ。色々の化学的物質やホルモンの作

用により、ある種の内部器官が働き始めると、体内の飛び離れた場所の器官にまで直接の影響が現われ、活動し始めるという事実である。

それゆえ、性と関係を持つようなごく大切な器官に及ぼす影響は総て、予期されないような広い分野に量りしれない効果を与えることは明らかである。

さて、完成された性行為の結果として、女性の体内組織に、どういう現象が起るだろうか。性交に際して、女はほんの僅かしか分泌物を出さない事は真実であつて、それも主として粘液である。例えば消化するために消化液が分泌される複雑な過程や反応について、わたしたちは外部からその作用をみることは出来ない。だが性行為におけるオルガズムの時のように、神経上、脈管上、筋肉上の反応が表面に強く現われる場合には、それに応じて内部に深い相関作用が起るだろうとは、誰でも判断がつく。これほど体の中心に置かれた器官、それが単に存在するだけで女の個性に影響を与えるような器官が、オルガズムの時の激しい事前の興奮やその最高頂の鋭い快感から激しく生理的影響を受けることは、誰が考えたつて明らかではないだろうか？

この疑問を提出することは、同時にこの問題に答える事でもある。男の場合と同じく、女の場合にも、オルガズムによつて広い範囲の生理的影響が生じないとは、私には考えられない。もし私達がこの問題について十分に知ることが出来るならば、近代女性の「神経衰弱」や神経過敏の傾向の多くについて、その直接原因を突き止めることが出来る。つまり近代結婚生活の中に広く見られることだが、性交がノーマルな完結を見ない時の、部分的な性的興奮に原因がある。

この問題は、それから岐れ出る無数の小さな問題と共に、訓練された生理学者が、注意深い研究に

取り掛かる値打ちのある事柄である。近代人全体に取って、男性と女性のセックスの本質と性欲を理解すること以上に、深刻な問題、大きな重要性を持つ問題はないからである。男の性器官は、外分泌物と共に内分泌物をも発生するという事を、一つ心に留めていたきたい。外分泌物は、一定の興奮の結果として男の性器官にある腺から分泌される。内分泌物は、たえず小量ずつ滲出し、常に体の全組織に入りこみ影響を与えるように見える。女にあつても、男に匹敵するような絶えず出される内分泌物がある事を私達は知っている。同時にまた、性行為全体の特に興奮した時にだけ放出される、ある種の内分泌物があるに相違ないことも明らかだろう。

英米人は、大變多くの分野で世界をリードしているが、夫との肉体関係から満足を得られない既婚女性の数に至つては殆ど前例のないほど高い割合を示している。しかし上辺だけ見ると彼等は子供も生むし、総ての点では幸福に結婚しているように見える場合が多い。

近代文明のもとの神経症的女性は、西洋の女性に対する一つのあだ名になっている。それはいったいなぜだろうか？

この病気の多くは、完全な性行為の内的生理学について無知であるばかりでなく、その生理現象が外部へ明らかに表現されていることについてすら、男女が揃つて無知であることに原因している。

今日多くの医師が認めている事だが、様々な神経病やその他の疾病が、女性における自然の性感情や刺戟による性感情に対して、生理的な放散（慰め救うこと）が欠けていることに起因するという事実である。性科学者H・エリスは、オーストリアの一婦人科医の意見を次のように引用している。「子宮病で彼を訪ねてくる一〇〇人の女の患者のうち、七〇人は子宮の充血で悩んでいる、それを彼

は不完全な性交のためだとみている」(「性と社会」一九一〇年)

また一方、英国医学雑誌の最近号で、ある筆者が公表した幾つかの事例によると、まったくひどい神経病の妻が、夫の方で早漏の治療を受けた時に治つてしまつたといふ事である。私が本章で取り上げた、睡眠という生理作用は、性的反応と緊密に結びついた内的過程の多くの表われの一つにすぎない。性の儀式が、あらゆる意味において正しく行われた場合には、睡眠という回復の翼は、男の処にも、そしてまた彼の両腕の中に眠る女の処にも共に、舞い降りてくる。二人の体の中の総ての器官は、それぞれの役割を充分に果しつくし、二人の魂は、うっとりする境地へ高く高く舞い上つたのち、忘我の境に運び去られ、やがて、静かに日常的な意識の平地に戻される。

## 第七章 はにかみとロマンス

それゆえ、人は、長生きを約束出来ないのと全く同じように、人を愛する事とか愛さない事とかを約束する事は出来ない。人が約束し得る凡ては、彼の命を大切に、彼の恋愛を大切にすることを要する事だけである。

—— エレン・ケイ ——

## 生けるヴィーナス

総ての時代に、美術家は明快に、そして詩人はヴェールに包んだ言葉で、人間の裸体の素晴らしさを表現している。美の都パリにおけるミロのヴィーナスの前に出では、無分別でおかしな流行服人種でさえ、喉の詰まるほどの思いに打たれて、神々しく神秘に満ちた何物かがここにはあると感じ、しばし立ち止るであろう。ある日、私がこの古代の女神の前に敬虔な心持ちでたたずみ、彼女の調和の取れた曲線から力と幸福とを感じ取っていると、愚にもつかぬコルセットを着けた婦人がその前まで来て、ちよつと休み、傍らの男に涙声で云つた、「なんと美しい姿をしているんでしょう！」と。

仮に冷い大理石でさえそれほど私達の心を動かすものとすれば、ましてや生きた人間の美しさの温味と生氣とは、どれほど私達を捉える事であろう！ 均整のとれた体の若い男女は誰でも、いやにきちんとした今日の衣服をかたがた捨てた時、初めて比べ物のない美しさを發揮するはずだ。女のきれいな肉体は、どんな詩的な言葉でも云い表わすことが出来ないほど、天上の美を備えている。我々現代人は、人体美の文化を余りにも長年に亘つて無視して来たがため、多くの成熟した男女の

体は悲しいほど魅力を失ってしまったている。これに対し多くの若人達は、本来美しかるべき素質を持つている。だからこの本は主としてこれらの青年男女に役立つ。

一糸をまとわぬ若い男女の体が、どぎついものであるはずはない。安っぽいピカピカの飾りや、ギザギザした切り込みや不調和な線や色の、いわゆる「着飾り」を取り、かなぐり捨てた着物から抜けだした裸体姿こそは、全くすつきりとしたものである。見るも哀れなぼろを纏う街の小児すら、そのぼろを着を捨てて水に飛び込む時には、何と可愛らしい事だろう！ だから、恋愛の数ある甘い衝動の一つは、この生ける美の宝庫をお互いに見せ合う事だと云つても当たり前だろう。この世界中のあらゆる景色にもまして美しいものに浸つたり、楽しんだりする事を許しあう男女の姿は、芸術家の眼を惹き、楽しませる。

しかしながら、この衝動は、女の場合、その自然なリズムミカルな潮の満ち干によつて少くとも二つの側面を持つ。女が「不浄である」との古くからの慣習は、明らかに彼女を自ら身を隠したがることと相まつて、毎月ある期間夫の視界から身を隠すという事を妻にさせてきた。ところが一方女の肉体が、丸味をおび、特に膨らきつてくる乳房により、普段よりも一層魅力を増す時が、規則的に巡つて来る。(これは女の体内に起こるリズムミカルな過程の決まりきつた生理的結果であつて、前掲の図表に示されている、女の自然な性欲の波の高い部分と、大体に一致している) 女性は、女体の輝きと充実した完全さを格別意識せずとも、男の褒め称えに喜び応じ、それとない挑発を持つて、その恋人の前に身を露わにする。この無邪気な、女神のような美への自信は、性のリズムによつて自然に活力が退潮し始めると共に、引つ込んでしまう。



このように愛する人の身内の甘美な変化が画一的でないことは、男に取って誠に幸せなことである。なぜなら、男の血にはなお昔の獵人のような血が残っているので、何時も手近な置き台に載っているような美しさよりも、生き生きと生命の躍動する魅力の方が遙かに心を捉えるのである。女性の側で、偉大なセックスのリズムを抑えず十分働かせるだけの思慮を備えている限り、その絶えざる変化は自ずから最高に達し、遂に男の一夫多妻的本能はそれに心を奪われて、満ち足りてしまう。ところが女の自然なもう一つの姿として、前の場合と正反対に、引込思案になってひどく性的に冷淡となり、その孤独を求める気分を侵すものに対して激しい憤りを感じるようになる事がある。

こう云う事は、女性自身大抵忘れている事である。女性は男によって、実に徹底して「家畜のように馴らされて」来ているため、結婚後は自分は夫の所有物であると、簡単に決め込んでいる。そして妻は男の、ひっきりなしの要求に何時も大人しく従うので、かえって、夫の妻を追う喜びや、ワクワクする心のときめきや、驚きの感情を逸らしてしまう。

### 寝室を別にすること

私達のくすんだ近代生活を、俗な言葉で云ってみれば、大抵の結婚生活なんてものは、まず、こんな風に云えようか。……夫婦は一つの寝室に一緒に寝ている。すると、二人はお互に喜びを覚え興味を感じている時ばかりでなく、トイレットにいる時の様に不快な滑稽にさえ見える時にも、鼻を突合せている事になる。夫は「女神」が髪を不体裁に結んだり曲げたり、耳を洗ったりしているのを見せつけられる。一度や二度、あるいはほんの偶になら、それも男にとつての魅力であろう。だがそ

れは元々、云い知れぬ魅惑を保つには余りにも愛らしくない仕草である。湯舟の深い透明な水の中に浮かぶ美しい女を眺めること——それなら美しい事間違いなしだから、何時迄も男の心を捉えるだろう。しかし、日々の化粧に付き物の何ともつまらぬ事柄は、ただ女性の持つ美しさを台無しにし、愛するものに寄せらるべき男の興味も関心も鈍らせてしまう。だから終いには、平凡な毎日の暮らしに馴れきつて、お互が相手の内に覚える新鮮な歎びを減少さす嫌い（好ましく）がある。こうして、何時しか必然にしかも悲劇的に、夫婦がお互に対して働きかける新鮮な刺戟を弱め、従つて性の営みの完成度を低め、またそのため、その生理的価値をも減少させてしまう。

女の持ち前の慎み深さがすっかり失われていること自体が、結婚生活において、女が男の所有物になりきつてしまつてゐる事のなによりの結果である。つまり女の方に細々した個人的、家庭的な務めの総てを夫の目の前でやり遂げなければならぬという伝統が植え付けられてしまつたのだ。これに引き換えて、妻は、夫が勝手な事を云つてゐるのを我慢して聞かなければならない。こんなつまらぬ単純な生活を積み重ねてゐるうちに、結婚生活は、人生の高い詩的な魅力を失つてしまふことになる。こうして、女の美しさは、年のせいよりも、むしろ構いつけぬことによつて衰える。花嫁の目映く美しい姿が、日に日にその愛らしさを失つていくのを見ながらも、彼女らが体を大切に使うようにと、優しく囁いてやることさえしない男性もいる。しかし多くの夫は、妻の体をよく知りぬいてゐるの

で、妻が迂闊にもその美しさを失つて行くのを見て心を傷つけられるものだ。女性は、手の込んだブラジャーやコルセットを身に付けることによつて、しなやかな動きを失い、馬鹿げた流行の重い上衣でその運動を妨げている。女性は、日常生活や考え方その物によつて、外見だけでなく体付きまで、

思い通りに出来るものだという事を忘れている。

ある賢い男が、女は十六歳でその美を誇るに値しないが、六十歳の美は彼女自身の魂の表現である、と云った。かつてギリシア人が創り出した様に、世界中の人々が美しい姿に全人類を形作りたいと願うようになったらどんなに楽しいことだろう。

この点において私は、男が女よりも余計悩むものだと考えたくなる。なぜなら、男はまだしも本質的に狩猟家である。追跡の欲望とスリルを身につけ、森林でダイアナ〔狩りの女神〕に思い掛けなくも廻り会うのを夢見ている。ところがこれと反対に、女は結婚すると、総てを一度に許してしまい、男との共同生活の中で何時迄も受身のままでいる。

前章で生理的要素を深く考慮してきた後なので、次の事は詰まらぬ物と思われるかもしれないが、夫のための、妻に対する重要な一つの忠言となるだろう。——常にエスケープ（脱出）せよ。低いものを、詰まらぬ物、卑しい物から、脱け出せ。二人が結び合つて喜び合える時にだけ、夫が挑んでくるのを受けるがよい。これを出来るだけ実行してごらんさい。（そしてこれは案ずるより生むが易い事で、家事の習慣にいくらかやり直しを必要とするにすぎない）ふとこくあひ 懐具合が許すならば、夫と妻とは、寝室を別にしなければならぬ。それが出来なければ、彼らが一緒に寝ている室を随意に二分し得るようカーテンを用意すべきだ。いかなる魂も、孤独の不思議な力なくしては、十分な成長を遂げる事が出来ない。

結婚したからといって、その肉体と魂とは、本来彼女自身の物である。だがそれは彼女が誰も入らない避難所を持っていなければ不可能だ。処で、部屋を区別したからといって、何も、夫がしたく

なつた時だけ妻の部屋を訪れよと云うのではない。どんなに愛情を持つていようと、夫が妻の所に來る時、夫の欲情が露骨に分かるようでは、敏感な妻ならかえつて性慾がすっかり醒めてしまう。この点と、別室に取り残された妻の孤独感とが、夫婦別室反対論の理由となる。たしかに、夫婦が寢室を別にするやり方はしばしば結婚の幸福が破れる前触れとなる場合があることも事実だ。だがそれは、何も寢室を区別したからではなく、もともと事態が拙ますくいつているためである。特に妨げさえなければ、毎晩、愛しあふ夫婦は、暗闇だけで出来る優やさしい愛撫と愛情の籠こもったささやきを交わさなければならぬ。男は、また、心の底から永久に子供である。そして子供を慰めるような優やさしく甘い言葉は、成熟した男の生活をも温かく甘美なものにする。「お休みなさい」を囁ささやく時は、どんな根深い心の傷も忘れ得る時だ。そんな時は、暖かく優やさしい内緒話でせいぜいお互いを楽しませるが良い。これは前の各章で述べて来たことと矛盾しない。この慣習を守りさえすれば、夫婦が寢室を別にする事を愛情離間の原因だと見做みなす反対論を退けることが出来る。

## 第八章 節 制

性的なものである恋愛が、意思の力によって、情緒的なもの、精神的なものに変形された場合、それは何とすばらしく、何と感動的なものだろう！ あたかも高価な葡萄酒ぶどうしゅにも似て。そして、肉体だけの恋の無軌道な浪費は、単に、分別とか快樂の効用とかいう根拠から見ても何という無駄だろう！ 恋人同士の間で、この事——恋愛の俗化——ほど怖ろしいものはない。これこそ、多くの結婚がぶつかって砕け散ってしまう、あの恐るべき岩である。

——エドワード・カーペンター——

## キリスト教と禁慾主義

余あまりにも多くの結婚がこの岩「恋愛の俗化——肉欲本位の性関係の意」の上で破れたために、また男と女が総ての時代を通じて精神美あやがに憧れて来たために、あらゆる肉体的快感から自らを遠ざける人々ができてきた。自分の肉体を抑え支配しようとする男性の苦しい闘いを見ても、またより高い恋愛への、緩やかな進化ゆるの過程を眺めても、禁慾者が大きな功績を残していることは疑いえない。しかしこの功績はもはや、昔の事だ。今や私達は、本能に基づく生の欲望なまを支配する事が出来るようになってる。私達は、性の肉体的反応の複雑な意味を知っているし、それを精神的なものに転化させることも知っている。だから将来において、最高の社会的単位となるのは、次のような夫婦である事

が認められるだろう。この新しい一对は、完全に愛しあうことによって、人間に潜む総ての力を蓄え、特に完全な愛のみが創造し得る最高の潜在的な力を備えている。

むろん、私達は、今日古い生活様式の残り滓をまだ沢山引きずって生きているので、昔の禁欲主義者を理解するように心掛ける必要もある。恋愛結婚をして幸福と見られた数年が経過すると、男も女もだんだん性生活から遠ざかり、時にはそれを軽んじるようになり、そうする事で自分はさらに高い境地に達したと考えるようになることが多い。だが、こう云う人達はその結婚生活を通じて、次のような反省をしたことがあるだろうか——「我々の性生活は人間としてなし得る限りの最高レベルに達しているかどうか？」と。結婚生活を送りながら禁欲主義を称えた有名な人の一人は、トルストイである。「小説「クロイツェル・ソナタ」をみよ」。彼の晩年の主張は、最高の人間は、性欲を完全に禁圧して独身生活を送るべきであるとした。しかし、禁欲主義者は、あまり人間生理学についての知識を備えていない。彼等は立派な宗教的熱情を溢れるほど抱いているが、男女の高い結合が生み出す新しい生命の意義と潜在力とを、十分に理解出来ないことが多い。もし私達が、しばらく酸素なり水素なり、ばらばらの化学的原子の一つに変身すると仮定するならば、かえてそれら二つが一緒になつて作る水滴の物質的性質を少しも知ることが出来ないだろう。それと同じように、禁欲者は、真の夫婦の結合が齎す驚きや、尽きる事のない大きな潜在的生命力などについて、何の知識も得られないだろう。

キリスト教でも大抵の宗教と同様、その生れた頃には禁欲主義が強く支配していた。今日でもそうだが、当時、異性を敵視する厳しい禁欲思想が支配している一方には、ある種のロマンティックな

禁欲主義も存在していた。それは、同時代の異教徒との淫欲は禁じるが、同宗の者の間で好きあい楽しみあうことに対しては必ずしも禁じようとはしないものであった。こんな辻褃つじつまの合わぬ形ではあったが、それでもこれら初期キリスト教の禁欲者は、多少は結婚の恩恵めぐみめいたものを得ていたらしい。H・エリスは、これら禁欲者の性生活について興味深い説明を加えている（「性と社会」一九一三年第六巻）。

クリソストムは始める、

「私達の祖先は性交の二形式、結婚と密通しか知らなかった。ところが、第三の形式が表れてきた。（その家に処女を匿かくまう人々に反対して」より）——男は若い女を家に引き連れて来て、処女を犯さずに永久に留めておく。それはどういう訳だろうか？ 性交や肉体的接触をしなくても女と一緒に暮らすことは楽しいように思われる。それは私の感じだが、しかし恐らくそう感じるのには私だけではあるまい。そしてこの新しい結婚形式を産み出した人達も同じ思いであったことだろう。この遊びがよほど強度なものでなかったとしたら、彼等は何も自分の名誉を損なったり醜聞を生むような事はしなかったに違いない……結婚による性交よりさらに熱烈な恋愛を生み出す快楽がこの内になければならないと云えば、皆さんは初めは驚くかもしれない。しかしその証拠を見せさえすれば、納得するだろう」。

そして彼は続けていう。

「結婚生活をして、性欲に対し抑制を怠るならば、たちまち嫌悪に落ち込んでしまう。これは別としても、性交、妊娠、出産、乳を飲ませること、子供の養育、そしてこれらの仕事に伴なう

全ての苦痛と心配とで、女の若さは台無しになり、快樂の頂点は鈍ってしまう。ところが処女はこれらの重荷から解放されている。処女はその元氣と青春を保っていて、四十になっても若い年頃の娘のような心を持っている」。

「この様にして、処女と生活を共にしている男の心情の内には二重の熱情が燃えてくる。そして満ち足りた心でいるので、限りなく力を増す炎の輝きは決して消されることがない」。

クリソストムは、彼の時代の近代娘が求めるような細々した心遣いについて述べた後、丁度同じような心遣いを、その男たちが処女の恋人に対してあらゆる面から喜んで捧げる事を書いている。だが自ら捕えてきた女を処女のままにしておきながら、ただキスと愛撫とを恣にしていただけの男は、何時しか、タンタラス（ギリシア神話に出てくるゼウスの子、父の秘密を明かした罪によって、深さ首に達する水中に投じられ、餓えて頭上の美果を取ろうとすれば枝は後退し、渴して水を飲もうとすれば水は減退し、何物も飲食する事が出来ず焦燥の苦しみを嘗めた）的になってしまうのではないかと、クリソストムは考える。しかし、優しく慎ましいこの新式の行き届いたやり方は、異教徒の放逸を絶対に退けた初期クリスト教にとつて微笑ましい発見であった。そして、こうした方式がずいぶん深く根を張っていたことは、クリスト教会の厳格な長老たちが、醜聞に氣を揉んで、何時も小言を云わなければならなかったという事からも伺うことが出来る。最も、彼等の非難には時として秘かに羨ましがっているような形跡がなくもない。

かくて、ジェロームは、彼の手紙の中で、次のような男女の例を引いている、——その一对は「同じ部屋で休み」しばしば同じベッドにも寝、そして私達がそれについて何とか云おうものな



ら、かえつて私達を疑り深いと云うだろう。これに對してキプリアンは、彼の聞き及んだこれらの男たちが（その一人は教会執事だが）処女と親しい關係を結び、彼女らと同じベッドで眠りさえした事を、どうしても是認しない。なぜなら彼は「女性は弱く、医者は多情なり」とはつきり思いこんでいるからだ。

### 自然にそむくもの

もともと、厳しい禁欲などというものは、「禁欲」という言葉によってでつち上げられたものだ。むしろ、禁欲主義者が、奇蹟的なくらいよく自制し、性欲を抑え付けるのに成功することもある。しかしその場合ですら、彼は、自然に逆らつたやり方のため、強くなるというよりむしろ弱くなつてしまふことが多い。よほど偉い人ならともかく、アダムとイヴが産めよ増やせと告げられた昔から男女に備わつた性の欲求を、やたらに抑えるならば、歪みと狭さが生まれて来ることは当たり前だ。

エレン・ケイが「恋愛と結婚」の中で云つてゐるように――

余りにも強い性本能に對する療法として単に自制だけを推奨するこれらの禁欲者は、仮にこの自制がちよつとした生活のしこりにすぎないとしても、あたかも患者の熱病を治すのに、患者を叩きのめそうとする医者のようなものだ。病人がこんな治療のために死ぬというようなことは、彼にとつて問題でない。

しかしこれら禁欲者は、二つの異つたやり方で、このような信念に辿り着いたものらしい。一つのグループは（女性の禁欲者の大部分はこれらしいが）キューピッド「愛の男神、ヴィーナス

「の子」がこれまで彼女に満足を与えなかったものだから、遂にキューピッドを嫌うようになった。も一つのグループ（男性禁欲者の多くはこれらしいが）キューピッドが彼等の心を決して平静な状態において置かないものだから、遂にこの神を呪うようになる。

近代科学の教えに従つて公平な研究態度でこの問題を扱うならば、医者は、男女何れを問わず禁欲によつて直接に何らかの病気が起きている事について明確な表を作ることが出来る。これらの病気は、神経痛や「神経過敏」から（女にあつては）筋腫れにまで及んでいる。そして、特筆すべきことなのだが、病人が（多くの既婚女性がそうであるように）、性衝動を思うままに統御出来ると思ひ込んでいる時にも、これらの病気はなお存在し得る。

こうして禁欲者も性欲濫費者も（正式に結婚していると否とにかかわらず）共に、病気だと診断される。しかし、ノーマルな相互に幸福な結婚関係——確かに大抵の者には、積極的に回復し、生気を与える力を持つている関係——によつてはいかなる病気も起されないのである。

禁欲者の考えている深い真理は、性の創造的な活力が他の活動に転化されうるといふ点にある。この真理は、結婚においてもむろん決して見失われてはならない。性機能を、自然に幸福にそしてまた快く興奮させた後には必ず、健康な精力をあらゆる仕事につき込めるように、完全な禁欲期間を置かねばならない。

第九章 子供

私はあなたのもの

そしてあなたは私のもの、

だが、二人だけじゃなく

他のものに仕える私とあなた。

ほら明日の英雄と大詩人が

あなたに抱かれて眠ってるじゃありませんか。

そして私のほか

誰がゆりうごかそうと

このものたちは眼をさましません。

——ウォルト・ホイットマン——

聖なる浪費

神秘主義者は、彼が瞑想しさえすれば、己おのれの人格のしからしむる処により、永遠なる宇宙の神秘と合一しているとの自覚に達する。

しかし、普通の男女には、この神秘的な歓びは得られない。普通の人間は、万物の創造力との合体よりも、むしろ不調和の方を遥はるかに多く経験している。かの神秘家その人が聖なる力の光に溶とけきつて半ば気の遠くなるような恍惚境にさまようのにも似た境地は、愛する人同士の結合するただその

時だけだ。

総ての点で一致する二人の男女が、互いに心ゆくまで結び合い抱き合いたがって相手の肉体を求めて、二人の体内のあらゆる力を奮い立たせ燃え上らせる時の、歓びと夢心地は、ただ単に肉体的なものとのみ云い切れない。限りもない歓びの頂上にあるとき、その心を占める気の遠くなるような流動感、やがて高鳴る潮うしおの中に男をも女をも完全に溶かし込む。それはさながら、触れ合う熱で、二人の心が雲になり、宇宙全体を忘れてしまうような気がするのだ。その瞬間こそ、二人は一種壯麗な思いに浸りひた、限りもない創造力の波に身を任せまかせる。この境地を神秘家は「金色の光」という言葉で表わす。

こうして互いに溶け合うことにより、二人の愛する人同士は、至上の歓びの王国に生命と呼ぶその光りの一筋を持ち帰ってくる。

そして彼等に子供が生れる。これこそ、愛する人同士が抱き合いたくなるように、心をそそる様々な要素を織りなした、自然の至上の目的である。こうした男女の融合によって初めて新しい人間の生命が生まれ出る。その新生命を創造する事によって、地上に人間の自覚を輝かすたいまつ松明を、次の世代へ手渡すことが出来る。

この神秘なすばらしい事実を、心から詠いあげる詩人は、まだ現われてこない。しかし、真の恋愛を経験した事のある人なら誰でも、この人間を創りだす行為そのものが神聖なものである事を自覚する。

私達の肉体が、この最高目的のために特別に組立てられているものならば、二人の人間は、新生命

を創り出すために、相互に融け合う聖火をくぐり抜けるだけでよいかもしれない。しかし、私達の精神がどれほど高度に進化したとしても、我々の肉体そのものは物質で成立っており、その物質は人間が今日に至るまでの過去の進化の足跡を帯びている。そして下等動物の世界では、せっかく生れでた若い生命の大部分が無駄になっており、ごく少数のものが成長を遂げるために実に沢山の受胎が行なわれる。それと同様に、我々人間の体内でも（下等動物と較べると特殊なものを備えているが）男女両性とも実際に生命の実を結びうるより遥かに沢山の、受胎を待つ胚種（卵子と精子）を産み出している。人類の歴史の経路はいかにも深い足跡を残しているものであつて、生命の胚種は、せっかくの成長も都合の悪い時には無駄になつてしまふとは露知らずに、どんどん成長する。そしてよほど運のいい胚種だけが辛うじて全生涯を無事に終え、一つの新しい生命となつて産み出される。

人間の肉体がこのようなものである限り、私達が一部の宗教家の教えに従つて、これら生命に成りうるものを無駄にしないように務めることなど全く出来るものではない。女の胚種細胞（卵子）は、男の胚種細胞（精子）より問題にならぬほど少数ではあるが、独身女性たると既婚女性たるを問わず、何度も何度も成長しては無駄になつているのである。一方、精子細胞は、たまたま一個の幸運な精子が女の体内で受胎に成功したような場合でも、他の無数の精子は浪費される。もし宗教家が自分の主張をまじめに実行し、生殖目的以外には総ての男に完全な禁欲生活を送る事を要求するとしても、「場合によれば生命に成り得るもの」の総てを無駄にする事を防止することは出来ないはずだ。受胎されない卵細胞の毎月の損失などは、人間の意志の力ではどうにもならない。まさに人間ではなく、自然そのものが禁欲主義の司教のひどく攻撃している潜在的生命の破壊を実行しているのである。

そこで男女両性の胚種細胞の大部分が一個の胎児をも産み出さずに、無駄に壊れ去る事も仕方のない事とするならば、初めて胚種細胞を受胎させるときは、最もよい条件にある時をえらぶことが、新生命を創造するという最高の特権を生かすために必要となる。こう云う事を考えない結婚生活では、結婚後ごく初期の性交で妻が受胎し、その結果、九カ月後、早くも赤ん坊を抱かねばならぬというはめになる。

これに反して、夫婦が賢明で、二人の営んでいる行為の意味を完全に弁えていたならば、夫婦生活のうちの最高の仕事——それは同時に女の側に主として降りかかってくる重荷——に着手する前に、少なくとも六カ月あるいは一カ年の猶予期間を置くだろう。

### 結婚は早く出産は遅く

多くの理由から、自然に任せて早く子供を作る方が、より理想的である。しかし「文明」生活の場合しばしば見られるように、もしも経済的事情が困難であるなら、独身生活を長く続けるよりも、むしろ早く結婚して子供を作ることをのぼす方が、賢明である。

夫婦とも大変若くて、子供を育て上げる経済力が備わっていない場合には、二人は妊娠を数年間待つがよい。次に挙げるのは、例外と云つてよいほど幸福な結婚の一例である。また大学在学中のころ結婚した夫婦が、十四年後にすばらしい健康な第一子を得た。このように長期にわたり妊娠を抑えることは不妊の原因になると云われる位で、確かにあまり勧めて良い事ではないが、十四年間結婚を待つて男の「墮落」の危険を賭けるよりも、この実例の如く、ノーマルに満ち足りた幸福な生活を送

る方が、二人に取っては遥かに合理的であつた。

ある特殊の事情によつて夫婦が離れて暮らすことが多い場合は別であるが、何時でも子供の親と成り得る夫婦が、受胎の引き伸ばしに賢明な配慮をする事は親自身のためにも、また子供のためにも大切な事である。

両親の知恵と愛の豊かな実りとして生れ出る子供は、幸福になるように工夫された生活の中で、歎びと希望の内に受胎されなければならない。そして何よりも先にその子の健康に欠くべからざる條件は、母が子を産むまでの間、健康で幸福で、そして総ての心配から解放されている事だ。

結婚というものは、女の全機能に対して驚くほど深い影響を与えるものなので、結婚生活を始めたばかりのごく初期に子供を産むよりも、何年か経て体の組織がこの新しい生活条件にすっかり適応してしまつてから子供を作る方が具合がよい。

さらに、ただ子供のためばかりでなく、また結婚した愛する人達の永遠の幸福を保障するためにも、初めての妊娠は少し遅らせるべきである。妻の身ごもりと子供の出生とによつて体内器官の位置の移動や再整理を余儀なくされることは避けえないが、そういう変化の起る前に夫婦の性関係について、相互に話しあつて必要な事を取り決めておく方が、一般に賢明であらう。

私はこの著書で、何時の時代、どの社会にも当て嵌まる普遍的な人間の性関係について語つてゐるというよりはむしろ、高度に文明化した、人工的な、自然から遠ざかった現代社会に生活している人々を相手にして話しかけている。そして現代資本主義社会においては、早く子供を産むことは男の側に取つても自己犠牲と自己抑制をしなければならないことになるのは明らかである。その第一

の影響というのは、彼が花嫁を失ったという、つまりそれまで独占していた彼女が彼の両腕から抜け出してしまったというような一寸説明し難い感じである。この事實は、寛大にも生活のある種の秘密を私に託してくれた多くの男性が私に打ち明けた事柄である。C氏は、この種の人物のうちでも典型的な人であった。

C氏は静かな洗練された人で、強い調子のロマンティックな恋愛感情を湛え、新妻にまったく心を奪われていた。彼は男性的で十分に強い精力を備えていて、性交の要求は強かったが、(大変多くの男がそうであるように)それに応ずる女性の性欲とはどんなものか知らなかった。従つて妻の方にはオルガズムを起させるように少しも工夫しなかった。それで、肉体の営みは彼女から見れば不完全なものだったので、その行為により、格別の喜びも感じなかった。

結婚後幾許もなく、妻は身ごもり、挙式後十カ月で一児を得た。子供の出生後二年間、彼女の生気はとみに衰え、夜の行為は彼女に耐えられぬほど嫌なものになってしまった。そして遂に、夫との結合を拒むほどになった。そして、この二人がいくらか世間並の夫婦生活を送れるようになったのは、実に結婚後三年を経た後であった。その時までには、毎日家庭で顔を突合せている夫婦の親しさはあつても性生活から長く遠ざかつていたことや、男の側の神経の緊張のために、夫のロマンティックな感覚が、すっかり弱められてしまつていた。二人がお互に對して感ずる自然な性的興奮が衰え、性の営みの中で相互の最高頂をどうしても味わえないようになってしまつた。

同じような苦しみを経験した、も一つの例がある。D氏夫妻は、妻の不健康——實際の病氣や空想上の病氣など——によつて、数年間夫婦の行為から遠ざかつていた。その後、夫人が健康を取り戻し



熱情的に真実の性行為を欲し始めた時に、夫にはそれが出来ないように感じた。彼にとつては、彼自身の表現を借りれば「自分の妹を強姦する」ような気がした。

一度ひとたびこのような感情が男に湧くと、「早く快適な喜びの絶頂を取戻すこと」は大変難しい。そして夫婦生活の初期に満足感を失ってしまうと、その後死ぬまで輝く喜びを取り逃がしてしまう。その夫婦の歓喜は、その経験の美しさのためばかりでなく、その歓喜の翼になつてゐる生命力のためにも、はかり知れぬほど高価なものである。

他方において、もしも数カ月（あるいは若ければ数カ年でも）待つて、新婚の夫婦がお互に適應する事を学び、お互の愛情を高めあうことが完全に出来るようになったならば、子供の出産によつて生ずる混乱は、決して二人の幸福に取つて危険ではなく、かえつてその祝福となり完成となるであろう。ある男がかつて私に次のように云つた事がある——「人は最愛の妻のためにはどのような事でも忍ぶことが出来る」しかし妻が、本当に愛らしく思えるのは、ただ彼女と夫とが揃つて愛のパラダイスに踏み入つた時ばかりでなく、妻の肉体的条件が性交を不能にしている間中は夫を拒んでゐるといふ事の大事さを、妻がその体験から得た洞察力で充分に悟つた時である。

### 妊娠中の節制

妻が妊娠している間の性関係の可否については、性問題に関する夥おびただしい書物の中で、色々と言われている。この事柄については経験は区々まちまちであつて、各々のケースについて十分な事情を知らずしては、確定的な助言を与えることは困難であり、また不可能でもある。しかしながら、野生の動物のメ

すが子を腹に持っている時の感嘆すべき清浄な生活を私達が観察した時、また私達近代人の通弊といつてもよい妻の性欲についての驚くべき無知と無関心を考え合せてみる時、このやかましい問題の安全な答は、子供の出生前少なくとも六カ月間は、女は完全に節制を守るべしということに落付きそうである。しかし私は、この時期に女の方で結合を熱望するものだということも、多くの女性から耳にしている。と同時に、他の女性は、そんなことは信じられない事だともいう。

この問題について、原始的な動物と人類との対比を余りに強調することは出来ない。と云うのは、高度に文明化した私達人間は、あらゆる面で、先祖の慣習を離れ、新規な方角に発達して来ているからである。妊娠中の性交が正当で賢明であるか否かというこの問題は、科学的研究に俟つべきものである。この点についてその感情をあげすけにさらけ出すほど、気持のさっぱりした率直な男女は大変少い。そして、個人的に知り合っている女たちから事実を誘い出すことが出来るように、優しく同情的に患者に接する医師もまた誠に少い。私がこの問題について直接個人的な打ち明け話によって得た僅かな例証を見ても、絶対に相入れない方向に答えが別れている。そしてこの点で特に、他の多くの点よりも妊婦の健康要求、精神状態に甚だしい開きが見られることは確かだ。私はある有名な専門医師から、次のような興味ある暗示を得た。その医師の患者の一、二の例であるが、妊娠中の妻が幾度も性交を欲したのに、その夫が彼女のためを思って、その度ごとに拒んだ。ところがその後生れた子供が、育つうちに落付のない自制心の乏しい性向を現わし、そして自虐的な傾向がはなはだしく目立って来たように思われたと、その医師は観察の結果を述べている。この極めて暗示的で重要な意見が、信頼し得べきものかどうかは、多数の実例によって確かめるほかないので、私は喜んで、世の

両親や医者から例証を得たいと思う。しかし世俗な意見で、食物に対して妻の好みが現われるとき、別に害のない場合にはそれを満足させることが子供と母に取って良いとされているのと同じように、私の意見では、生れてくる子供の将来の母と父との間で適度の注意深い性的結合が望まれる場合には、親子三人の利益のためにそれが充たされる方が良いと思う。しかし、この私の意見はただ仮定的に、そして主としてこの点について私に尋ねた多くの質問者に対する答えとして述べたものである。性交に対する節度を越えた過度の欲求は、無論良くない徴候と見るべきで、専門医に相談する方がよい。深く愛している男と結ばれて、その子を身ごもった女は、出来る限り夫が生れてくる子に感化を与え、なるべく多く子供と彼女の側そばにいて欲しいという激しい熱望を持っている。私達がよく想像し得るこの熱望の根源となるものは、恐らく一つには優しい感情やさに基づくものであり、またもう一つには肉体の接触に伴い皮膚と皮膚との間に起る超顕微鏡的粒子の美しい感覺的な交流もとに基づいている。この作用については、カーペンターの「恋愛成年期に達す」の中で美しく暗示されている。

妊娠中の女は、最も強い形もつとの肉体のオルガズムを経験すべきではない——事実、それを経験することは出来ない。そしてこの極めて微妙に深く心を蕩とろかすような調和的な結合については、ロマンティックな説明がされるばかりでなく、私の考えでは、科学がこれほどデリケートな事物を取扱うほど進んでくると、やがては、本当に生化学上の根拠もはっきりして、科学的な証明が与えられるであろうと思う。

正当にものを具体化して想像する力が欠けている多くの人のために、妊娠中の性交には正常位は女に取って不適當である——実際、極めて有害であるかもしれないという事を付言せねばなるまい。

つまり、こう云う場合の方法として、二人の体の重みがベッドの上にあるいは二つの枕の上に等しく掛かるように、従つて女の体に男の体重が掛からないように、二人の体を互いに絡ませ合う姿勢を取ることが容易に出来る事である。「男女とも横になり女の前あるいは後から男が抱き抱える」。

トルストイは、妻が身籠もつていたり授乳していたりしている間の性的接觸を、強く非難した。そして「一度に愛する人もなり、疲れはてた母ともなり、また病身の、いらいらしたヒステリーの女ともならねばならない妻に、負担を負わす」ような夫を咎めている。そして「天は妻をその愛する人として愛し、母として無視し、そして夫自身が原因になつて生じた彼女のいらいらした気分やヒステリーのために、妻を嫌うのである」このトルストイの考えは、今日のお上品な人達の氣持を代表しているといつてよい。

生れ出る生命が妻の体内に宿ると、妻はその体の入口に夫の体を入れさせたくないと思ふ時期があり、その間自然は夫に不断の緊張を与える。その事は、妻の方で考えてやらねばならない。そして優しい愛情深い妻は、夫が自然的に必要とする肉体的な慰めを与える手段をいくつか上手に見つけるだろう。

夫の要求を理解して同情する妻と、精神的に調和していると感じている夫の中にはなんともいへぬ利己的でない優しさが見られるものだが、これは結婚生活の中で二人の愛情をさらに深める最も尊い事の一つである。男の内にこの優しさを呼び覚ます術を知る妻は多くの男が不幸にも溺れがちで、自己中心の泥沼から、夫を引き上げる物である。

妻を熱愛し、しかも長い間妻から遠ざけられている情熱的な男の場合は、何も肉体關係を結ばなく

とも、夫が妻に近より愛撫するだけで十分だというようになるだろう。

### つわり、ついついの迷信

第一子の誕生後は、母とその子の健康を考え合せて、第二の妊娠を急がない方がよい。第二の小さい生命が芽ぐみ出す前に、少なくとも一カ年はゆとりを取るべきであつて、つまり第二児が生れるまで、最少、限約二年を置くべきである。

この事が母親にもまた子供にも重要な問題である事は、専門の医家によつて一般に認められている。そして数人の著名な婦人科医達は子供を産むのには三年ないし五年の間隔を置くべきだとも主張している。すべての人間関係の中で無理に強いられ、いやいやながらの母になる事ほど怖ろしい奴隷状態と苦業はない。それと同時に、愛する男の子供をお腹に持つて育てている女性ほど、大きな誇りと喜びを抱くものはないはずである。お腹の大きい女性が、街中を歩くとき自分の姿を恥ずかしく思うなどという事は、我々毒された「文明」についての重大な反省事である。我々が、過度に陥りやすい弊を改め、健康な種族であろうとして以上、妊娠はこの勝利の行進に加わつた尼僧のように、その神聖な重荷を抱いて大威張りおおいばりで歩くがよい。

妊婦の健康法について、誰でも知っているような事柄について改めて助言を与えるのは、この本の領分外の事であるが、女性と子供の健康と幸福にも影響する重要な根本問題について、一般に看過されているものが、一、二、三ある。例えば、指導的な医術専門家たちの「つわり」に対する考えである。彼等はこれは妊娠の早期に極当たり前の物で、「生理的過程」だとし、完全にノーマルなもの、

当然のこととして耐え忍ばねばならぬものだと思做している。これは悲しむべき低い健康水準を示すものである。この、どちらかと云えば些細な、しかし胸の悪くなる嫌な経験が、女性の一生の中でも一番すばらしく美しい月日の中に、どうして現れなければならぬのだろうか？ 私は、つわりで苦しまなければならぬという理由は全くないと思う。むしろ、こうした医者は盲人の手を引く盲人の案内人だと思っただけである。彼等は何時でも病人や半病人を扱いつけているので、人間に高度の輝かしい健康状態を望む本能を失ってしまったている。そして一方女性の側はと云えば「文明」生活によって生命力が低下したうえに、でたらめな性経験の重荷に悩まされ、あれこれと様々な方面から苦痛を経験したあげく、輝やかしい肉体の美と健康についての自信を失ってしまったのである。時には例外的な女性もあつて、妊娠の月日を、少しのハンディキャップ無しに過している事もある。こうして女性はつわり、さえ感じない。誰でもこの人達をうらやましい例外として見がちであるが、じつは、彼女らこそ皆の人が到達すべきノーマルな水準を示していると思わねばならない！ 総ての妊娠がこの健康水準に達するために必要な一つの手段は次の事を知ることである。大抵の女性が知っている事であるが、子供がお腹に入ったという事が分かると直ちに、妊娠はすぐにコルセットは無論のこと、重い、体を締め付けるような衣服は脱ぎ去らなければいけない。固定したバンドやきつい紐の付いた物も外さなければいけない。専門家たちは、妊娠三カ月から四カ月までは「安楽」なコルセットをしていても、害にはならないと云つてすましている。私はこれは人を誤らせる愚論だと非難する。圧迫感、気付かないことも多いが、このような時期には異常に強く感じるもので、ほんのちよつとした圧迫があつても、てきめん靦面につわりが起る。衣服の標準は、うんと軽く、うんと緩く、

例えば蝶が女の素肌の上を着物の下を潜くぐつて、羽を傷めずに這はうことが出来るほどでなくてはならない。これは、大方の人が大げさだと思ふかも知れない。しかし非常に味わい深い真理なのである。もう一つ別に、この期間に輝やかしい健康を保つ方法は、食事出来るだけ沢山たくさんの果物を加える事である。殊ことに、ミカン、モモ、リンゴが良い。

妊娠中の健康に関しては、様々さまざまの書物が著されているが、啓発されるようなものは、殆どほとんない。これまでこの主題を扱ったもので最良の書物は、アリス・ストックハム博士の「産科学」であると思う。最も、この本の中には、基礎化学の上の誤りが沢山たくさんあるのが残念であるが、例たとえば、炭素質を炭酸塩と呼ぶような誤りが見られる。このような比較的つまらない誤りは、科学的な人々には博士の仕事全体に偏見を持たせるに十分であるかも知れないが、彼女が伝えようとした主旨の深い真実性には、何らの影響をも与えてはいない。その主旨こそずっと昔、一人の賢い年とつた英国人によって、初めて公開されたものであった。

両親からその子供へ遺伝される様々さまざまの資質に関しての多くの問題は、優生学という名の下に研究されているが、これについては私はここでは触れない。また出産や育児の問題も取扱うまい。これらの主題については多くの著者が考察を行っているし、私のこの本における目的は、他の人がとかく無視しがちな性生活の局面に光りを当てる事にあるのだから。

### 簡単な障書

私は全篇を通じて、異常な体質についての考察は省いてきたが、ここに一つの状態、アブノーマル

に見えながら、正常で健康な既婚者の生活に関係のある状態が見られるので、これについて少しばかり書く必要があると思う。

二人とも健康で、愛し合っているながら、何もうなずける理由もないのに、子供が出来ない夫婦がよくある。

信じ難いことだが、我々の肉体的構造に全く無知であっても、成長した男女なら結婚生活に入ることが出来るし、また結婚生活を何年も続けることさえ出来る。こうした無知が子供の無い原因となっていることがあり、この場合は二人の中のどちらにも親となる資格が欠けているわけではない。時にはまたちよつとした、容易に取り除く事の出来る障害が、原因となっていることもあり、些細な構造上の特異性から不妊となることもあり、これも簡単に治すことが出来る。

結婚した男女の過半数が、産児制限の実行もせずのべつ幕なしの妊娠に悩んでいるが、一方ではまた、殊ことに中流や上流の社会では、子供を欲しがりながら、不思議にもこれを授からない夫婦が沢山たくさんいる。医者は、その男性と女性とを診察して、二人とも完全にノーマルであり健康であり、一緒になつて、子供を持つ能力があると説明するかも知れない。だがやはり子供は出来ない。時には、これは女性の側の、いくらか酸性の分泌物の不都合な活動が原因となつている。この分泌物は、女性に害を与えないし、また女性は自覚すらしていないが、活動的な精子を無力にするには十分なのである。そこで、時には性交の直前に、炭酸ナトリウムのような弱い中和溶液でヴァギナを洗浄することによつて、妊娠を確実にすることも出来る。生きた精子が、これを待ち受けている卵子の処に突き進もうとするのを妨げるもう一つの原因は、子宮口の粘液の過剰である。このような場合に大切なのは、



精子が射出される前にはなくそれと同時に、またその後、真に完全な筋肉的に力強いオルガズムに、女性の方が到達する事である。女性のオルガズムを完成しようがしまいが、関係がないというところがよく論じられている。なぜなら、女性が少しもオルガズムを経験しなくとも、沢山たくさんの子供を持つたという多くの例が記録されているからである。しかし、一般に、女性には非常に多くの異った体型があることが忘れられている。あるタイプの女性、広いヴァギナを持ち、そのくせ粘液は僅かしか出さない多産な母親は、一度もオルガズムを経験しないで、一ダースもの子供を生むかも知れない。しかし一方では、同じように完全でありながら、神経質な女性は、ヴァギナの中に精子が泳いでいる間にオルガズムを経験する事の出来た場合にのみ妊娠するであろう。

女性の側の不妊の原因と成りがちなもう一つの軽い障害は、子宮口の位置と膣道の関係である。このために精液の一滴も子宮の入口を通り抜けずに失われてしまいやすい。これを防ぐには、結合の行為が終ったなら、女性はすぐに寝返って、二、三時間はうつ伏せになるのもかなりの効果がある。疑いもなく、総ての女性に生殖力の強い時期と弱い時期とがある。しかしある女性には他の人達よりこれが明瞭でなく、月経日のどの日にも妊娠する人がある。だがその他の女性には、一カ月に三、四日から十二日、あるいはそれ以上も妊娠の不能な一定の期間がある。そしてこの妊娠しない日々が終ると、次には生殖力の強い日々がだんだん現れて来る。したがって、結婚して数年経っても親となる幸運に恵まれないで、しかも子供を欲ほしがっている夫婦は、結合の時期として、これらの妊娠の可能性が最も多い日々を選べば良い。妻の妊娠を熱心に希望する夫は、妻の同意を得て、このような日々に出来るだけ性交を集中すべきである。

一方、妊娠しようとする欲求が、神経の全組織の上に及ばず影響の大きさも忘れてはならない。余りにも氣狂いじみた熱望は、余りに頻繁な性交をもたらし、肝心の熱望そのものをぶち壊してしまう。なぜならば、妊娠を完成させる要件は、単なる卵子と精子の合体だけでは無く、その授精した卵子が子宮壁に定着する事なのである。そして激しい神経の興奮はその妨げをするかもしれない。事実、十九世紀のある医者が、かなり重大な事柄を述べている。それは、性知識がタブーとされていなかった種族の中には、自由意志で受胎を調節し、また、単に精神力を使うことによって受精した卵子を意識的に追いつく事の出来る女性達がいたと云うのである。

近代社会における女性が、非常に神経質な状態に陥っていることは、彼女らが絶えず煙草やその他の刺戟物を必要としていることによっても分かる。この女性達は（最もこれは一般的に真理だというわけでは決していないが）しばしば受胎するのもかも知れないが、同時にその受精した卵子を、それが本当の妊娠となるため落ち着くべき処へ落ち着く前に何時でも放り出してしまっているのである。そこでもし母となる事を熱望している女性が、自分が絶えず煙草を吸っていることに気付き、あるいは自分自身の中になんとなく神経の落着きを欠いている点を認めたならば、彼女はこうすべきだろう。ただ煙草を制限するだけでなく——これはもっと深い欲求の一つの兆しにすぎない——次のような方法を取つてできるだけ彼女の全組織の平静な状態を恢復すればよい。まず長い睡眠、田園の空氣、たつぷり新鮮なバターを取る事。それから彼女の神経に欠けているもの、そして彼女が無意識に要求しているものを補給するための簡単な治療法をなんでも実行するのがよい。

信じられないほどの無知

多くの信じられない事であろうが、想像以上によくあることは、数年間の結婚生活を続けている夫婦でありながら、妻がいまだに肉体的に処女であるということがある。これは二人ともどの程度までペニスとヴァギナの中に入れたらよいかという事を知らなかったためである。驚いた事には、このような夫婦が、私の直接に知っただけでも、一年間に四組か五組あるのだ、それも皆普通の知識階級の人達である。これほど極端ではないが、もう一つの原因は、性交の時の体位が拙ますいたためにペニスが入りまい具合に入っていないことがある。このような人々はこの動作について詳細に、正しい知識を与えさえすれば、じきに望み通りの妊娠が果されるだろう。

こんな簡単な事に医者でさえ時々気付かないことがある。その医者たちに、女性は、慄おのきながら尋ねる。自分の体にはどこか異常があるのではなかるうかと。なぜならこんなに欲ほしがっている子供が出来ないのだから。だが、もちろん、こう云う助言は、本質的にノーマルな、奇形でない人々だけに適用される。親となるためのもっとも重大障害については女性だけでなく、夫婦共に医者のの忠告を求めねばならない。

罪は女性にだけあるというのが昔風の考えだった。そして「石女うますめ」であるという非難は多くの人に口に出す事の出来ない歎もたらきを齎した。しかし現在では、子供が出来ない事の欠点は、もしそれが欠点であるとしたら、女性の責任であると同様に、しばしば男性の責任であることが認められてきた。ことに夫が都市の頭脳労働者である場合に、この種の障害が多く認められる。

夫婦に取って、その子供が二人の至高の融合から生じたのではないときは、二人のその子に感じる喜びはそれぞれに異なるのがあたりまえである。しかし男というものは寛大な心を持っているものだけ

ら、妻が他の<sup>ほか</sup>の男の抱擁に身をまかせ、その事で夫に当然不快な思いをかけると云うのでない限り、やはり、妻が生んだ自分の子供に大きな喜びを感じるものだ。ここで科学の将来の可能性が出て来るのだ。十八世紀の終りには有名なハンター博士の実験があり、その後著書にもなった。例えば「王立協会会報」(一八九七年)におけるヒープや、マーシャルの教科書、「生殖生理学」(一九一〇年)を参照されたい。

妊娠している女性の夫は皆、毎日、その子供への遺伝に重要な役割を演じている。そして子供の魂の創造において大切な役目を受け持つ。その役割の潜在的な力は人智を持つては、計り知る<sup>はか</sup>事の出来ないもののように思える。

子供の魂や性格が、胎児として母親の体の中で成長しつつある間に、母親の精神的状態によって多少かれ少かれ影響を受けるといふ考えは、確實でないと一般に云われている。なぜならばこれは証明する事の出来ない問題であるし、また生命現象を科学的に理解するようになって<sup>こんにち</sup>いる今日の男性の知性にとっても受け入れ<sup>がた</sup>難いことだからである。

しかし私の知っている賢明な母親は、程度の差こそあれ、この母親の力を信じている。彼女達は皆、母親の精神的な状態と環境とが、子供の性格と精神力に根強い影響を与える事を信じる点では一致している。この問題は「輝ける母性 (Radiant motherhood)」の中に詳しく書いておいた。

この女性の見方を強調する興味ある事実が(最もこの問題に関連してではないが) マーシャルによつて引用されている。「若い動物が、先に免疫となつた雌の乳を飲んで病気に對する免疫性を得たことが発見された。病気に對する抗毒素が、胃に飲み込まれた乳の中に吸収されたのである」この特

別な事實は、化学的に説明出来る。發育しつつある胎児を廻る生理的反應の中で、母親の精神状態が「化学的遺伝」として子供の永久的性格を印するという事を否定することは出来ない。それは、無管の腺からホルモンが出る事を知る今日こんにちにおいては、何人の目にも明らかである。エリスは次のようにのべている（「性と社会」第六卷、一九一三年）。「母親こそ子供に取つては最高の親である。妊娠から出産までの間に、将来の人間の健康はひとえに母親を通じて影響を与えることが出来るだけである」。有名な博物学者、アルフレッド・ラッセル・ウォレスは、精神的要素の遺伝は可能でありそんな事でもあると考えた。私はそれが常に行われ、遺伝の要素を成し、影響している事を確信している。

### 産児調節の哲理

高潔な理想を持っている人々の中でさえ、その理想を実現出来るように、日常生活の大切な行為を合わせる事が出来ない人が多いことは、誠におかしいことだ。だから今日の社会こんにちにも、結婚した人達は例え何人子供がいようと、断じて産児制限をすべきではないなどと主張する一派がなっているのである。彼等は妊娠の調節は何によらず不道德だと考えている。我々には、生命となりうるものを破壊する権利がない、というのが彼等の主張の拠所よきどころである。だがもしも彼等がほんの少しでも人間や他の動物の生理を学んだならば、次のような事を発見するだろう。それは、あらゆる独身者ももちろんのこと、結婚している男も皆、絶えず、また必然的に数えきれない胚種を無駄に捨てているという事実である。この胚種はもともと結合する可能性を持つものであり、従つて機会が与えられさえすれば子供を創造する事の出来るものである。自然に、また必然的に死んで行くこの無数の精子の

中の一つか二つのためにこうした調節を罪惡視する人々は、次々と子供を産む事を余儀なくされ、そのため体を弱めてしまう。間隔をおいて妊娠すれば、健康を保つことが出来るであろうものを。

このような人々は、産れないもの、否受胎すらされないものの権利を認めながら、総てのうち夫に取って一番大事であるべき人、その健康と幸福とに彼が責任を負っている妻の要求に対しては眼を塞いでいる。古風な独断に左右されている男は、自分の妻に年毎に赤ん坊を産む事を放置し、また強制する。例外的な場合を除いて次々と立て続けに産まれる子供たちは、成長を遂げるための生命力をすり減らし、断ち切られる。こうして、一人一人の子供の生命力は低下し、また徐々ではあるが、子供らを産んだ母親の生命を奪うことになる。もちろん、この過労が母親の上に及ぼす影響は、彼女の本来の健康、生命力、周囲の情況、食物獲得のための家族の戦いの度合、などによって異なる。都市の貧民街の汚れた空気の中で、子供を育てようとするお腹をすかした母親は、田舎の安樂な栄養の良い母親よりも、概して多勢の子供を亡くすのが常である。とはいえ環境だけが総てではない。最上の状況にあつても、次から次と生れた大家族の、末の方の子供の死ぬ機会は、先に生まれたもののそれより遙かに多いのである。

ブレッツ博士の発見した処では、初生児の死亡率は千人中の二二〇であるのに対して七番目の子供になると三三〇、更に十二番目では五九七となる。そこで「自然」のままにすれば、十二番目の子供が母親の生命力を吸い取りにくる時には、もう彼女はあまり力がないので、この遅くやって来た子供の六十パーセント近くが死ななければならぬ。何という生命力の浪費だろう！死ぬべく運命づけられた痛ましい子供を、苦悶の中に産み落すということは、母親に取って何という恐ろしく無駄

な苦痛であらう！

フォレルは「性の問題」の中で云っている。「ある国では、若い男を売春婦の腕の中に投げこむ事を恥じない医者が、避妊法の話になると顔を赤らめる。これは全く信じられないような話だ。この医者の内気さは習慣と偏見から生れた、偽りのもので、彼は罪の無い事に対して腹を立てながら、最大の罪を奨励するに至っている」。

オランダの家庭では、子供が親の考えに基づいて妊娠されるように非常な注意が払われているので、生存率が高く、従って人口が減少せずに増加し、乳児の死亡率もヨーロッパで最低であるのは注目すべき事柄である。一方アメリカでは乱暴な「風俗壊乱取締法」が、賢明な科学的な妊娠予防と非合法の墮胎とをこっちゃんにして、双方に「わいせつ」のレットルをはり付けているので、大衆は適切な衛生学の知識を得ることが出来ない。そこで他の国よりも遙かに、恐ろしい犯罪的な墮胎が頻繁に行われている。

正しい医学的な妊娠調節法は、すでに育ちつつある胎児を破壊するのではなく、男性の精液がまだ実を結ばない卵細胞に届くのを妨げる事を目的としている。これは精液を子宮口から締め出す事、または、女性の中に侵入してくる六億の精子（そのうち一個を除いては他は全部自然に死滅してしまうのだが）を全部確実に死なすことよって成功する。子供が母親の胎内で成長しつつある時でさえも、これらの何億という精子は、男性が射出するたびごとに、必然的に、また自然的に破壊されているのだ。この自然によって行われる数億の犠牲の上に、僅か一個を加えたからといって、どうして犯罪だと云えるだろうか！ 放っておいても自然に死滅し分解してしまう射出された精子を、手つと

り早く殺すことは、実に簡単な事である。この微小な裸の物体は、酢とか水のような弱い酸、あるいは、キニーネやその他の色々な物質の溶液によって分解してしまう。この問題に対する驚くべき無知から、有毒な方法が無責任に提唱され、広く用いられている。そこで私は別な小冊子「賢明なる親(Wise Parenthood)」で、健全な方法を医学的に詳しく論じる必要を感じた。この書物の中ではまた、様々な方法の倫理的、生理的側面も考究されている。そして、あらゆる点から見て、生理的にみて最良の方法が推賞されている。

我々には自然の遂行に対して干渉する権利はないと抗議する人があるかも知れない。この人達には次の点を指摘したい。それは、人間を動物から区別させている、この文明全体が、その人達の言葉を持つてすれば、「自然」に対する干渉だということになると云う事だ。本来宇宙には自然に逆らうものは何一つない。なぜなら人間の文明を含めてその総てが宇宙の偉大な進行の一部を形成しているからである。

しかし、人間の行為というものは物事の規模により、相関的位置の違いに従って様々に異なるものである。人類をより高い満ち足りた完成と、その力の成就との方向へ導く行為のみが価値あるものである。その行為は、我々の内部を流れて、我々を前進させる生命と活力の河の主流へと、人類を導き進めるのである。

生命という靈感に満ちた贈物を伝えようとする人々に取っては、それを出来るだけ完全でふさわしい器の中に入れて伝えることが神聖な義務である。つまり生きとし生けるものの中で、特に人間の魂に奉仕する役目を担う肉体は、出来るだけ丈夫な美しい容器でなければならない。



## 第一〇章 社会

愛は、それが奪うものによつて育くまれるのではなく、それが与えるものによつて育くまれる。夫と妻のこの上ない二重の愛もまた、彼等が他人に与える愛によつて育くまれるのである。

——エドワード・カーペンター——

## 男の移り気と自惚れ

男というものは、現代の男性一般でさえ、ロマンティックなものだ。男性は、意識すると否とを問わず、その祖先が処女林で見出した自由や、美しさや、そしてまた冒険に憧れている。この憧れは文明の生活と現代の環境によつて変形され、元の面影は止めてはいないが、特に性と関連した問題の中では、無視する事の出来ない要因となつているのである。

「夫婦生活の絆」という話がでると、最もロマンティックで献身的な夫でさえ、下品な笑いや身ぶり、あるいはそれとない不快さえ見せる。もしも、まじめに親身に「結婚生活で男に取つて一番難しいことは何でしょう」と訊ねたならば、次のような真面目な後悔の念のこもつた答を受け取るだろう。その答を一口で云えばこんなものである。

「絶えざる身近さ」。

この点、殊に本当に夫と愛しあつている場合に、妻はかえつてなかなか気がつかない。妻を本当に愛している夫は、その優しさと心からの献身を、かえつて巧みに隠している。このように感情を押し

隠すことにより、二人の幸福は特に波風が立たないで平穩に続くのであるが、だからといって、夫の移り気が消え去ったりするものではない。本当に妻を愛している夫の心に潜ひそんでいるこの憧あこがれは、本当は、新しい旅に出たいという望みなのではなく、むしろ、帰るべき処へ帰るといふ微妙な喜びをも一度経験したいという憧あこがれなのである。それは、愛する妻が慣れつこになつてゐる生活をもう一度揺さぶり、あたかも物語の王子がキスする時のような別れの感激にも似たものを妻の心に燃え上がらせ、妻を新鮮な感動に奮ふるい立たせて、何ともいへぬ魅力をもう一度得ようとする憧あこがれなのである。これまでの各章を理解した方にはお分かりだろうが、何時いつも夫婦が仲よくやつてゆくためには、長年結婚生活を続けているものに取つても、常に新しい冒険が必要だ。そしてこれをやり遂げるためには、常に新しい求愛が必要なのである。

求婚すべき相手が何の妨いげもなく何時いつも身近にいて、平凡な関係が続けると、男が心からロマンティックに——ロマンスだけが求愛を本当に楽しくするのだが——求愛することはなかなか難むづかしくなる。

もちろん、大抵たいていの男は家庭を離れた遠い処に仕事場を持つてゐる。しかし中流階級の大部分の家庭生活にあつては、依然としてヴィクトリア朝の時代の因襲が圧倒的で、夫婦は日常の決まりきつた日課の中で、互いに魅力を失い、氣力を無くしてゐる。

私の知りあつた非常に思慮深いある夫婦は、互いの中のロマンティックな歓びの感情を大切にしたい、これを常に保つたために別々の家に住む工夫をしてゐた。

しかし、このような尺度は、多くの人々、特に子供のある人々に当あて嵌はめることは出来ない。だが

あえて離れ離れに住んだり（これは常に金が掛かりすぎる）、誰にも縛られない環境を持たなくとも、魂の自由を保つ方法はいくらでもある。そしてこのように魂の自由を感じてこそ、愛し合うものの結合は本当の喜びを経験することが出来るのだ。

だが、理性的な精神的な自由でさえ、今日の結婚ではなかなか手に入れ難いものである。

誰しもが考えがちな事だが、あまり理想的な結合を求めすぎて、かえって、多くの結婚が不幸になる——そんな場合が存外多いのではなからうか。理想的な一致に到達したいと熱望するのあまり、夫婦のどちらかが、意識して、あるいは無意識に、自分の意志や意見をまず相手に押し付ける。そして子供が大きくなると、今度は子供にそれを押し付ける。

このように自説を固執する癖のある男性の姿は、戯曲や小説の中ではお笑い草となっているので、こんな種類の男性はもう無くなつても良いはずなのだが、実際には決して無くなつた訳ではない。この種の男性は、あまり目立たないうちは、時には理想家だと思われるかも知れないのである。だが、これはもともと非常に狭い見解を持った理想家ではない。平和、すなわち彼の懂れている完全一致の境地は、表面的には獲得されている。しかしもっと鋭い観察力を持った人から見れば、この平和は、円満に溶け合つて得られたのではなく、押しつけと破壊とによって作られたものであることが分かるだろう。

私はこの種のタイプのロマンティックな男を知っていた。この男は明らかに無意識に妻の個性を侵害していた。妻の読む本や妻の友人を自分で選ばうと努力したばかりでなく、妻が結婚前から何年も読み馴れてきた新聞を買う事を「禁じた」。自分ら二人に取って一つで間に合うと云うのである。

その上ご丁寧にも、妻がその一つの新聞を読まないうちに、自分が持つて外出して、知らぬ顔をしているのである。この男は、自分がロマンティックな男性として、また模範的な夫として、他の人より成功しているようなふり、をしてきた。そして自分の名が書かれていない招待状を妻が受取ったりしようなものなら、自分達の完全な一致を乱すものだといってブツブツ云うのである。

### 自由とそして信頼と

一方、夫婦が二人とも、生活を理想的に近代的自由さを持つて貫こうと認めあっている家庭においても、口論や気持の行き違いは、随分在るものだ。それは真実の家庭本来の安らからで落着いた気分と平和とを台無しにしてしまう。

異つた意見を持つた二人の人間が、自分の意見を捨てずにしかも相手の意見を押し付けがましく変えさせたりせず、むしろ相手の判断の中に優やさしい信頼を寄せて、なるべく同意出来るように務めることは、世にも難しい事の一つである。

互いにそれぞれの生きかたをしている夫婦が、それぞれに美しさと誇りとを認めあうためには、よほど広く美しい心を持つていなければならぬ。

しかし、それが美しい広い心でのみ、なし得る事だということこそ、まさにそれがやる値打ちのあるものだという事を証拠立てている。

しかし、そうしないで、二人がお互いに意見が違つた場合、それを隠すとか、あるいは個性の強い方が弱い方に対して、無理にその個性を無くさせようにするならば、結果としては、双方とも個性が

弱くなつてしまふ。そして、個性の低下というこの事実そのものを通して、二人がお互いを高めあふと務めた愛そのものが冷却してしまふのである。

結婚においては、互いに相手が「理解ある者」であろうと夢みている。それぞれ相手から離れて、互いに知識と経験の宝物を探しに、世の中へ出てゆく。そしてそこで得た戦利品は、對抗意識なしに、必ず喜んでもらえるという確信を持つて相手の前に並べて見せる。だから自分達だけ大切で、他人には何の価値もない宝物が、ここでは正しい評価を与えられる。そして一つの理想の優しい、この上なく小さな芽生えが、ここでは水を与えられ、面倒を見てもらつて、やがて豊かな美となり世界に花咲こうとする。

今日の結婚生活の中では、かような優しさと励ましに満ちた評価は、むしろ大部分は女から男に対してなされるものらしい。なぜならば、これまで男は、女の見解、ことに知性的な意見を、せいぜい親切そうな笑い顔で柔らかいユーモアを飛ばしてやればいい位の物としか見ていなかったからである。よほど偉い男性でも、豊かな個性を持った現代的女性が、女の「領分」に属すると考えられている事以外の問題で、男性の「真面目な」注意に値するような事を云つたりすると、まるで思いがけない喜びでもあるかのような顔をすることがある。こうした夫は、二人を本当に結び付ける偉大さを、その結婚生活の中から奪つてしまふのである。

だが、結婚生活では、お互いの自由と、意見の尊重とが、非常に大切ではあるけれど、性格を完全に発展させるのには、それだけではまだ不十分である。生活は、たえず興味を拡げて行くようにしなければならぬ。文明生活の専門化によって個人個人が沢山のタイプに分化してきたことは、思慮

深い人々に取っては興味の深い事ではあるが、この分化と、それからもう一つには昔からの放浪本能の変形とにより、男性は仲間の生活に触れたり、それを経験したりしたい欲望を増してくる。私達の探求心は、他人の生活の中に新しく珍しい物への冒険心を常に感じるのである。

どんな高潔な人でも、またどんな複雑な人でも、個人としては、人類の数限りない能力のほんの一部分を備えているにすぎない。そこで、神秘家が有頂天うちようてんになつて、まるで全宇宙を知りつくしたように感じる、最も幸福な結婚だつて、人生経験の総てではありえないのである。二人が営んでいる生活の他に、他人の生活でなければ体験出来ないような、様々なタイプの考え方や多くの可能性があるに違いない。

完全な人間関係に取つては、配偶者が必要なのと同じように色々な友達が必要だ。しかし現在、結婚生活は、親密な友情の楽しみを奪い去ることが多い、その原因の一部は次のような社交儀礼にある。非常に進んだ社会では、もう止められているが、やはりまだ大部分の社交界では、あらゆる社交の機会に夫と妻とを一緒に招待する。そこで、食卓では離れて坐つていても、夫婦は何時いつでもお互いの話が聞こえる範囲になる。この事が、彼等の社交を楽しむ気分を弱めてしまうのである。どこかでしゃべつた事をまた繰返されるのはご免だめん——と思われまいとすることは、その人の一番よい話題を口に出させなくしてしまつたり、重大な事柄に対して本当の意見を表明し難くにくしたりする。

### 「嫉妬」と孤独への憧れ

そして、それ以上にもっと喜びを妨げるものは、大部分の人間の中にある性的嫉妬しつとの強い傾向であ

る。この点では未だに私達は原始的であり、未発達なのだ。二人のうちどちらかが怪しまれないで外出するには、少なからず信用が必要であり、この僅かな信頼でさえ、今日ではひどく立派な物に見えるほど、珍しい物になっている。

嫉妬は、明るい愛情に一番暗い影を投げかけるものの一つであって、稍々もすると、二人のどちらかの心に不信の種を蒔き、相手の生活を穩やかならぬものにする。

この感情が女と男のどちらにより強く広がるか決めることは難しい。嫉妬は色々な時に、その時々を形を取って現れる。そしてもしその人の天性にこうした素因があるならば、これを根絶することは一番難しいことだ。

習慣と、何代も続いた因習とが、我々の上に間違つた観念を押し付けているようである。それは夫婦間の貞節を守る事を強制すべきだという考えである。我々は次第にこの考えから抜け出してきている。そして今日では、若い妻に忠告を与えるたぐいの本の中には、男性には結婚後も女の友人を持つ事を許すべきだと説く一項目があるようにはなつた。

しかしこれだけでは十分でない。双方の完全な疑いのない信頼が必要である。男性でも女性でも、一人で散歩したり、訪問したり、週末旅行や徒歩旅行をしたりすることは当然な事として問題にされないほど自由でなければならぬ。そしてこの場合に、相手の心の中に、ほんの少しでも嫉妬や疑惑の影が在ってはならない。

だが多くの人はまだこのような信頼を受ける資格を持ちあわせず、自由を悪用する虞があるのは確かである。下劣な性質の人は、何時迄もその欲望を満たす方法を見付け出す。この場合、もしもこ

の人が嫉妬しつとの絆に縛られていたなら、こそこそと隠れて間違いを犯すに違いない。だが、信頼され、自由が与えられていたならば、かえって間違いを犯しにくくなるに違いない。

一方、この新鮮な汚れない自由な空気の中でのみ、本当に完全な愛が発育を遂げ得るのである。結婚関係の中では、絆を緩める事によつてのみ、一人の心を未長く結び付けることが出来る。これは絶対の真理である。

時々肉体的に適度に離れた場合に、結婚した愛する人達は最も親密な精神的結合を感じることが出来る。なぜならば、感受性の強い精神に取つては——そしてこの精神の持主だけが愛の頂点を極める事の出来る人達なのだが——別れて一人でいる間こそ、元気を回復し休養を取る時だからである。人間の魂は大変大きいので、時には近すぎてその美しさが見えないこともある。そうした時には離れて眺める必要がある。すると、本当の姿を認めることが出来るはずだ。孤独の美と楽しみについては、女性は一般に男性よりも鈍感である。それは恐らく、長い長い時代を通じて子供と家庭生活に縛られていたため、女性はこの自然が与えてくれた元気回復の手段を知らないでいるのだろう。

たまたま戯曲に取り上げられた事だけれど、私に取つてはいかにも痛切に感じられた事がある。それはシングの美しい戯曲「デューアドレ」の中で、デューアドレが恋人が竊ひそかに自分から離れたがつているのを初めて知つて何ともいえず苦しみを味わうのである。デューアドレとその恋人は七年の間変わることなく牧歌的な愛に浸つて暮っていたのだ。だから、彼女は恋人の中に、自分と離れて暮したがる心が芽ばえているのを見出した時、すべてが終つた事を感じ、自分の運命の終りを告げ、二人の喜びを弔う鐘が、打ち鳴らされるのを聞いたのである。



この女性の古風な弱さは克服されねばならず、そして現にそれは現代女性によって克服されつつある。

現代の結婚は、相手になるべく沢山たくさんの自由を与える傾向に進んでいると共に、仕事や興味の上での結合を育てている。この結合は、女性を縛り男性を退屈させる、かの純粹に家庭的なものよりも、かえって二人を高い水準に引き上げることが出来る。実際年ごとに、女性の独立と仕事の範囲は拡大しているのだが、それでもなお、結婚が、女性の知的生活に終止符をうつ場合が余りあまにも多い。女性が相手の男性と同等な知的自由と、結婚生活に於ける機会の自由を持たない限り、結婚というものは立派な物にはならない。

現在、女の大多数が、創造的な仕事に参加する自由を求めもしなければ、いかにその自由を使用すべきかも知ろうとしないという事実は、私達がまだ、女を圧迫し、女の進歩を妨げる旧い力の陰に生活しているという事を、表しているにすぎない。

女性の知的な仕事に関する、興味ある記事の中で、W・トーマスは次のように述べている。(「性と社会」一九〇七年)

アメリカの女性は、大きな自由を享樂し、専門的な学識の水準に近づきつつある。そしてある女性達は、大学の研究や試験で、首席を占めてさえいる。この場合でも、こういう女性達が、近代の結婚制度の中に巻き込まれると、その姿を消してしまうのではないかと恐れずにはいられない。そして彼女達は、得えたい体の知れぬ方法で、男性との完全な付合あひいからのけ者にされ、自分の才能を伸ばすべき道が断たれるのではないだろうか。

トーマスは、明らかにこれは我々の社会の進歩の中での一時的な現象にすぎないと見ている。そして彼は結婚した女性の力が、最も広い範囲で發揮されねばならないと、訴えている。

女性が自分で選んだ職業で十分に活動し、これに対して男性が理解ある態度を示すならば、この困難を救うのに大いに役立つだろうし、また多くの結婚を成功的なものとするだろう。

女性が自分の中に潜在している様々な能力を自然に發展させ得るならば、男性は、自分の傍らに自由で健康な配偶者であると同時に、望ましい友であり知的な仲間である一人の女性を見いだすことになるだろう。

## 女の理想

肉体と精神との結合を深める事と、家庭という堅くらしい枠の外で経験を深める事とを共に自由にしたという希望は、一見、夫婦の緊密完全な結合の理想とは全く両立し難い、矛盾したもののように入る。しかしこの矛盾は単に外見上のもので、大部分の著作家は、これを明らかにしえない。だから、「進歩的」な連中の教えや著作の中のある項目には、ただ、自由を拡張すべきだという主張が見られるだけである。自由——この自分の意志のままに彷徨うための自由——の中では、彷徨う人は自分の確固たる信念に立脚しえない。

一方には、結婚の和合の美しさだけを知って、なんでもかんでも夫婦の調和と徹底した安定性を求めてばかりいる人達もある。この連中は、広い生活経験が、結婚生活を豊かに富ますという事実を無視しがちである。彼等は結婚をさらに良いものにする生命の潮を塞き止めようとする。そして、

自分達のしていることがかえって結婚の美と豊かさなどを減らす恐れのあることには、気が付かない。新しい世代の若い人達は、自分達の内部に湧き起る二つの欲望の流れ、つまり、広い生活経験に対する憧れと、生涯の配偶者と堅く結合したいという希望との二つの流れが、必ずしも両立しないものではない事を知らねばならない。それどころか、この二つの流れこそ、彼等の未来を完全な美しいものにするため、どうしても必要なものなのだ。そしてこういう未来は、すでに彼等の生活に現れ初めているのだ。

エレン・ケイは、彼女の主著「恋愛と結婚」の中で、結婚した女性の生活を広げる事を恐れているようである。彼女は、程度の高い専門的な仕事をしたいと熱望することは、結婚した女性の中に潜む母性を萎縮させ干からびさせるものであるかのように書いています。

彼女は主に北国の人々、スカンジナビア人について書いたのであって、それが彼女の国の女性達に当て嵌まるかも知れないが、私には判からぬ。だがそれは根本的な世界的な真理ではない。私は英国人、現代の英国人について書いていたのである。むしろ私達の中にも萎縮して干からびたタイプの女性があるにはあるが、こうしたタイプは極少数であり、減少しつつある。わが国の多数の優れた女性達は結婚して母となる。その他の女性たちも、与えられた歪んだ結婚の真似事よりも、遙かに美しい結婚を望んでいる。

ステットソン夫人も次のように述べている。

母性の大切な生理機能は、人間の場合、単に生殖器官としてのみ使われることによって、十分に機能を果たすということにはならない。野蛮人の女や農婦や、その他適度に働いている女の場

合に見られるように、母親が、人間を創造するという仕事を、自然な仕事のひとつとして、無理なく営んでいる時、これらの母性機能は、かえって正しく遂行されるのである。

女性の務めが全く性的機能だけに限定されて、経済的な活動から切り離され、生計の途として性関係に全面的に頼る時には、その女性の母性は一層病的なものとなる。男性に経済的に頼りきることから生じる過度の性的発達は、かえって彼女の本質的な任務の上に好ましくない反応を与える。こう云う女性は余りにも女性的となり、完全な母性を失うようになるのだ！（「女性と経済」）

わが国の若い女性の大多数が、豊かな完全な恋愛の可能性を、身に備えている事を私は確信している。そしてまた、若い男性の大多数もそうであろう。なぜなら、優れた若い男性は、今日では一夫多妻的現実に飽き飽きしている。彼は今までに父親や友人の生活の中に、邪悪な、秘密の一夫多妻に飽き飽きしている有様を十分に見てきた。このこつそりしたやり方の一夫多妻制度は、今日の社会機構の元でいわゆる一夫単妻制度という隠れ蓑の下に隠れて、民族を墮落させているのである。

### 売春婦へ走る心理

しかし英国の現在の状態では、結婚した若い男は、いかに妻を愛していようと、一般に非常に無知で、妻の中に起こる自然の要求を、満たしてやることが出来ない。そこで、遅かれ早かれ、これに伴う絶望が訪れる。そして絶望が繰り返された末は、新奇の冒険への憧れとなる。

ある若い男が私に話したことなのだが、「上品な男は、妻が明らかに喜んでいないのが分っている

時に、無理に体を求めることは出来ない」そこで彼はやむをえず「どこか他所行く」のである。「すると我々は一夫多妻主義だと人から云われる。我々は決して一夫多妻主義ではない。しかし結婚は墮落した失敗事」だというのがこの青年の結論であつた。

その通り、彼等は一夫多妻主義者ではない。現在の、そして未来の一番立派な青年達である。今日の男性の大部分は、心底からの一夫多妻主義者ではない、外観的にはその反対の様子が見えようとも、また一人の女性に忠実であろうとする男性の数が、非常に少いという事実にもかかわらず。だが、彼等は性の法則と伝統——これは進化の遅れている種族でさえよく知りつくしている性知識のことだが——に無知なのである。だから彼等は、自分の心が本当に欲がっているものを成長させることが出来ないばかりか、かえつて押しつぶしてしまふのである。

そこで竊に（というのは、結婚生活において、男性がめつたにこの事を大つぴらに実行しないのは、少くとも表面的には幸せと見せかけているから）男性は他のタイプの社会に憧れ始める。そして「どこか他所行く」。それは、彼が完全な結婚から得られるはずの物を見付けるためでもなく、また見付ける希望を抱いて行くわけでもないのである。だがそれは、ある程度、新鮮な経験やロマンスへの憧れを満たすためであり、また別な誰かとのロマンティックな経験を結びたがつての事である。この感情は、例え欺かれたものであろうとも、この世の最も貴重な物の一つに思われるのである。

善良な女性に取つては、何が夫を自分から引き離すのかを理解することはとても難しい。大抵は全く理解出来ないようだ。彼女は自分の能力を發揮しようとしても、習慣と因襲とに縛られて、自分の興味の範囲や話題がだんだん狭くなつて行くのに気がつかない。家族生活は、無数の潮流を持つ

た大洋ではなしに、かた 囲いのある池のようなものとなりやすい。拘束やかた 囲いからは、常に抜けだそうとするのが本能である。都会においても平凡な生活では、男の冒険心を満たす機会は余りない。そして売春婦は、目新しい経験への最も手っ取り早い脱出口の一つなのである。

女性は、当然なことだが、本能的な恐れを売春婦に感じている。そして売春婦と夫との関係を思い浮かべると、ただ激しいいそお 憤りを感じるばかりで、男性の態度を理解しようと務めることも出来なくなる。

しかしながら、売春婦からは、時には純粋に肉体的なものばかりでないある要素が与えられるものである。それは大抵たいていの夫に対する関係の中に欠けているもの、歓楽の中に潜む魅力とお互いの快活さである。そしてまた売春婦は、一般に微妙な変化に富んだ刺戟法をたくさん 沢山に心得ている。これは普通の性交の上に、さらに大きな肉体的喜びを付け加えるばかりでなく、完全さと、大変健康に役立つような感じとを与える。要は夫の「たんでき 耽溺」に対して、大人おとなしい受け身な道具であることに満足しているべきではない。(余あまりに多くの妻がそうなのだが)。妻も積極的な役を演じるべきである。お互いの協力が無くては、どちらも完全な結合を成し遂げることは出来ない。

もし善良な女性がこの事を自覚したならば、彼女等は、さらに熱心に売春婦を排除しようと決心し努力すると同時に、前よりはずっと高い立場に立って、社会の欠陥が男性にもたら 齎した牢獄から、男を解放しようとする努力が始めることが出来るだろう。

恐らく、こうした社会の悪循環の始りがどこにあるかを見出すことは不可能であろう。だがそこから一步踏み出して見れば、自分がその中にいることが分るし、またある程度、その構成がどうなっ

ているかも知るだろう

## 愛情の力

男性は上品振る事によつて、また結婚生活の中の女性の立場を無視し、男女關係における自分の気まぐれを当然な権利だと思ふ事によつて、貞潔な自分の妻その一人の中に、愛の技巧により肉体的な愛情を掻き立てようとする努力を殆ど忘れ去っている。そこで、彼は自分の努力が足りない事を考えないで、妻が魅力的で無くなつてしまつたと思ひ込み、その損失を嘆く。なぜならば彼は、ロマンスと美とが失われただけでなく、完全な結合の結果として神秘的に与えられる何かより高いものを失つてしまつた事を感じるからである。彼は自分の技法の不足を咎める代りに、妻の「冷感」を非難する。そこで彼が、もし手に入れる方法を知つてさえいたならば、ちゃんと妻が彼に与える事の出来るものを、わざわざ他所へ探しに出掛けて行くのである。また妻の方は、神聖な家庭が汚された事を知つて、憤りで一杯になるが、これは無理からぬことだ。最も彼女も夫と同じように、どうしてこんなことになつたのかという本当の原因については、盲目になつてゐるのが普通だが。

どこの国においても、結婚關係の中から生れた誤りが原因となり、社会の全機構の上に様々な悪影響を投げかけてゐる。

さて、妻の輝やかしい魅力を曇らすもう一つの原因は、法律的地見地から見た妻の地位の低さである。ジアン・フィノーは「現在の状態では、情婦は結婚した女性には望めないある種の自由を保つてゐる」と云つてゐるが、この言葉は、実に重大な問題を含んでゐる。

過去の社会に起つたことは、多くの人によつて研究されているから、我々はこれを取り上げまい。現在の世代の若い結婚した人々に関係のあるのは、今日と未来とである。未来は希望に充ちている。すでに我々は、社会を構成している色々な団体の中に、新しい人間関係が成長しつつあるのを見る。もつと進んだ社会では、人間に対する愛情が総てを支配するのである。その中でも夫婦の愛情は、常に最高の生活経験となるだろう。そして、それはもはや排他的な歪められたものでは無くなるであらう。

友情、子供への愛、同志愛、仕事友達との愛は、いずれも結婚した二人のあらゆる力の発展を助けるものとなる。お互いの個性を伸ばし、それを支え合う事により、二人はいつしよに何事かを成し遂げることが出来る。それはしかし、二人が、あるいはどちらかが、萎縮した、取るに足らないような個性の持ち主であつたなら、永久に手に入れる事の出来ないようなものであるが。

人間社会の進化の傾向は、あらゆる面で人間の団結を強化する方向へと進んで来ている。そして遂に今日では、個人的な結合の段階を超えて、もつと高い段階が始まり、その共同社会が、実際に生き生きした力を持つようになってきている。

事実、コミュニテイ（政治団体、社会団体、組合など）は個々ばらばらの存在を超えたものになっている。私達がこの地上の限らない繁栄を作り上げるのは、我々の個人生活を通じてではなく、人間の共同社会を通してなのである。

共同社会と我々との関係が十分に理解されたならば、個人の健康、幸福、それに伴う様々な力は、その人自身の生活に係わりを持つだけでなく、その人も一員となっている共同社会全体に影響を及



ぼすのだということも明らかになるであろう。

完全な結婚から生れる幸福は、個人的な生活の活力を増大させ、生れ出た子供によつて社会の生き血の流れの中に、自らを加えることが出来る。そればかりでなく、結婚によつて、個人は、自分に選ばれた仕事に相応しい、完全な容器の中に入る。その仕事の成果は、社会全体が共有し、その仕事を鍛え、完成するためには、社会が一役を演じるのである。

結婚は出来るだけ完全なものでなければならぬ。また当然最も楽しいものであるべきである。そこで全社会の目的のために解放され、創造された力を、無知や窮屈な制限や、低級な考えによる無駄な憧れや失望として、無駄費いしてはならない。

この世において、幸福な夫婦は、大きな美しい灯火のようでなければならぬ。笠で覆い隠された灯火ではなく、まわりの人々の生活全体に光りを投げる灯火でなければならぬ。

## 第一章 光榮ある發展

知識をしてさらに、なおさらに發達させよ、さらば我等の中にさらに大いなる崇敬の念が宿らん。

—— テニス ——

### 性愛の神秘

我々はこの世において、余りにも驚くべき歩みや変転に取り囲まれている。だからもしそれらが順を追つて我々の周囲で起つているのでなかつたならば、とても想像も出来ないような事として、笑い飛ばされるに違いない。我々の呼吸している空気は、良く均一した目に見えない単一体だが、これが実際には二種の主要な気体と、その他の数種の気体とから成立つているのだという事を初めて知つた時は、普通の人だつて驚くに違いない。しかしながら、この二種の気体は、酒が水と混ざるように混り合つているだけである。そして、いずれも無色の気体で、一見我々が現に大氣と呼んでいる二つのガスの混合体である。

さらに偉大なのは、水の構造である。水はただ二種の気体からなつている。その一つはわれわれが呼吸している空気の全成分であり、もう一つはやはり透明無臭のもつと軽い気体である。この二つの目に見えない気体が、そのある一定のつり合いで結ばれ、溶け合うと、もはやエーテルのような目に見えない気体ではなくなり、新しい物質として凝結する。それが水である。轟く力強い大海の波も、舟を浮かべる河の泡立つ流れも、二つの目に見えない気体の結合が變化した結果にすぎない。

そして、結婚愛が次第に複雑さをまし、驚くべき変転をとげるのは、早い話が、これと大変よく似ている。ハプロック・エリスは、次のように恋愛の肉体的な側面に見られる一つの不思議な神秘について述べている。

性愛という事をよく考える時、誰でも困惑を感じるのは、その謂れが十分に分っていない事である。性愛の終局のゴールがどうしても粘膜の世界に限られるという事と、性愛の初めに世界を抱擁する大きな海のような感動を感じる事との間には、無限の食い違いがある。そこで、レミ・ド・グールモンの云ったように「この粘膜は、いづべからざる神秘によってその隠れた襞ひだの中に豊かな無限の富を包んでいる」。この神秘の前には、思想家も芸術家も兜かぶとを脱いだのである。しかし、私の目から見ると、生理学上の最近の発見は、神秘の扉の鍵を開けて、我々を真理の宮殿の大広間に導く鍵を与えているようだ。体内のホルモンは一つの器官から流れ出て、他の器官に影響を与え、そして個人の生活過程全体の性格に効果を及ぼす。男女の性的結合の時に流れる、目に見える分泌物と微妙な要素とは、お互いの生命に影響を与え、お互いに取って本質的に大切なものとなる。私には、男と女は互いに相手の器官であり、部分であるように思える。そして神秘的であると同じに厳密に科学的な意味において、夫と妻とは二人で一つの単位であり、まさに一体をなしている。「一心同体」ということは精神的に真理であるだけでなく、生理的にも真理なのである。

恋愛は、愛し合っている男女が肉体に結びあうことによって満たされるだけでなく、この結合の中から、新しい、かつてなかった一つの創造物を成長させることによって、完成されるのである。

これは、単に両観の愛から生れた肉体的な子供の事ではない。男と女の愛の完全な結合によって

創られた、超物質的な存在の事である。男女は、彼等を支えている愛の絆に結ばれば、共に一個の新しい素晴らしい物となる。それは一人と一人を加えて二人になるという以上、それと全く異つたものとなる。

だが、これまで、この新しい創造物が完成されたことは極めて稀まれであった。我々は未だに、その総ての潜在力を想像することすら出来ないままで、ただぼんやりと、それが巨大な力を持つてに違いないと感じるだけである。

青年男女は、恋愛の魅力に掻かき立てられて、何となく、しかし絶え間なく、自分の将来に無限の美しい経験のある事を感じている。愛する人との結合の中には、普通の独身生活の条件では、計り知るはか事の出来ないあらゆる種類の力が加わるだろうという風に感じる。

この予感、個々の生命に取つて真実ではなくとも、全人類に取つては真実なのである。なぜなら、今日の青年の夢の中には、未来の生活の前兆がある。

最近まで、有機体進化の一面ばかりを受け入れるように慣されてきたので、我々は、青年の中にもただ人類の歴史の簡単な繰返ししか認めないような傾向に陥つてゐる。「個体発生は系統発生の繰返しである」という古い文句が、我々の注意を次の点にばかり集中させてきたものである。つまり、発育途上の若者は、人間にあつても、他の動物におけると同様、ただ全人類がその進化の途上通過しなければならなかつた段階を次々とそのままに通り抜けてゐるにすぎないという事である。

その事自体は事実である。だがもう一つ、青年の特徴がある。それは予言的だと云うのである。

### 若者たちに知識を

青年の夢、めいめいの若い心が、自分の生命のあるうちに実現させたいと希望する夢はこれまで、満たされないままに消え失せることが多かったようだ。しかし、これは、青年のすばらしい力に、必要な道具が与えられないせいなのである。その道具とは知識である。しかし、知識に恵まれないため、奇蹟を生む事の出来る多くの潜在力が、萎縮してやがて死んでしまう。

だが、人間がもつと真剣に自分らの進み行く途を思ふなら、全人類の多くの知識と経験を、人生の入口にいる若い人々の思うままに役立つようにすべきだ。

そうすれば、汚れを知らぬ若い世代の中に現れている人類の理想の輝やかなしい芽生えを十分に伸ばすのに、これらの知識は役立つだろう。蓄積され精選された、人類の知恵の中から、必要に応じて手頃の物が用いられるだろう。

そうすれば若者たちは、今日まで殆ど誰も<sup>ほんとう</sup>が例外なく落ち込んでいた失敗や苦痛や、自分でそれと気付かない自滅から救われるだろう。

私は、私の生涯に、——比較的短く、従つて経験も貧しいかも知れないが、——自分の事でも他人の事でも、色々と苦しみを味つたが、それらは皆「知識」により、取り除かれる類のもの<sup>たぐい</sup>だった。こうした経験は、私の実験や研究が未だ完成しなくとも、その体験の印象が鮮やかな今のうちに、発表した方が良いと思つた。いかなる人にも、自分自身を理解させる助けとなるような、これまでの人間が積み重ねてきた知識の落穂を、今すぐに手渡したいという気持ちに駆り立てられた。だから、私はこの小さな書物を書く決心をしたのである。なぜなら、例え不完全なものであろうとも、ここには若い人の知らねばならない、いくつかの重大な事柄が含まれているからである。

人類の場合、あらゆる生活、家の建築、狩猟、その他総てに亘つて、知識を口伝えする伝統が行われているのは当然であるが、そうなるといわゆる「本能」はだんだん滅んでしまう。かくして人間の母親は、親猫が教えもしないのに子猫を取り扱うのに比べると、遙かに劣るのである。尤も猫と比較すれば、人間の母親は、その最善の状態では、無限の義務と影響とを子供の上に持つているが。

同様の真理が、結婚について云える。何世紀も続いた、様々な「文明」の風習は、若い人達から、当然持つべき本能的知識の大部分を奪い取り、その上、様々な虚偽の人の心を墮落させるような慣習を生み出したのである。

ところが、子供を取扱う技法について本を書く人は多いが、結婚生活の技法について語る人は殆どない。僅かな人々が、宗教的な、あるいは自然法を無視した独断を述べただけである。

結婚生活に関する基本的な真理は、己れを確かめることが非常に難しい。なぜならば、人間の心身は一人一人相違のあるもので、人間の多様性の範囲は、同じ種族にあつても、実に広いからである。その人間の多様性は、我々の文明生活の中の人為的状态と、不自然な刺戟の結果になるものが多い。このあらゆる多様な人々によって行われる結婚を、真面目に研究するというような試みは、画期的に大きな仕事となるだろう。部分的にこの研究に着手した人達がいるにはいたが、これらの人はとかく変態性という迷路に迷い込みやすく、正常で健康でロマンティックな人達の要求はかえつて見落されがちであつた。

そこで、結婚した男女は皆、しなくともいい失敗を繰返し、様々な困難な迷路の中を盲目的に彷徨つている場合が多かつた。その困難は、人類の本来の遺産ではなく、我々の現在の慣習の、何とない愚

かさによるものなのである。

特に、樂觀主義と希望を持って、正常な健康な結婚生活に入ろうとする人々のために、私はこの本を書いてきた。

こうした人々が、私の教訓を学んだならば、これまで多くの人がその幸福を難破させたある種の暗礁からは、救われるに違いない。だが、決して、これらによって容易く結婚を完成出来るのだと思つてはいけない。二人の個人が調和するためには、もっとも多くの微妙な問題があるのだ。

夫婦は皆、お互いに相手の複雑な心を扱う方法を知るために、最も優しい、最もデリケートなやり方で、お互いを調べ、試みなければならない。

むろん時には、この世の総ての全知と、善意を持ってしても、結婚した二人がその生命を結合させる事の出来ないのを発見する。このような悲劇については、私はここでは何も語らない。しかし一般に、結婚の第一日目から、相互の調整の問題が、知性的な優しさで扱われたなら、不幸はそんなに沢山生じないはずだ。

私達の内部にある最も深い、最高の力によつて、社会の理想であるところの生涯の一夫一婦制を私達は進化させるのである。思慮深い、心の優しい人は、常に大きな理解を持って、喜ぶべき自然の成長を取り逃がした者を、回復させ、慰めようと務めるべきである。また一方、枝葉の問題に熱中している改良家達も、その幹の大事な成長を忘れてはならない。若者達の心の中に芽生えた美しい恋愛感情は、育てられるべきである。そして彼等は、その感情をどのようにして養うかという知識に近づくべきである。騒がしい「自由」の叫び声によつて、その感情をぶち壊すような方向へ逸らされては

ならない。

幻滅の悲哀を感じている中年者は、結婚関係の物質的方面ばかりを見る傾向があり、毎日の経験の冷たい暗い光の中に、その硬い表面を見るだけである。一方、若者は、その白熱した夢に目がくらみ、その空気のような天上の幻想で、思いがけなく肉体的現実の困難な事実につかつた時、どんな風に破壊され、粉碎されるかに気付かないのである。

しかし、天上の幻想により物質的な事実を変形させることは、ある程度、人間の力で出来るのである。今日の不完全な人間でさえも可能なのである。

一つ一つの結婚生活を知識と愛情との二つの力で作りあげるようになれば、その新しい単位である夫婦の歓喜は、二人の肉体的な土台から立ち上って、ついには頭上の星の冠を頂く天国にまで達するであろう。



## Marie Stopes の著書

山本宣治

此著者の有せる肩書 Doctor of Science, London ; Doctor philosophiae, München ; Fellow of University College, London : F. R. S. L. ; F. L. S. で知れる通り、彼女は生物学の大家であり特に化石植物学に精通して、嘗ては東京の小石川植物園にも来て材料を集めた事もあり、日本紀行や能に關する著述もあり、其他劇や詩の創作をも有する程の趣味の人である。女史を知る或人の印象では多少神經質な理想家だというのが、斯様な人格の表現は次に掲ぐる有名な三部作の隅々に迄行渡つて居る様に、知らぬ者にも感ぜられる。アメリカでの初婚は失敗に終つたがイギリスに戻つて性改革に於ける同志 Humphrey Verdon Roe 氏と結婚し、夫妻相携えて 61, Marlborough Road, Holloway, London に一九二二年三月、初めて The Mother's Clinic を開き、直接無産者婦人を相手に産児調節の具体的智識を普及する為に努力活動して居る。尚一方 President for Constructive Birth Control & Racial Progress として花々しく論壇に陣を張つて宣伝中である。

サンガー (マーガレット・サンガー。アメリカの産児制限運動で活躍) 女史の著書とストープス女史のそれと比較して特にイギリス、アメリカの国情の対照を発見し得る点は、アメリカ合衆国では例の Comstock 箝口令あるが為に前者は公刊書に避妊技巧に就いて一言も云う自由を有せず (秘密刊行物たる Family Limitation は例外)、唯社会的に取扱うて居るに反して、慣例を重んずる「常識的イギリス」ではストープス女史の生物学的立論を拘束する法律も無く、後者は女性の Decency (良識) を傷つけぬ範囲内に於て自由無礙に「閨房の秘事」を取扱うて居る事である。尚一つの対照は前者が露骨なマルクス主義的色彩を現わし

て居るのに対し、後者は我有島武郎氏の如く智識階級の一員たるにふさわしい聡明さを以て、階級意識を精々ばかし乍ら啓蒙事業に与つて居る様に見受けられる。

斯様にして前者の公刊書は大体として医学には無関係であるが、後者の作品には既に世に認められた性智識以外に「何だかそうありそうな気持のする」種々の仮説が可成大胆に述べられて居り、臨床医家も性智識に関する婦人の心理を推測するに有益な教訓を得るであろうと思われる事が多いのが其特徴である。

(1) Married Love. 9th Ed., London. (1920) 一八〇頁、二円七十銭。

此三部作の中で之が最も世間を騒がしたもので、初版（一九一八年三月）以来版を改める事九回、出版部数は一九二一年十月迄累計十六万一千部に登つて居る。訳は既にフランス語、ドイツ語、オランダ語、デンマーク語、スエーデン語にある。之迄 Havelock Ellis という巨星はさておき、其余に性的に何の見るべき物を有しなかつた「品行方正、人格高潔」なるイギリス人が、今俄に斯様な画世紀的（しかも女性自身によつて書かれた）貢献を得るに至つた事は一種の奇蹟であるが、此書が激烈な非難を受け乍ら終にブルジョア・イギリスの上下に行渡つた事は、戦争の為に遂げた思想革命に於ける興味ある一事実である。

巻頭に英国派生理学の重鎮 E. H. Starling 教授が推讚の辞を書いて居る事が、まず吾人生物学研究者の注目を惹く点。「若き夫と其他恋愛結婚をしようとするすべての人」の為に、結婚前の女性の微妙な心理から始めて、結婚生活の中の女性、心理を科学的に且慎重な筆で描写し、女性に於て特異な表現形式をとる性愛に関して、特に夫たるべき男性の理解同情を促さんと試み、従来の無知の為に起つ

た家庭悲劇やヒステリーを減ずる為に、夫婦の相互調整の必要を説き、詳細其實行法に就いて静かな閨のさざめ言から抱擁やキスの様式に迄説き及ぼしてある。其所論は性学上大体に於て肯定さるべきものであり、学者、非学者の別無く一読の必要がある。此書の全訳の公表は日本で必要だが、今迄某婦人雑誌に一部抄訳を見た丈であるのを遺憾とする。伏字や抄録は本書にとつて無用である。時勢は変わりつつある、聡明な当局が其れを許すのも遠き将来ではあるまい。

著者の創見と見るべきは、女性性慾の周期性の事で、曲線二図を添えて説明してある。之は引例の内容が不明だから一つの Suggestion と参考迄知り置くべき丈で、尚イギリス人の間丈にても一般に適用されるは疑わしく、まして環境要件を異にする我邦の女性に早速適用し得べき説であるまい。

尚女史は古い一文献を引用して、性交に際し当事者中特に男の注意を或高遠な理想的概念に向ける事によつて射精を停止せしめ、しかも健康に害無き一種の保留性交 Coitus reservatus たるに “Karezza” の可能を説き、支那の神仙の秘法と伝えらるるもの又は道教の一部に説く所に類似したものを述べてるが、此説は俄に首肯し難い。殊に最近中絶性交に際しても、射精以前否性交開始以前に、性交慾昂進と共に尿道口より出する尿道壁及び摂護腺分泌物の一見透明な液内にも、活発な精子の存在が立証されたから、よしその秘法が健康に支障無しとするも、避妊の目的を達し得る点に於て軽々しく信用は出来ぬ。

(2) Wise Parenthood. (1921) : The Treatise on Birth Control, 7th Ed., London. 五六頁、約一円六十銭。

之は前の続篇として既婚の者に対して妊娠調節の法を説いたもの、但しサンガー女史のもの程に概

括が纏まとまって居ず、特にペッサリー使用に執着して居る嫌きらいがある。巻末に附録として彼女の「The Mother's Clinic」の歴史があるが、注目に値する。直言するならば、此三部作の中で読みごたえする点に於ては、(1)(3)の順序であり、Family Limitation を読んだ上ならば、之は寧むしろ省はぶくも可である。因みに本書 Handbook for Birth Control と銘がある為に、神経過敏な当局の早わかりする所となり、書店に「懇談的」に命じて輸入禁止したと伝えられて居るが、左程騒さわぐ程のものとも解釈致し兼ねる。

(3) Radiant Motherhood. (1920) : A book for Those Who are Creating Future. London (1920) 二二六頁、約二円七十錢。

若い夫達や将来の人間を創造して居る人々の為に記されたもの。適當の時を選えらみ進んで子を儲もつけようとする夫婦の問題を取扱とうて、貞淑な女の感情を傷つける事も無く、充分科学的に卒直な記載がしてある。

妊娠期の女の心理的不安と一種のヒステリーを男に会得させる様に述べ、胎児に対する父母の心掛けと覚悟とを固める事の要求がある。之に就ついて従来、経験に基づいた智識も無く唯独断的に妊娠と定まった後の性交は医師の厳禁する事柄であったが、ストープス女史の観察に拠れば、才色兼備の婦人の多くの告白は妊娠中に女の側から性交を欲する念が起るとの事であり、しかも子宮内の胎児に機械的圧迫衝撃を生ぜぬ様適當の位置を当事者が工夫するならば、分娩前夜の性交も無害であったとの報告を参照して、妊娠期中の性交の可能が説いてある。但し之も女の側の性交慾がある際にのみ行なすべきもので、胎児をはぐくむ殿堂は単に男のみの要求にゆだねるべきでないと断たつて

あるが、實際妊娠期性交が女によつて要求せられ、しかも一般に注意さえ行届けば無害な所を見ると、無害以上更に隠れた益があるらしい。即ち膣粘膜を通じて吸収されるらしい精液が妊婦の健康に対し又胎児の發育に対し良影響を生ずると彼女は主張して居る。尚其れに關連して妊娠期性交に於て、斯様な吸収が充分に行われる為に Orgasmus 終了後尚抱擁を精々久しく続けるならば、儲けた児は眉目秀麗の者になると説いてある。

斯様な新提唱の後の部分は充分立証された定説でなく、充分割引を必要とするが、之は特に將來臨床医家の觀察報告に俟つ事が多い。

- (一) 妊娠中の性交無害の説は近時ヨーロッパの医學者によつて是認されんとして居る。例、Forel, August (1920) : Die Sexuelle Frage, 13. Aufl. S. 90. München. 欧米人は食物の關係上かなり性交慾旺盛の男が多いためか、妊娠期性交を是認する以上に、産褥期に際して禁慾を余儀無くさざる夫の難境を同情して妻たる者は夫の自慰を助けて行わしむるもよし、斯くする事が妻をして一層夫に対する同情を増さしめ、且信頼の念を強め、夫婦の情合を深くする結果に到らしめると主張する人すらある位である。Long, H. W. (1920) : Sane Sexual Life & Sane Sexual Living. New York.

(山本宣治「山峨女子家族制限法批判」所収)

## 著者紹介

著者ストープス女史はイギリスの名高い古生植物学者である。一八八〇年（明治一三年）生れだから本年七六才になる。イギリスにおける産児調節運動の代表的指導者として聞こえ、ロンドンとマンチェスターの大学で古生植物学を講じ、一九〇四年に女性として初めてマンチェスター大学の自然科学客員に任命された。一九〇七年科学使節団の一行に加わり日本に来朝し、東大で一年半講じ、日本の各地で化石の調査を行なった、石炭と化石植物について専門的な研究に従事し著述も多い。一九一八年「結婚愛」出版の年、現在の夫ロウ氏と結婚して新しい独自の産児調節運動を展開し一九一八年「建設的産児調節のための母のクリニック」を設立した。

## 訳者あとがき

この本は、どんな風にすれば、結婚生活の中で性的調和が得られるかを説いた名著である。結婚生活が幸福であるかどうかは、その人の幸不幸を支配する。物質や「愛情」に恵まれているように見える夫婦でも、かならずしも結婚生活が幸福だとは限らない。性生活の不満と不幸が、結婚そのものの土台を脅かすことさえある。

私は、アメリカの性学者のように、肉体的な意味での性的調和だけが結婚の幸福であるとする考え方には賛成しないが、これまでの我々日本人の生活態度にも、幼稚で古くさくて封建的なものが沢山含まれていると思う。日本の男性は、色気とかエロには関心は持つても、男女の性愛についてのこの深い理解はない。女は、男の欲望を充たす道具だと心得てきたので、女の内部の自発的な欲求や複雑微妙な反応については無知であった。女の方も、それと平行して、飼いなされた単調な性的存在に止まっていた。

ところが、戦後、人間性の回復に促されて性の解放が叫ばれ、欲望の開花をみた。男女ともに、性(セックス)の新しい人間的世界を発見して、性の生活における価値を知りはじめている。しかし、社会全体として経済的貧しさがひどく、封建色が濃く、男女が人間として同等に扱われていない条件のもとでは、性観念や女性観が健康に育つわけもなく、ゆがんだ暗い現実が横たわっている。そして、何よりも、性についての無知が、その不幸をさらに深刻なものにしている。

また、人間は、自分の性生活についてたえず不安を感じているものである。独身の時代には性的に

不具かもしれないとか、自分は変態性欲かしらと感じたりする。結婚しても、自分は果して性的満足  
を十分に得ているものだろうか、相手（妻または夫）は、性的に見て適合できない相手であり、結婚  
そのものも失敗だったのではないだろうか、という風な不安が湧いてくる。こういう不安につけこ  
んで、結婚前に男女とも「性的経験」を多く積んだ者が、結婚後の性生活の成功率が多いなどという  
「迷論」が普及する。そしてまた、十分幸福になりうる夫婦でありながら、早くから相手に絶望して、  
無為な性的放浪者に陥ってしまう例もある。

性生活は、ある程度の正しい知識の土台さえあれば、たとえ二人が未経験であっても、誠実な努力  
と愛情を通して、満足な境地に達しうるものなのである。男女の性の生理的機能と愛情の働きは、そ  
れこそ弁証法的な美しい発展を遂げて、幸福の門に導かれる。

現代人の性生活には、多くの不幸が付きまといっている。性生活の深い本質への無知は別としても  
日々の生活の疲れがある。職場での夫の疲労も考えなければならぬが、苦しい消費生活のすべて  
の重荷をか、弱い両腕で受け止めている日本の妻たちの深刻な疲れはより重大な問題である。この家  
庭生活を、張り詰めた気持ちで、いじらしく支えている辛棒強い妻への、暖い行き届いた心やりが、ど  
れだけ性生活を明るく生きがいのあるものにするだろうか。

性知識について自信を持っていると称する男性も、ストープスの本を一度はぜひ読んでみるべきだ。  
この本の内容によって裏打ちされて、その自信をさらに強めてもらえば幸いであるし、これを読ん  
で、自分の性知識が、ごく上滑りなものであることに気づくとしたら、二人にとってどれほど大きな



祝福となるか分らない。人間の性生活の奥行きと広がり、無限である。浅薄な技巧の事ではなく、肉体と精神との微妙な働きにおいてである。私たちの恋愛や性についての知識や信念は、多かれ少なかれ「我流」の域を脱していない。この本を読んで、それがいかにも我流であったことに気づいてほしいのである。

それから、性生活で特に強調したいことは、愛情との結びつきである。本当の、性の喜びというものは、深い愛情と思いやりの中でなければ開花し得ないものである、という真理を説いているのが、ストープスなのである。ある人がいみじくも言ったように、性を「脊髄の性」ではなく、「大脳の性」として、動物の性ではなく人間の性として高めてゆくには、精神的な愛情と性との結びつき、女性を道具でなく人間として見る事が伴わなくてはならない。この意味では、私たち日本人の生活は、文明以前、未開の段階にあるといつて少しも言いすぎではない。

私たちがこの点に気がついて、今日の日本における男女の関係や性生活を、正しく明るく築きあげようになるならば、明日の社会を作る上で、どんなに大きなエネルギーになることだろう。社会主義の社会が資本主義の発達を抜きにして考えられないように、我々の性生活の今後の進歩も、性生活の上での人類の豊かな文化遺産の上に築かなければならない。ストープスの著書の優れている理由は、ひとえに、この性生活における民主主義的文化の最も高度な最も豊かな内容を備えているからにほかならない。しかも、その表現が、哲学的、芸術的であるばかりでなく、科学的態度を貫いていることが特色である。そして何よりも心を惹かれるのは、その中に溢れる香り高いヒューマニズムである。

私は、この本を、日本の「進歩的な」男性にぜひ改めて読んでもらいたいと思う。思想では進歩的になりえても、その生活態度の中で封建的なものを克服していくことは決して容易い事ではないからである。政治的には旧い封建制を否定することは容易であるが、家庭内の亭主関白や、夫婦生活の封建性を清算することは必ずしも容易ではない。人は、女性の存在なしに、一日も過せないという花のように、やさしい魅力のある女性の存在は、男にとって最大の生き甲斐ですらある。どの文芸作品を取ってみても、そのテーマは、男女関係であり性関係である。映画にしても、演劇にしても良い意味でのセックス・アピールを抜きにしては考えられない。私たちの生活も、文化も、性に取り囲まれ、性に貫かれていると云ってよい。それなのに、ひとたび現実の生活を振り返ってみると、愛すべき女性に対して男たちは、なぜあのように非人情で粗暴なのだろうか。性関係が大切であるというのなら、なぜその大事な性の行為の中で、女性の心と体の願いを、温かく受け入れようとするのだろうか。

一般に、男女関係の中での民主主義的態度の成長が、今日ほど要求されている時はない。「ベッドのうえでの民主主義」は、ストープスのような女性の著者によって、初めて正しく示されるのではなからうか。近着のカタログをみると「結婚愛」は、二十五版を重ね九十八万部を出している。十カ国語に訳されているというから国際的な評価も窺われる。日本でも専門家の間では定評があり、すでに古典的価値が与えられている。

この本を読んで、すべての女性は、力強い味方を得たように感じるだろう。特に、日本の多くの妻にとつては、明るい希望の光が点ぜられたように思うだろう。繰返して云うが、私はとりわけ、男性に、この本を読んで貰もらいたい。女性の中に隠かくされている世界が、このように奥深く、豊かで、起伏に富んだものであるかは、気付かないからである。結婚や性にまじめな関心をよせる男女は、ストープスの著作の中に、親切で温かい解明を見出みいすに違ちがいない。婚約中の人にとつて、この本は、必読書であるといつてよい。そして、本書の真価を知る人が口をそろえて主張するように、結婚生活を送るすべての男女、特に新婚の夫婦にとつては、この本は行き届いた指導書となるであろう。

一九五六年十二月

平井 潔

- マリー・ストープス著、平井潔訳『結婚愛』（現代教養文庫一四六、社会思想社、一九六五年八月第二一刷発行）所収。
- 「Marie Stopesの著書」は、『山本宣治全集』（汐文社、一九七九年四月）第三卷所収「山峨女子産児制限法批判」から抜粋した。
- 地名・人名は通行のものに改めた。
- 読みやすさのために振り仮名を付加した。
- 理解を助けるために適宜割注を附した。
- 科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiromeda/bbs>